中野市

YANAGISAWA

柳 沢 遺 跡

一般県道中野飯山線 道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１９．９

長野県北信建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

遺跡遠景　2017年９月撮影（南より）

遺跡遠景　2018年10月撮影（南西より）

はじめに

本書は、一般県道中野飯山線改築事業に伴う中野市柳沢遺跡の発掘調査報告書です。柳沢遺跡は、南北800m、東西650mで、高社山の山麓から千曲川沿いの低地部分まで、高低差が約60mの斜面地にある柳沢遺跡では、2006～2008年の築堤事業に伴う発掘調査で、東日本で初めて青銅器埋納坑が発見され、銅鐸と銅戈が並んで出土しました。また、弥生時代の青銅器やシカの絵が描かれた壺形土器、石器が重要文化財に指定され、全国的にも有名となりました。

柳沢遺跡は、弥生時代の集落跡として多くの人に知られていますが、縄文時代や平安時代の建物跡や遺物もたくさん見つかっています。特に平安時代では、弥生時代を上回る数の建物跡が見つかっており、同時代の中野飯山地区では最大級の遺跡の一つと言ってよいでしょう。弥生時代の遺跡として重要であると同様に、縄文時代や平安時代以降の北信濃の人々の生活を知るうえでも重要です。

今回の発掘調査は、柳沢遺跡全体からすれば、千曲川沿いの低地付近のわずかな区域ですが、築堤事業に伴う調査区の東側に隣接しており、南北２地点に分かれます。南側の調査地点では、弥生時代の水田跡がこれまで想定していた範囲よりも南側まで広がっていることと、その後の平安時代、中近世に水田域が拡大していったことが判明しました。また、従来は、弥生時代の居住域は青銅器埋納坑の北側だけと想定していましたが、今回の調査で、青銅器埋納坑を挟んで居住域が南北二つに分かれた弥生時代のムラの姿を想定できるようになりました。今後の柳沢地区の歴史を調べていく上で、新たな知見を得ました。

なお、遺跡全体の様子を解明するために、2014年から中野市教育委員会が調査を行っており、今後も継続される予定です。柳沢地区に暮らした、いにしえの人々の営みが明らかになることを期待し、本報告書がその一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、深いご理解と協力をいただいた長野県北信建設事務所、中野市教育委員会、柳沢遺跡等対策委員会、地元地権者や関係者の方々に感謝申し上げます。

例　言

1．本書は、長野県中野市大字柳沢字屋敷添他に所在する柳沢（やなぎさわ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、一般県道中野飯山線道路改築事業に伴う遺跡の記録保存を目的として、長野県北信建設事務所の委託を受けた一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。発掘調査の期間は以下のとおりである。

　発掘作業：2016～2018年度（平成28～30年度）

　整理作業：2017～2018年度（平成29～30年度）

3．遺跡の概要は『長野県埋蔵文化財センター年報』、遺跡現地説明会、速報展資料等で紹介してきたが、本書をもって最終報告とする。

4．本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図1：200,000『長野』・『高田』、1：25,000『替佐』・『夜間瀬』、1：50,000『飯山』・『中野』、および中野市基本図（1：2,500）をもとに作成した。

5．発掘・整理作業において、以下の機関に業務委託した。

　2016年度　測量：（株）写真測図研究所

　2017年度　測量：（株）写真測図研究所

　　プラント・オパール分析：（株）古環境研究所

　2018年度　測量：（株）写真測図研究所

　　プラント・オパール分析：（株）古環境研究所

　　遺物実測：（株）アルカ

6．発掘調査および報告書刊行にあたり、以下の方々、機関に御指導、御協力をいただいた（敬称略）。

　土屋積　笹澤浩　中島庄一　石川日出志　望月静雄　中野市柳沢区　中野市柳沢遺跡等対策委員会

7．発掘・整理等作業の担当者、発掘・整理作業員は表3に記載した。

8．本書の執筆分担は次のとおりである。

　第1章～第4章第1節　鵜田典昭

　第4章第2節　平林　彰、鵜田典昭

　校閲：調査部長　平林　彰、調査第2課長　川崎　保

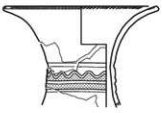
9．注は該当ページ下に、引用参考文献は各章の末尾に記載した。

10．調査資料（実測図面、写真等の記録類）および遺物は長野県立歴史館または中野市教育委員会へ移管予定である。

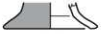
凡　例

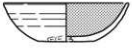
1．遺物分布図・遺構図等に示した国家座標は世界測地系の値である。
2．遺物番号は本文、挿表、遺物図版、遺構図版の遺物出土状況図、写真図版のすべてに共通する。遺物図版に実測図が掲載されていない遺物の写真には、（　）をつけて遺物管理番号を示した。
3．基本土層・埋土の色調の記録は『新版　標準土色帖2007年版』による。
4．2006~2008年に実施した千曲川替佐・柳沢築堤事業に関わる発掘調査地点を「築堤地点」と呼称する。
5．2016~2018年に実施した中野飯山線改築道路改築事業に伴う発掘調査地点（本報告書）を「県道地点」と呼称する。
6．本報告書掲載図の縮尺は原則として以下のとおりである。
（遺構実測図）
全体図（1：100、1：200）
竪穴建物跡（1：40、1：60）、掘立柱建物跡（1：60）、土坑（1：40）、溝跡（1：200）
（遺物実測図）
器形復原をした土器実測図（1：4）　土器拓本（1：3）
石製品・土製品（1：2）　石器実測図（1：2、1：3、1：4）
上記以外の縮尺も用いているが、それぞれ図中に記載している。
7．本報告書で用いたスクリーントーン等の凡例は以下のとおりである。この他のものは、各図版に凡例を付した。

遺物図


縄文

須恵器


赤彩


土師器内面黒色土器

繊維土器

遺構図
かく乱・トレンチ ……

石・礫

目　次

巻頭写真
はじめに・例言・凡例
目次
挿表目次・挿図目次・写真図版目次・添付DVD収録データ

第１章　調査の経過
第１節　調査に至る経過
1　事業計画の概要…… 1
2　埋蔵文化財の状況…… 2
3　保護調整の内容…… 2
4　行政手続きの経過…… 4
5　発掘調査の体制…… 4
第２節　発掘作業と整理作業の経過
1　発掘作業の方針…… 5
2　発掘作業の工程…… 5
第３節　整理作業の経過
1　整理作業の方針…… 6
2　整理作業の工程…… 6
第４節　普及公開活動の経過
1　現地説明会等…… 6
2　展示会・報告会等…… 6
3　年報・発掘だより…… 7
第５節　調査日誌抄録
1　発掘作業…… 8
2　整理作業……11

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境
1　遺跡の位置……12
2　遺跡の範囲……12
3　遺跡周辺の地形環境……15
第２節　歴史的環境
1　周辺の遺跡……16
2　歴史事象……21

第３章　調査の方法と成果
第１節　調査の方法
1　遺跡記号と遺構記号……23
2　調査区とグリッドの設定……23

3　表土の掘削と遺構の調査……25
4　記録作成……25
5　自然科学分析……27
6　整理作業の方法……27
第２節　基本土層と遺構の概要
1　基本土層……28
2　遺構の概要……31
第３節　縄文時代の遺構と遺物
1　概要……36
2　縄文時代の遺構……36
3　縄文時代の遺物……38
第４節　弥生時代の遺構と遺物
1　概要……52
2　弥生時代の遺構……52
3　弥生時代の遺物……57
第５節　古墳時代の遺物
1　概要……68
2　古墳時代の土器……69
第６節　平安時代の遺構と遺物
1　概要……70
2　平安時代の遺構……70
3　平安時代の遺物……74
第７節　中世以降の遺構と遺物
1　概要……77
2　中世以降の遺構……77
3　中世以降の遺物……80
第８節　自然科学分析
1　概要……81
2　分析結果……82

第４章　総括
第１節　調査成果
1　築堤地点の調査成果の概要……85
2　県道地点の調査成果の概要……87
第２節　今後の課題……102

遺物観察表……105
写真図版
添付DVD

挿表目次

第１表　文化財保護法に関わる諸届…… 4
第２表　受託契約一覧…… 4
第３表　調査体制…… 4
第４表　周辺の遺跡地名表……18
第５表　地区別遺構数……31
第６表　B2区仮グリッド別縄文土器出土点数
……38
第７表　縄文時代の石器器種組成……42
第８表　D区ピット群土坑一覧……70
第９表　中世以降の土坑一覧……78
第10表　分析試料のプラント・オパール数……83
第11表　築堤地点縄文時代石器器種組成……89
第12表　築堤地点弥生時代石器器種組成……92
第13表　築堤地点中近世の出土遺物集計……99

挿図目次

第１図　柳沢遺跡と中野飯山線道路改築事業
工事区間（柳沢地区）…… 1
第２図　発掘調査範囲と調査区名…… 3
第３図　遺跡の位置……13
第４図　遺跡の範囲……14
第５図　柳沢村絵図のトレース図……15
第６図　周辺の遺跡……17
第７図　築堤地点と県道地点の調査区……24
第８図　調査区とグリッドの設定……26
第９図　基本土層……29
第10図　調査区と基本土層記録地点……30
第11図　A区の遺構配置図……32
第12図　B区の遺構配置図……33
第13図　C区の遺構配置図……34
第14図　D区の遺構配置図……35
第15図　縄文時代の遺構……37
第16図　B区遺物包含層（SQ54・SQ59）……39
第17図　縄文時代の土器１……43
第18図　縄文時代の土器２……44
第19図　縄文時代の土器３……45
第20図　縄文時代の土器４……46
第21図　縄文時代の土器５……47
第22図　縄文時代の土器６……48
第23図　縄文時代の土器７・土製品・ミニ
チュア土器……49
第24図　縄文時代の石器１……50
第25図　縄文時代の石器２……51
第26図　SB62（SQ51）……53
第27図　SD91……54
第28図　遺物包含層の弥生時代土器出土状況
（SQ53・53b）……55
第29図　遺物包含層の弥生時代土器出土状況
（SQ55～57）……56
第30図　弥生土器文様の呼称……59
第31図　弥生時代の土器１（中期後半）……61
第32図　弥生時代の土器２（中期後半）……62
第33図　弥生時代の土器３（中期後半）……63
第34図　弥生時代の土器４（中期後半）……64
第35図　弥生時代の土器５（中期後半）……65
第36図　弥生時代の土器６（中期後半・後期）
……66
第37図　弥生時代の土製品・ミニチュア土器…67
第38図　弥生時代の石器……67
第39図　古墳時代の土器出土状況……68
第40図　古墳時代の土器……69
第41図　平安時代の遺構……71
第42図　平安時代の土器出土状況１……72
第43図　平安時代の土器出土状況２……73
第44図　平安時代の土器１……75
第45図　平安時代の土器２……76
第46図　平安時代の鉄製品……76
第47図　中世以降の遺構１……77
第48図　中世以降の遺構２……79
第49図　中世以降の遺物……80

第50図　分析試料採取地点……81
第51図　分析試料採取地点の土層断面……82
第52図　築堤地点縄文時代の遺構……89
第53図　築堤地点縄文時代の土器１……90
第54図　築堤地点縄文時代の土器２……91
第55図　築堤地点弥生時代の遺構……92
第56図　築堤地点古墳時代の土器と出土状況…93
第57図　築堤地点平安時代の遺構と平安時代の土器１……94
第58図　築堤地点平安時代の土器２……95
第59図　築堤地点平安時代の土器３……96
第60図　築堤地点中近世の遺構……97
第61図　築堤地点中近世の遺物……98
第62図　県道地点Ａ・Ｂ区と築堤地点…… 100
第63図　県道地点Ｃ・Ｄ区と築堤地点…… 101
第64図　柳沢遺跡全体図…… 103

写真図版目次

PL１　各地区の土層
PL２　遺跡遠景１
PL３　遺跡遠景２・遺構１
PL４　遺構２
PL５　遺構３
PL６　遺構４
PL７　遺構５
PL８　遺構６
PL９　縄文時代の土器１
PL10　縄文時代の土器２
PL11　縄文時代の土器３
PL12　縄文時代の土器４
PL13　弥生時代の土器１
PL14　弥生時代の土器２
PL15　弥生時代の土器３
PL16　弥生時代の土器４
PL17　弥生時代の土器５
PL18　古墳時代の土器・平安時代の土器１
PL19　平安時代の土器２・中近世の土器
PL20　縄文時代・弥生時代の石器

添付DVD収録データ

報告書 PDF
遺物観察表
挿表データ
自然科学分析報告書
調査写真
台帳データ

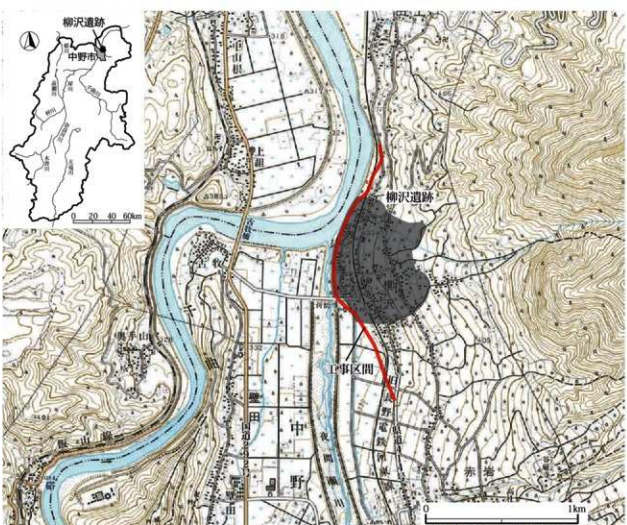
第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

１　事業計画の概要

長野県北信建設事務所（以下「建設事務所」という。）は、県道414号線（中野飯山線）を「中野地域と飯山地域を南北に結ぶ補助幹線道路である。2002年の長野電鉄木島線の廃線後、代替バス路線として通勤通学の重要な生活道路となっている。また、2015年３月の北陸新幹線飯山駅開業以降は、中野地域からの新幹線アクセス道路及び湯田中、志賀高原方面への観光道路としての地域の期待が高い」路線であると位置づけ、同路線の柳沢地区以南で若宮、赤岩、東笠原の各バイパスを建設し、それぞれ2004年、2006年、2012年に供用を開始している。

柳沢地区の全長1,885mの区間についても、「人家連担の集落内幅員狭小区間であり、歩行者の安全確保および円滑な交通の確保のため」、2015年から2021年までの予定で、建設が計画された（第１図）。



第１図　柳沢遺跡と中野飯山線道路改築事業工事区間（柳沢地区）（１：25,000）

2　埋蔵文化財の状況

（1）発掘調査履歴

柳沢遺跡に関わる発掘調査と調査機関は下表のとおりである。下表の調査地点は第２図に示す。

№.	調査年度	調査機関	調査内容	調査地点
①	2005・2006（平成17・18）年	中野市教育委員会	試掘調査	
②	2006～2008（平成18～20）年	長野県埋蔵文化財センター	千曲川替佐・柳沢築堤事業に伴う発掘調査	
③	2009・2010（平成21・22）年	中野市教育委員会	確認調査	1・2
④	2016（平成28）年	中野市教育委員会	試掘調査（範囲確認）	3～5
⑤	2016～2018（平成28～30）年	長野県埋蔵文化財センター	一般県道中野飯山線 改築事業に伴う発掘調査	A～E
⑥	2017・2018（平成29・30）年	中野市教育委員会	確認調査	6

（2）発掘調査の概要

①　中野市教育委員会による築堤地点の試掘調査

2005年10月24・25日、2006年10月19日～23日、11月６日～10日に、中野市教育委員会（以下「市教委」という。）が築堤予定地の試掘調査を行い、水田跡、弥生時代、平安時代の遺物が出土した。試掘調査の結果を受けて、築堤予定地の14,700㎡が本調査の対象地（以下「築堤地点」という。）となる。

②　長野県埋蔵文化財センターによる築堤地点の発掘調査

千曲川替佐・柳沢築堤工事に伴い、長野県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という。）が2006～2008年度に発掘調査を実施した。縄文時代から近世の遺構と遺物が発見された（県埋文センター2012）。2014年８月には、出土した弥生時代の銅鐸、銅戈、土器など212点が重要文化財に指定された（第２図）。

③　市教委の確認調査

2009・2010年に中野市教委が確認調査を実施した。わずかに遺物が出土したが、遺構は見つからなかった。

④　市教委による県道地点の試掘調査

2016年５月26日～６月17日に、市教委が柳沢遺跡外縁部の道路建設予定地内の３地点で範囲確認のための試掘調査を行った。遺構および遺物は確認されなかったため、遺跡範囲の変更は必要ないと判断され、柳沢遺跡範囲内の道路用地部分が本調査の対象地（以下「県道地点」という。）となる。

⑤　県道地点の発掘調査（本報告書調査地点）

一般県道中野飯山線改築工事に伴い、県埋文センターが2016～2018年度に発掘調査を実施した。道路などを境にA～E区の５つの調査区に区分して発掘調査を行った（第２図）。

縄文時代では中期後葉～後期前葉の遺物、弥生時代では中期後半から後期前半の水田に関連する溝跡や遺物集中、平安時代では土坑と遺物集中などを検出した。詳細は後述する。

⑥　市教委による確認調査

2017・2018年に中野市教委が確認調査を実施した。わずかに遺物が出土したが、遺構は見つからなかった。

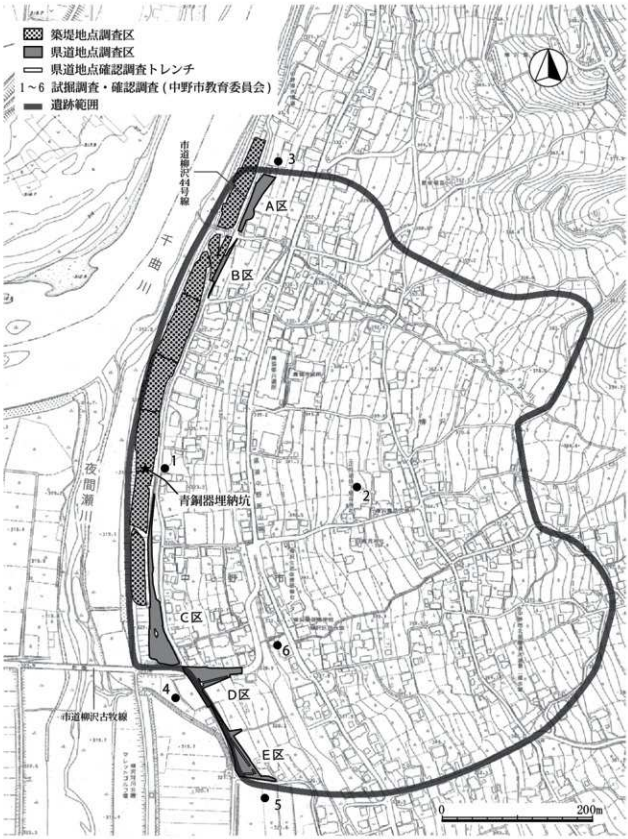
3　保護調整の内容

中野飯山線道路改築事業の路線が、築堤地点に隣接しており、柳沢遺跡を南北に縦断することから（第１図）、2015年12月18日に、建設事務所、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）、市教委、県埋文

センターの四者で協議を行い、以下のことを決定した。

①2016年に用地買収完了箇所について市教委が試掘調査を行い、遺跡範囲を確定する。

②道路改築に伴う柳沢遺跡の保護措置は発掘調査とし、県埋文センターに委託し実施する。



第２図　発掘調査範囲と調査区名（１：5,000）

2017年度のＢ・Ｄ区の調査結果を受けて、建設事務所、県教委、市教委、県埋文センターの四者で再協議した結果、調査区に隣接する市道柳沢44号線部分（Ｂ２区）と市道柳沢古牧線部分（Ｄ２区）の調査を、2018年度に実施することとなった（調査区の細分については、第２節参照）。なお、Ｄ２区では迂回路設置のため、一部に調査できない部分が生じることとなり、特に重要な遺構、遺物が発見された場合は、再協議を行うとの県教委の指導であったが、当該箇所に隣接して遺構は発見されなかった（第２・４図）。

4　行政手続きの経過

（1）文化財行政関連

建設事務所は、文化財保護法第94条に基づき、2016（平成28）年３月24日付け27北建第324号で「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」を提出し、県教委は埋蔵文化財の発掘調査を県埋文センターに委託して実施する旨を建設事務所に通知した（2016（平成28）年３月29日　27教文８－389号）。県埋文センターは、2016年度から建設事務所と埋蔵文化財発掘調査委託業務を締結し、今年度の報告書刊行に至るまで、４か年にわたる事業を実施することとなった（第１・２表）。

第１表　文化財保護法に関わる諸届

調査年度	発掘届（法92条1項）		発掘許可通知（法92条2項）		発掘終了報告		埋蔵物発見届（遺失物法）		埋蔵文化財保管証		文化財認定（法 102 条）	
	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号
2016年度（本調査）	2016.8.30	28 長埋第 9-5 号	2016.9.5	28 教文第 6-8号	2016.12.5	28 長埋第12-5号	2016.12.5	28 長埋第10-5号	2016.12.5	28 長埋第11-5号	2016.12.12	28 教文第20-87号
2016年度（確認調査）	2016.10.31	28 長埋第 9-6 号	2016.11.7	28 教文第 6-9号	2016.12.5	28 長埋第12-6号	2016.12.5	28 長埋第10-6号	2016.12.5	28 長埋第11-6号	2016.12.12	28 教文第20-86号
2017年度	2017.3.3	28 長埋第 9-10号	2017.3.13	28 教文第 6-16号	2017.10.5	29 長埋第 4-2号	2017.10.5	29 長埋第 2-2号	2017.10.5	29 長埋第 3-2号	2017.10.11	29 教文第20-41号
2018年度	2018.7.23	30 長埋第 2-2 号	2018.8.1	30 教文第 6-4号	2018.12.4	30 長埋第 5-2号	2018.12.4	30 長埋第 3-2号	2018.12.4	30 長埋第 4-2号	2018.12.13	30 教文第20-71号

第２表　受託契約一覧

年度	埋蔵文化財発掘調査業務名	契約期間	契約額（円）	作業内容
2016年度	平成28度 社会資本整備総合交付金(広域連携)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務	2016.8.1～2017.3.24	12,916,800	発掘作業 基礎整理作業
2017年度	平成28度 社会資本整備総合交付金(広域連携)(ゼロ県債)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務	2017.3.15～2018.3.20	58,590,000	発掘作業 基礎整理作業 本格整理作業
2018年度	平成30年度 防災・安全交付金(道路)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務	2018.4.4～2019.3.20	37,076,400	発掘作業 基礎整理作業 本格整理作業
2019年度	平成31年度 防災・安全交付金(道路)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務	2019.4.1～2019.9.26	2,499,591	発掘調査報告書印刷製本

5　発掘調査の体制

調査体制は、第３表のとおりである。なお、2019年度は、発掘調査報告書の印刷製本の委託業務のみを実施した。

第３表　調査体制

年　度	所　長	調査部長	担当課長	調査研究員
2016年度	会津敏男	平林　彰	川崎　保	鶴田典昭　石丸敦史
2017年度	会津敏男	平林　彰	川崎　保	鶴田典昭　長谷川桂子
2018年度	会津敏男	平林　彰	川崎　保	鶴田典昭　杉本有紗
2019年度	原田秀一	平林　彰	川崎　保	
発掘作業員（2016年度～2018年度） 石井　博　池田道保　岡村文雄　坂本清一　徳竹知徒　徳竹寿幸　橋内賢裕 柴草高雄　小林七三男　中島英子　藤沢豊治　望月悦夫　清水秋子　真鍋正二 伊東宣和　丑山　弘　藤澤和枝				
整理作業員（2016年度～2018年度） 荒井君江　荻原幸子　田中富子　宮下亜衣香　諸藤享子　柳原澄子				

第２節　発掘作業と整理作業の経過

１　発掘作業の方針

県埋文センターが2006～2008年度に行った築堤地点の発掘調査では、縄文時代から近世の複合した集落跡を発見した。なかでも、弥生時代の銅戈６本と銅鐸１個が埋納坑に安置された状態にあり、その後、銅戈２本と銅鐸４個も同じ埋納坑にあったことが明らかになり、弥生時代の武器型青銅器と初期の銅鐸がセットで埋納された東日本初の事例として耳目を集めた。築堤地点は、青銅器埋納坑（祭祀域）とともに、南側の水田跡（生産域）と埋納坑の北側にある礫床木棺墓群（墓域）、さらにその北側にある竪穴建物群（居住域）で構成される集落跡の一画にあたり、その東に隣接する県道地点のＣ区や、南へ続くＤ・Ｅ区での調査は、築堤地点で見つかった遺構群との関連を把握することが主眼となった。

また、築堤地点の滝ノ沢川付近では、縄文時代後期の敷石住居跡を伴う集落跡も確認している。したがって、Ａ・Ｂ区では当該期の遺構の発見も期待されるところとなった。

全体として、築堤地点の遺構群との関連を把握するとともに、南北の遺跡範囲を確定することを、今回の調査の主目的とした。

２　発掘作業の工程

発掘作業は2016～2018年度の３か年に分けて実施した。

（１）2016年度

Ａ区の本調査およびＣ・Ｄ・Ｅ区の確認調査を実施した。法面バケットを装着した0.25㎥バックフォーで幅1.5mのトレンチを掘削し調査した（第２・４図）。

Ｃ区では平安時代の遺物集中箇所、Ｄ区では弥生時代と平安時代の遺構と遺物を確認したが、Ｅ区には遺構・遺物がなかった。県教委や市教委との協議の結果、Ｅ区は本調査不要と判断され、Ｃ・Ｄ区は2017年度に本調査を実施することとなった。

（２）2017年度

Ｂ・Ｃ・Ｄ区の本調査を実施した。

Ｂ区：現道（市道柳沢44号線）の東側の畑部分（B1区）で多量の縄文土器と遺構を確認した。

Ｄ区：現道（市道柳沢古牧線）の南側の畑部分（D1区）で弥生時代の遺構を確認した。

それぞれ、現道下に遺構や遺物が広がることを予想し、建設事務所・県教委・市教委との協議の結果、Ｂ区の現道下（築堤地点との間の幅２ｍの未調査部分）をB2区、Ｄ区の現道下をD2区として、2018年度に本調査を実施することとなった。

（３）2018年度

B2・D2区の本調査を実施した。

B2区は、縄文時代の遺構・遺物を確認した。なお、中央付近は上水道管の敷設によって、すでに遺物包含層は削平されており、県教委により調査不要と判断された。

D2区は、弥生時代と平安時代の遺構・遺物を確認した。

第３節　整理作業の経過

１　整理作業の方針

県道地点の発掘作業の結果、築堤地点から連続する遺構が認められた。築堤地点の調査成果との比較検討を通し、県道地点の調査成果を評価できるように整理を進めることとした。

県道地点の調査では、築堤地点に比べ遺構、遺物の数量が少なく、包含層から出土する遺物が多い。遺物は調査区全体に浸然と出土するのではなく、出土する場所は限られている。これらを遺物集中としてとらえた。時期別に遺物集中の遺物分布状況を明らかにすることで、遺跡全体の中で出土遺物の評価を行うこととした。

なお、発掘作業での遺物出土地点の記録および遺構測量にデジタル技術を用いており、整理作業でもデジタルデータによる図面作成作業を行った。

２　整理作業の工程

遺物洗浄・注記、図面整理、写真整理等の基礎整理は発掘作業の当該年度にそれぞれ実施し、2017・2018年度に遺物の接合・復元・分類・観察・実測・トレース、遺物・遺構図版の作成、原稿執筆等の本格整理作業を実施した。

遺物接合は遺構単位で行い、遺構間の接合作業は実施していない。ただし、遺物集中箇所などの重複部分がある遺構については、重複する遺構群を一単位として遺構間の接合作業を実施した。

第４節　普及公開活動の経過

１　現地説明会等

2016年度　中野市倭小学校の遺跡見学と発掘体験（10月24日）
2017年度　長野市豊井小学校の遺跡見学と発掘体験（７月10日）
　　中野市倭小学校の遺跡見学と発掘体験（７月12日）
　　遺跡説明会の実施（９月14日・15日）
2018年度　中野市倭小学校の遺跡見学と発掘体験。（10月11日・12日）

２　展示会・報告会等

・北信合同庁舎一階ロビーにて「柳沢遺跡発掘調査速報展」を実施（2017年12月４日～15日）
・中野市中央公民館にて講演会・シンポジウム「中野の弥生文化と地域間交流」を実施（2018年３月３日・４日）
・平成30年巡回展「長野県の遺跡発掘2018」にて、弥生時代土器等を展示
　長野県立歴史館（2018年３月17日～６月３日）
　長野県伊那文化会館（2018年７月13日～８月２日）
　塩尻市立平出博物館（2018年８月11日～９月17日）
　浅間縄文ミュージアム（2018年９月29日～11月25日）

・長野県埋蔵文化財センター出土品展「掘るしん in しののい2019」にて、縄文・弥生時代の土器石器を展示（2019年２月14日～２月22日）

３　年報・発掘だより

長野県埋蔵文化財センター年報33～35

柳沢遺跡発掘だより（１～７号）2016～2018年度

倭小学校体験発掘（2016）

倭小学校体験発掘（2017）

倭小学校体験発掘（2018）

倭小学校体験発掘（2018）

柳沢遺跡発掘調査速報展（2017）

遺跡説明会（2017）

第５節　調査日誌抄録

１　発掘作業

（2016年度）

10月 3日　現場プレハブ・トイレ設置。A区トレンチ調査開始

10月 4日　A区南表土掘削開始

10月 6日　発掘作業員作業開始

10月 7日　基準点設定

10月11日　A区南表土掘削終了。トレンチ調査の結果、A区北の面的調査は不要と判断。A北区トレンチ埋戻し終了。A区南の遺構調査開始（～10月27日）

10月13日　A区南全景写真撮影

10月24日　A区南地形測量。倭小学校遺跡見学、発掘体験（６年生９名）

10月25日　発掘作業員作業終了

11月 1日　A区南埋戻し（～11月９日）

11月 8日　C～E区確認調査開始

11月10日　D区トレンチ調査で弥生時代土器等が出土し、土坑を確認

11月11日　D区確認調査終了。E区確認調査開始

11月15日　E区確認調査終了

11月18日　C区確認調査開始。須恵器・土師器・灰釉陶器出土

11月22日　E区調査終了

11月24日　C～E区埋戻し終了

11月29日　発掘作業の終了にともない，埋戻し状況を確認して発掘調査区を建設事務所に引渡し

11月30日　現場プレハブ、トイレ撤去

（2017年度）

4月13日　現場プレハブ・トイレ設置

4月14日　D区表土掘削開始

4月20日　発掘作業員作業開始

4月28日　C1区調査開始

5月 2日　C1区で平安時代の土器が多数出土

5月 9日　C1区で弥生時代中期後半の土器出土

5月 9日　D区で弥生時代竪穴建物跡（SQ51）を確認

5月 9日　D区基準点・グリッド設定

5月16日　C区単点測量等

5月17日　県教委は、D区弥生時代竪穴住居跡（SQ51）の北

A区の調査（2016）

A北区トレンチの調査（2016）

E区の確認調査（2016）

C1区の調査（2017）

個を可能な限り調査するように指導。現在の調査範囲を一旦埋戻し後、再調査

5月18日　B区確認調査開始

5月23日　D区埋戻し終了

5月26日　B区表土掘削開始

6月 2日　B・C区単点測量等

6月 9日　C2区表土掘削開始

6月13日　B区の単点測量等

6月19日　D区拡張部調査開始

6月23日　B区隣接の市道柳沢44号線の未調査部分の扱いについて県教委、市教委と協議

7月10日　豊井小学校遺跡見学、発掘体験（6年生12名）

7月12日　倭小学校遺跡見学、発掘体験（5・6年生15名）

7月13日　B～D区基準点設定、単点測量

7月20日　B区埋戻し終了

7月21日　D区埋戻し終了

8月 9日　C区単点測量、地形測量

8月29日　C1区調査終了

9月 4日　遺構を被覆するⅢb層を掘下げSD91遺構を検出

9月 4日　プラント・オパール分析用土壌サンプル採取

9月 8日　C1区埋戻し終了

9月14日　柳沢遺跡現地公開（～9月15日）、延べ36名の見学者

9月21日　発掘作業終了
明治大学石川日出志教授が現地指導

9月28日　発掘作業員作業終了

10月 2日　C2区埋戻し終了

10月 5日　発掘調査区を建設事務所に引渡し

10月 5日　現場プレハブ・トイレ撤去

（2018年度）

6月27日　柳沢古牧線道路切り回しに伴う水路掘削部の工事立合い（～7月9日）

9月 5日　D2区表土掘削開始

9月 6日　現場プレハブ・トイレ設置

9月10日　発掘作業員作業開始

9月11日　D2区で織旗立用の土台石を測量後、撤去。石垣（SH33）を検出

9月13日　D2区で弥生時代中期と平安時代の遺物包含層を確認

D区の調査（2017）

B区の調査（2017）

C2区の調査（2017）

C2区の調査（2017）

9月19日　D2区西側で近代の棚田状の水田区画を検出し、西端部は遺物包含層が削平されていることを確認
9月20日　B2区表土掘削開始
9月26日　B2区基準点設定
10月 4日　B2区の礫層の記録。中野市中島庄一氏現地指導
10月 9日　B2区で土坑を検出
10月11日　倭小学校発掘体験（５・６年生）
10月12日　倭小学校発掘体験（３・４年生）。D2区で弥生時代中期後半の土器集中（SQ58）を確認
10月16日　D2区の遺物包含層上層部分に土器の小破片が多いことから、水田等の耕作の可能性を想定
10月18日　D2区のSQ58東側調査範囲拡張。プラント・オパール分析土壌採取
10月19日　D2区の北壁土層断面図実測
10月23日　飯山市望月静雄氏現地指導
10月24日　D2区の調査面を下げるため調査区を囲む排水溝を掘下げ
10月26日　田中義昭元島根大学教授他１名視察
B2区の土坑掘下げ開始。SQ59（縄文時代中期土器主体）の礫層中から弥生中期土器が１点出土。
D2区SQ58出土土器単点測量
10月30日　空中写真撮影。地形測量
10月31日　B2区SQ59から打製石斧と石鏃が出土
11月５日　B2区調査終了。埋戻し
11月８日　D2区調査終了。埋戻し
11月９日　土器洗い、遺物整理（～11月15日）
11月16日　発掘作業員作業終了
11月20日　現場プレハブ・トイレ撤去
11月30日　発掘調査区を建設事務所に引渡し

C2区の調査風景（2017）

石川日出志教授現地指導（2017）

D2区の調査（2018）

B2区の調査（2018）

D2区の石垣（SH33）（2018）

2　整理作業

（2016年度整理作業）

12月 1日　基礎整理作業開始
12月 5日　遺物、記録図面、写真整理（～12月12日）
12月 8日　遺物台帳作成（～１月24日）。写真台帳作成（～12月10日）
12月15日　遺構平・断面図照合・修正（～12月20日）
12月20日　遺構台帳作成（～１月12日）
12月22日　遺構個別図出力作業（～２月14日）
1月24日　図面台帳作成（～２月10日）
2月 1日　遺構所見カード作成（～３月17日）
2月16日　デジタルカメラインデックス出力、フィルム写真のアルバム収納・注記
2月22日　遺物注記
3月17日　基礎整理作業終了

（2017年度整理作業）

10月10日　基礎整理作業開始。遺物台帳作成（～10月12日）
10月12日　写真整理（～10月27日）
10月20日　遺構図デジタルトレース（～11月27日）
11月17日　図面台帳作成（～11月20日）
12月 1日　遺物注記（～12月11日）
12月 4日　柳沢遺跡発掘調査速報展実施（北信合同庁舎１Ｆロビー）（～12月15日）
12月10日　柳沢区民会館にて発掘調査報告会を実施
12月18日　写真アルバム注記（～12月21日）
12月20日　石器分類（～12月26日）
1月11日　土器分類および接合（～３月６日）
1月25日　遺物管理台帳作成（～３月６日）
2月 5日　土器復元（～３月12日）
3月16日　基礎整理作業終了

（2018年度整理作業）

4月 4日　整理作業員作業開始。土器分類（～４月11日）
4月 9日　遺物台帳データ入力（～４月11日）
4月12日　目次案作成。原稿執筆開始
5月15日　遺物実測開始（～１月30日）
5月25日　石器分類と報告書掲載石器抽出
6月21日　土器拓本・実測図トレース（～１月30日）
7月12日　土器復元（～９月10日）
11月13日　土器図版版組（～３月７日）
11月19日　土器整理（～１月30日）
11月22日　写真整理（～２月25日）
11月28日　石器整理（～２月20日）
12月 7日　図面整理（～12月10日）
12月10日　遺構全体図作成（～12月20日）
1月18日　遺物注記（～１月22日）
3月15日　整理作業員作業終了

（2019年度整理作業）

4月 3日　原稿内部校正（～６月５日）
7月10日　原稿を印刷業者へ入稿
9月13日　発掘調査報告書納品

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

１　遺跡の位置

柳沢遺跡は長野県中野市柳沢地籍、県北部の長野盆地と飯山盆地の境界部に位置する。盆地境にそびえる高社山西麓の裾野である。西側には蛇行する千曲川が流れており、遺跡付近で夜間瀬川と合流して北流する。柳沢遺跡は、その攻撃面に位置している（第３図）。

千曲川は、長野県川上村を源流とし新潟県に入り信濃川と名称を変え日本海に至る全長367kmの河川である。その西側にはJR飯山線が走っており、蓮（はす）駅が柳沢遺跡の最寄り駅である。また、遺跡の西側を走る国道292号線は、古牧橋を経て、国道117号線へと続き、新潟県十日町へと続く幹線道路であり、遺跡内には赤岩、柳沢、田上の集落を結ぶ県道414号線が南北に貫いている。このように、河川や鉄道、主要道路が錯綜する場所である。

２　遺跡の範囲

中野市の遺跡地図によると、柳沢遺跡の包蔵地の範囲は東西600m、南北800mに広がり、現在の柳沢地区にほぼ相当する（中野市教育委員会2014）（第４図）。県道地点の調査範囲は、屋敷添、日焼、船場の小字にかかる。

遺跡の東側は高社山の山腹で、詳細は不明で遺跡範囲が確定しているわけではない。一方、西側は、従来、堤防部分は遺跡範囲外であったが、市教委の試掘調査等で、第４図に示したとおり遺跡範囲に含まれるようになった。築堤地点の調査で、弥生時代の生産域、祭祀域、墓域、集落域が検出され、遺跡の西縁辺部の様相が明らかとなった。

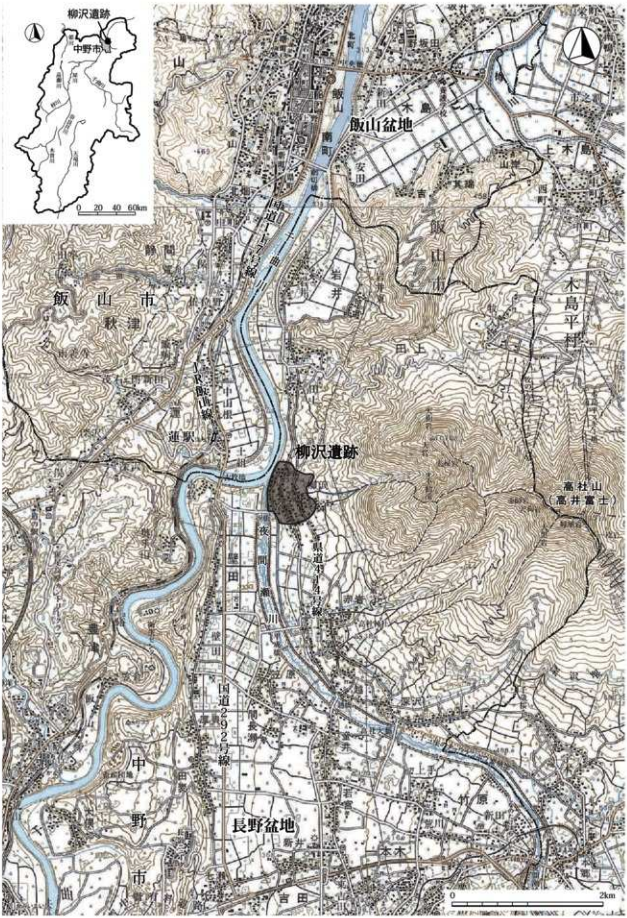
北側は、築堤地点の調査で、平安時代以降の遺構が確認されているが、遺跡の北部を流れる滝ノ沢川を境に縄文時代、弥生時代の遺構はない。

一方、遺跡の南側は、築堤地点南西境で水田跡を検出しており、遺跡が南側に広がる可能性がある。しかし、2016年度の市教委の試掘調査では水田跡が確認されず、遺跡範囲は変更されていない。

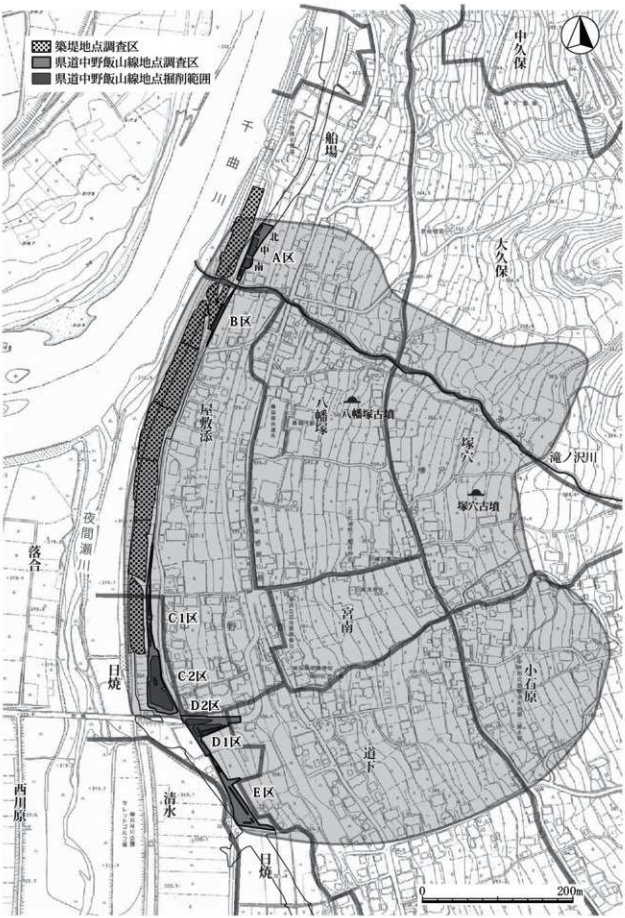
『柳沢区史』（柳沢区1992）によると、遺跡内からは主に縄文時代、弥生時代（中期・後期）の遺物が出土している。遺跡の南西部にあたる「屋敷添」で比較的多くの遺物が出土し、勾玉や太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧もみられる。同地籍は、柳沢遺跡の調査範囲に含まれている。このほか宮南、塚穴、八幡塚、船場、大久保地籍でも遺物が採取されており、塚穴では弥生時代の土器片が集中して出土し、南宮ではほぼ完形に復元できる吉田式の壺形土器が出土している（注１）。また、柳沢遺跡の範囲内には八幡塚古墳、塚穴古墳の２基の古墳が確認されている。

2009・2010・2017年に市教委による確認調査が行われたが、明確な遺構は検出されていない。遺跡範囲は、集落とブドウ、リンゴなどの果樹や野菜畑となっている。

注１：県道地点発掘調査の際、柳沢地区の畔上義男氏の畑（日高見神社の南側）から畑畝設置工事の際出土した土器を実見したところ、弥生時代後期初頭吉田式の壺の破片が多数あり、１個体に復元できるものもある。出土状況は不明であるが、口縁部から底部まで器形復元ができる大型の破片が出土していることから墓坑、竪穴住居跡などの遺構に伴うものと推定できる。



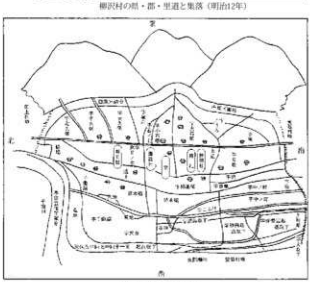
第３図　遺跡の位置（１：50,000）



第４図　遺跡の範囲（１：5,000）

3　遺跡周辺の地形環境

柳沢遺跡は高社山西麓の火山山麓扇状地扇端部に立地し、千曲川の右岸、夜間瀬川との合流点に接している。合流点が現在の場所になったのは1892年（明治25年）以降のことであり、以前は現在より西側の「落合」を流れていた（第５図）[注2]。夜間瀬川は扇状地を形成した河川であり、縄文時代から中世にかけて、流路が大きく変わっていることが想定できる。落合付近に流路が定まったのは、1,400年代のことと伝えられている（柳沢区1992）。



第５図　柳沢村絵図のトレース図（柳沢区1992）

注２：明治12年の絵図に、旧流路が描かれており、現在は夜間瀬川を渡る折橋は亀川に架かる橋であったことが確認できる。近世の天保年間の絵図にも、明治12年の絵図と同じ位置に夜間瀬川の流路が確認できる。

高社山は、周囲の山脈から独立した富士山型の円錐状火山で、標高は1,351.5mである。別名「高井富士」と呼ばれている。山の南側の長野盆地から見ると、端正な円錐形を示すために、容易に認識することができるランドマーク的な山として見ることができる。柳沢遺跡から山の西側を見ると、山体が大きくえぐれている。『柳沢区史』によると、えぐれた部分は爆裂火口であるとされているが、地元では「山津波」に関わる伝承が残されており、地震および豪雨などに起因する山体崩壊や土砂崩れなどで生じたものである、との見解が近年は有力とされる。そのような険しい地形からか、古くから修験道が盛んな場所として知られている（柳沢区1992）。

第２節　歴史的環境

１　周辺の遺跡

千曲川沿いに立地する柳沢遺跡は、縄文・弥生・平安時代の集落跡と弥生・平安時代の水田跡などの遺構が確認されている。以下に柳沢遺跡周辺の千曲川流域の遺跡を中心に、各時代の概略を示す。なお、遺跡名の後に付した数字は第６図の遺跡番号である。

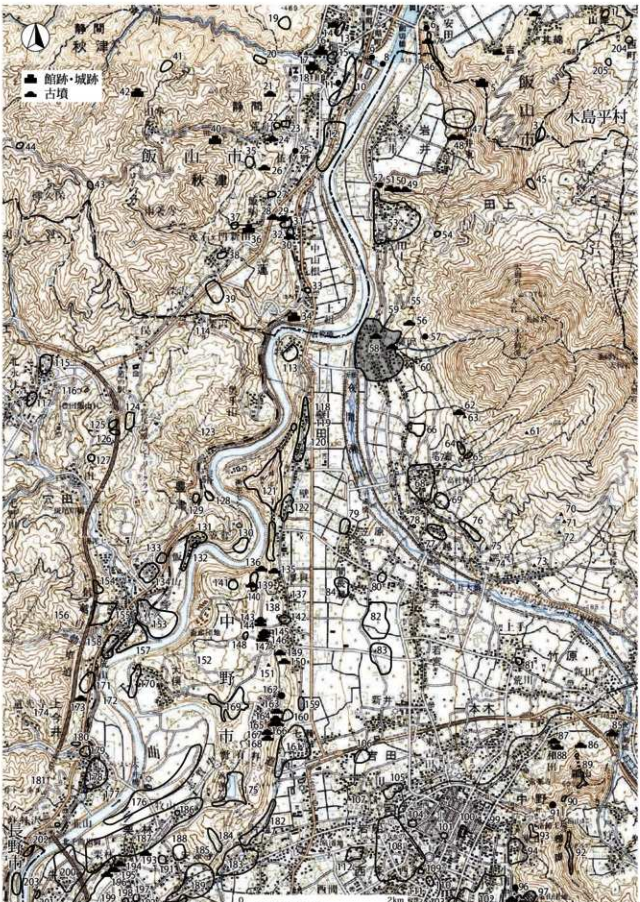
旧石器時代：中野市内では旧石器時代の遺跡の調査例は少ないが、牛出窯跡（201）、沢田鍋土遺跡、がまん淵遺跡、茶臼峯遺跡（192）、浜津ヶ池遺跡（175）、安源寺遺跡（185）、立ヶ花表遺跡などでも旧石器時代の石器群が出土している。千曲川下流の飯山市から柴村を通り新潟県津南町の河岸段丘にかけた地域と本遺跡の西側に位置する信濃町野尻湖周辺も、旧石器時代の遺跡密集地である。

縄文時代：草創期は、中野市内ではまとまった資料は確認されていない。しかし、その周辺の飯山市カササギ野池遺跡で爪型文土器、飯山市田草オヤチ遺跡（41）、小佐原遺跡、北竜湖遺跡、木島平村三枚原遺跡、山ノ内町上林中道南遺跡で表裏縄文土器が見つかっている。長野県信濃町野尻湖遺跡群や、千曲川を下った信濃川流域の新潟県津南町では草創期の遺物が多数発見されている。

早期になると、千曲川流域で遺跡が散見される。柳沢遺跡（58）では押型文・沈線文・条痕文系土器が、牛出窯跡（201）で押型文土器、千田遺跡（157）で沈線文系土器と条痕文系土器が、風呂屋遺跡（171）では条痕文系土器が出土している。この他、中野市がまん淵遺跡で沈線文系土器、飯綱町丸山遺跡で絡条体圧痕文土器が出土しているが、いずれも遺物量は少ない。なお、山ノ内町上林中道南遺跡では押型文・沈線文・条痕文系土器が多数出土しており、沈線文土器新段階の標式遺跡として知られている。しかし、これらの遺跡では、竪穴建物跡が検出されていない。

前期では、千曲川流域に竪穴建物跡が確認される集落跡が見られるようになる。柳沢遺跡でも、遺物がわずかに出土している。千曲川下流部の飯山市では、田草川尻遺跡（12）、有尾遺跡、上野遺跡などがある。有尾遺跡は前期中葉の有尾式土器（黒浜式平行段階）の標式遺跡であり、当該期の竪穴建物跡が見つかっている。柳沢遺跡から上流の中野市では、立ヶ花遺跡で前期後葉の土器がまとまって出土しており、諸磯ｂ式とされる竪穴建物跡が２棟見つかっている。南大原遺跡（176）は、諸磯ａ式土器の古段階に並行する南大原式の標式遺跡で、竪穴建物跡が発見されている。この他、中野市の千田遺跡、川久保遺跡・宮沖遺跡（153）では前期初頭から後葉の遺物が出土している。

中期では、千曲川流域に集落遺跡が増え、中野市の柳沢遺跡、千田遺跡、宮反遺跡（170）、姥ヶ沢遺跡（169）、栗林遺跡（187）、飯山市深沢遺跡（39）で竪穴建物跡等の遺構が確認されている。また、風呂屋遺跡では中期前葉の北陸系の土器が、千田遺跡では中期後葉の火焔型土器や東北系（大木式）の土器が、



第６図　周辺の遺跡（１：50,000）

第４表　周辺の遺跡地名表

市町村名	掲載番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考（発掘調査歴）	市町村遺跡番号
飯山市	1	山岸	○	○							126
	2	其崎古墳群				○					220-249
	3	中小屋小丸山墳					○				180
	4	吉		○	○						127
	5	岩井城						○		中野市との境界上	308
	6	安田神社	○								128
	7	飯綱山古墳群				○					250-273
	8	清川尻		○							153
	9	小屋解					○				152
	10	中町鄙谷				○	○	○			133
	11	京ノ町	○								134
	12	田草川尻	○	○	○	○	○				135
	13	法伝寺					○	○			129
	14	法伝寺1～3号古墳				○					201-203
	15	北畑			○		○				131
	16	北畑館						○			302
	17	静間館						○			303
	18	静間神社南				○		○			132
	19	北畑北	○			○					130
	20	平山			○						151
	21	法花寺1号～6号古墳				○					205-210
	22	山ノ神	○								136
	23	山ノ神B	○								137
	24	舟山古墳				○					211
	25	伝位野	○	○		○					139
	26	鵜助山古墳（旧鵜介山）				○					204
	27	瀬那沢	○								141
	28-30	五里久保1号～3号古墳				○					212-219
	31	山根	○								143
	32	五里久保	○								142
	33	上組			○						146
	34	瀬城						○			306
	35	鷲崎	○								140
	36	駒立館						○			307
	37	駒立					○				144
	38	茂右ヨ門新田	○								145
	39	深沢	○								147
	40	小田草城						○			305
	41	田草オヤチ	○				○				138
	42	田草城						○			304
	43	狐山					○				148
	44	堀越B					○				149
中野市	45	木島氏山城跡						○			191
	46	下山遺跡						○			190
	47	月岡遺跡			○		○	○	○	2003調査 伝岩井氏居館跡	189
	48	岩井1号～2号古墳				○					187-188
	49-51	日向1号～3号古墳				○				中世墓標群として使用	183-185
	52	日向屋							○		186
	53	田上遺跡群	○	○	○	○	○	○	○	1982・1983・1985調査	181
	54	大洞遺跡					○	○			182
中野市	55	（柳沢大久保）								石斧（時代不明）	22
	56	小丸山古墳				○					179
	57	櫛平坂塚遺跡						○			180
	58	**柳沢遺跡**	○	○	○	○	○	○		2006～2008調査　柳沢屋敷遺跡と柳沢宮の祈遺跡を統一して改称	176
	59	八幡塚古墳					○		○	後世経塚として利用	177
	60	塚穴古墳				○					178
	61	（赤岩牧ノ入）							○	土師器	20
	62	赤岩古墳				○				推定位置	175
	63	（赤岩屋平）	○							ナイフ形石器	19
	64	村林遺跡	○								173
	65	神宮寺遺跡				○	○			寺院	172
	66	七ッ鉢遺跡		○							174
	67	（赤岩神宮寺下）			○					後期土器（高杯）	18
	68	神宮寺下遺跡			○	○				1958・1971・2010調査	171
	69	梵天遺跡	○	○							170
	70	（深沢薬師平）								土師器（時代不明）	17
	71	（深沢薬師平）								土師器（時代不明）	16
	72	（深沢清水原）								土師器（時代不明）	15
	73	（深沢裏屋敷道）		○							14
	74	（雄上原）		○							13
	75	（樋関下）		○						石鏃、土器	12
	76	関上遺跡		○							167
	77	屋敷跡遺跡		○							168
	78	きつね塚								時期不明	169
	79	笠原遺跡			○				○		82
	80	笠原向ヲ原遺跡				○				金井向ヲ原遺跡を改称	81
	81	竹原遺跡		○							83
	82	新井向原遺跡							○		79
	83	新井大ロヲ遺跡				○				1969調査	78
	84	間長瀬遺跡				○					80
	85	柴岩古墳				○				1949調査	65
	86-88	栗和田1号～3号古墳								1995調査　3号墳は古墳ではなく、消滅	62-64
	89	箱山城跡							○		60
	90-91	旗塚							○		58-59
	92	鴨ヶ崖城跡（舌、鎌ヶ崖城跡）							○		54
	93	蓄之瀬城跡							○		57
	94	普代遺跡	○	○	○	○				1981調査	52
	95	経僧山古墳				○				1967調査　消滅	50
	96	上小田中経塚							○		51
	97	経僧遺跡					○			1966・1968調査	49
	98	伊勢山下（更科翼の山遺跡）		○						1968調査	48
	99	高梨氏館跡							○	1989～1992・1994・1998・1999調査	55
	100	中野県庁跡（中野陣屋跡）							○		56
	101	三好町遺跡					○				70
	102	上小田中遺跡	○	○	○	○	○	○		1971・1997・1998調査	46
	103	下小田中遺跡			○	○	○				44
	104	寿町遺跡			○						74

（　）で表記したものは単独遺物出土地点で、大字小字名を記載している。

市町村名	掲載番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考（発掘調査歴）	市町村遺跡番号
中野市	105	五里原遺跡						○			75
	106	屋敷遺跡			○		○				77
	107	吉田宮脇（含、吉田城敷下、吉田立浦遺跡）			○		○	○		2009・2010調査	76
	108	西条・岩船遺跡群（含、岩船沢長柴遺）			○		○	○		1989～1995調査	67
	109	西条長屋屋遺跡								西条長屋敷遺跡を含む	68
	110	五加遺跡						○			66
	111	西条東屋敷遺跡			○	○	○	○		1998調査	67
	112	岩船遺跡			○		○				72
	113	古牧遺跡			○						166
	114	深沢城跡						○		山城	242
	115	鴨田遺跡		○							217
	116	永井館跡						○			241
	117	北永江遺跡		○							216
	118	高井県使神社跡									165
	119	壁田遺跡（含、壁田宮工遺跡）		○	○		○	○		1971調査	163
	120	正源寺跡						○		赤岩正源寺故地	164
	121	壁田城跡						○		山城	161
	122	ねこぞ遺跡			○		○	○		壁田城関連施設	162
	123	荷の城の塞跡						○		山城	237
	124	福沢遺跡		○							215
	125	八号堤遺跡		○	○		○			1994調査	214
	126	大谷堆遺跡		○			○			1994調査	213
	127	名立遺跡				○	○				238
	128	大日影遺跡	○								212
	129	埼久保（含、日向遺跡）		○							211
	130	猪俣島（滝脇）		○	○	○	○	○		1959・1956・2011・2012・2013調査	210
	131	笠倉遺跡（含、川滝遺跡）		○	○	○	○	○	○	2011・2012調査	209
	132	笠倉館（森の家）跡						○	○	居館 2011・2012調査	236
	133	飯綱平北遺跡		○							208
	134	飯綱平遺跡（含、地山遺跡）				○	○	○	○	1992・2004調査	207
	135	永峯古墳				○					159
	136	赤畑古墳				○					160
	137	（厚貝永塚）	○							ブレイド	9
	138	（厚貝屋敷跡）			○					中原土器（つば付壷）	10
	139	師堀遺跡	○	○	○						157
	140	山の神古墳				○				1998調査	156
	141	塞遺跡	○								158
	142	田麦遺跡						○			231
	143・147	中絡1号～5号古墳			○					1986・1987調査 消滅	154・155
	148	三ツ又遺跡		○							153
	149	林畔２号古墳				○				1998調査	152
	150	林畔１号古墳				○					151
	151	（田麦赤山）	○							中期土器	8
	152	大保城跡						○		居館	150
	153	替佐遺跡群（含、川久保・小宮遺跡・宮沖・梶部）		○	○	○	○	○	○	1966・2004～2007調査	206
	154	飛山遺跡（含、飛山古墳）		○	○			○		1994調査 古墳ではなく中世の屋	205
	155	対面所遺跡						○		1995調査	235
	156	替佐城跡						○		山城	204
中野市	157	千田遺跡		○	○	○		○	○	2002・2003・2005～2007調査	203
	158	南大洞遺跡		○	○						202
	159	棚畑遺跡					○	○			147
	160	寿徳寺跡						○		中世寺院	146
	161	七瀬遺跡	○	○	○	○	○	○		1983・1991・1992・1994調査	138
	162	七瀬北原遺址						○		七瀬４号古墳消滅のため発掘 1988調査 消滅	144
	163・165	七瀬2号・3号・5号古墳					○			1986～1988調査 消滅	141 143 145
	166	前山古墳					○			1975調査 消滅	142
	167	七瀬１号古墳					○				140
	168	七瀬双子塚古墳					○				139
	169	姥ヶ沢遺跡		○	○	○				1982調査	148
	170	宮反遺跡		○	○		○			1983・1984調査	149
	171	風呂屋遺跡		○	○		○	○		1994調査	200
	172	風呂屋居館址						○		居館	201
	173	風呂屋古墳					○			1994調査 消滅	233
	174	北城城址						○			199
	175	浜津ヶ池遺跡	○	○			○			1987・1994調査	135
	176	南大原遺跡			○	○	○			1951・1957・1979・2011～2013調査	196
	177	内屋館跡						○		居館 2006調査	232
	178	山根遺跡		○	○		○			1991調査	197
	179	西山根遺跡	○								227
	180	寺窪窯址					○			1991調査	198
	181	南城城址						○		山城	234
	182	大徳寺遺跡			○	○	○				137
	183	片塩遺跡					○			1960調査	136
	184	から池遺跡					○	○			125
	185	安源寺城跡	○		○			○		山城 1998調査	126
	186	北海寺跡（三ヶ寺跡）						○			133
	187	栗林遺跡	○	○	○	○	○	○	○	1948・1950・1965・1969・1977・1979～1981・1983・1987・1991・1992・1994～1999調査	134
	188	安源寺跡						○			127
	189	安源寺	○	○	○	○	○	○	○	1951・1966・1976・1977・1985・1994・1995・2002調査	124
	190	風巻遺跡					○			1989・2012調査	123
	191	安源寺館跡					○	○		居館 1990調査	128
	192	茶臼塞窯跡	○				○			1963・1964・1971・2005・2006調査	112
	193	小丸山古墳				○					129
	194・196	栗林１号墳～3号古墳				○					130・132
	197	坂下窯跡					○				115
	198	東池田窯跡		○		○				2004調査	114
	199	中原窯跡					○			1984調査	113
	200	牛出遺跡		○	○	○	○	○	○	1994～1996調査	122
	201	牛出窯跡	○	○	○	○	○	○		1993・1997調査	121
長野市	202	二ッ石		○							J-17
	203	小軽井					○				J-23
木島平村	204	西町遺跡		○							16
	205	高山遺跡		○							18

（　）で表記したものは単独遺物出土地点で、大字小字名を記載している。

栗林遺跡では関東系（加曽利Ｅ式）の土器が出土するなど、他地域との交流が認められる。また、姥ヶ沢遺跡でははほぼ完全な形の土偶が、千田遺跡では200点を超える土偶が出土している。質・量ともに注目される（中野市教育委員会1983、長野県埋蔵文化財センター2013b）。

後期には、栗林遺跡で集落跡と貯蔵穴および水さらし場、千田遺跡では石棺墓群などの墓域が確認されている。この他、飯綱平遺跡（134）、南大洞遺跡（158）、風呂屋遺跡、山根遺跡（31）などで後期の土器が発見されているが、中期に比べ集落遺跡の数は少なくなる。

晩期には遺跡が少なく、集落跡は確認されていない。山ノ神遺跡（22）では長野県宝の魚形線刻画土器が知られているほか、替佐遺跡群川久保遺跡（153）、千田遺跡、南大洞遺跡、山根遺跡、牛出遺跡（201）、立石ヶ丘遺跡、南曽峯遺跡で晩期の遺物が確認されている。

なお、飯綱平遺跡、沢田鍋土遺跡では中期と後期の粘土採掘跡が確認されており、長野県内では、縄文時代の粘土採掘跡の数少ない資料である（豊田村教育委員会2005、長野県埋蔵文化財センター1997）。

弥生時代：柳沢遺跡（58）の築堤地点の調査で、中期後半から後期の集落跡と青銅器埋納坑と水田跡が見つかっている。千曲川上流部には、栗林式土器の標式遺跡である栗林遺跡（187）がある。栗林遺跡は中期後半から後期の集落遺跡であり、一部が県史跡に指定されている。その他、安源寺遺跡（185）、立ヶ花城跡、南曽峯遺跡、下流域では、琵琶島遺跡（130）、替佐遺跡群川久保遺跡（153）、千田遺跡（157）、飯山市田草川尻遺跡（12）などの中期後半から後期の集落跡が点在する。また、長丘丘陵の東側の裾野やその先に広がる夜間瀬川等の扇状地上には、七瀬遺跡（161）、西条・岩船遺跡群（108）、新野遺跡、間山遺跡などの集落遺跡が確認されている。

この他、笠倉遺跡（131）では有孔石剣（石戈）、七瀬遺跡では木製農具など弥生中期後半の希少な遺物が見つかっている。後期には、がまん淵遺跡、七瀬遺跡などのように北陸系土器が確認される遺跡が見られるようになる。がまん淵遺跡は、北陸地方にみられる斜面中腹に環濠を備えた、高地性の防御的集落と評価されている（長野県埋蔵文化財センター1997）。安源寺遺跡では弥生時代後期と考えられる粘土採掘跡が確認されている。

柳沢遺跡周辺では、南大原遺跡（176）、琵琶島遺跡、千田遺跡、栗林遺跡、七瀬遺跡などで中期前半の集落跡は確認されていないが、中期後半、後期前葉、後期後半の集落跡が確認されている。さらに、中期後半と後期の集落跡が同じ場所に営まれる例はなく、同じ遺跡内でも地点を異にする傾向が見られる。

なお、千曲川流域の長野盆地から飯山盆地にかけての長野県北部では、中期後半（栗林式）から後期（吉田式、箱清水式）の集落跡が群を成しており、笹澤浩氏はこれらのまとまりを遺跡群としてとらえて、当該地域の弥生時代集落の解明を試みている（笹澤2008・2009）。

古墳時代：千曲川流域には、前期の牛出遺跡（200）、牛出窯跡（201）、中期から後期の替佐遺跡群川久保・宮沖遺跡（153）の他、飯山市田草川尻遺跡（12）、中町里屋遺跡（10）[注3]などの集落跡がある。また、千曲川に流れ込む夜間瀬川など扇状地上には神宮寺遺跡（65）や新野遺跡など中期から後期の集落跡が確認されている。この他、前期の粘土採掘跡が見つかった沢田鍋土遺跡、中期の祭祀遺跡とされる新井大ロフ遺跡（83）がある。

弥生時代終末から古墳時代初頭とされる安源寺遺跡（189）の周辺には、前方後方墳とされる蟹沢古墳、勘介山古墳（26）、法伝寺古墳（14）や、前方後円墳の高遠山古墳などの、県内で古く位置づけられる古墳が点在している。これらは、長野県北部の古墳時代の幕明けを考えるうえで注目される。中期から後期古墳では、円筒埴輪が出土した前方後円墳の七瀬及子塚古墳（168）、蛇行剣が出土した京塚古

注３：田草川尻遺跡に隣接する中町里屋遺跡では圃場整備事業で古墳時代を中心とした遺物が多量に出土しており、田草川尻遺跡同様に長期間にわたり営まれた集落跡と考えられている（飯山市教育委員会2010）。

墳[注4]、馬具・鈒留短甲が出土した林畔１号古墳（150）などがある。後期になると、６世紀代の合掌形石室をもつ金鎧山古墳、銀象嵌の鍔を出土した南曽峯古墳、７世紀代の風呂屋古墳（171）などがある。また、法花寺古墳群（21）、五里久保古墳群（28～30）、中畝古墳群（143～147）などの群集墳も多くは当該期のものだろう。

柳沢遺跡（58）では古墳時代の集落跡は見つかっていないが、範囲内に八幡塚古墳（59）、塚穴古墳（60）の２基の古墳が確認されており、近接して小丸山古墳（56）がある。柳沢遺跡の広大な未調査部分に古墳時代の集落跡が存在する可能性が高い。

奈良・平安時代：奈良時代の集落跡は、壁田遺跡（119）、替佐遺跡群（153）、沢田鍋土遺跡などで確認されている程度で、発見例が少ない。平安時代では、田草川尻遺跡（12）、飯綱平遺跡（134）、替佐遺跡群、風呂屋遺跡（171）、宮反遺跡（170）、牛出遺跡（200）、栗林遺跡（187）、安源寺遺跡（185）など千曲川沿いにある遺跡と、西条・岩船遺跡群（108）、上小田中遺跡（102）、新野遺跡、間山遺跡など千曲川に流れ込む河川の扇状地上にある遺跡が確認されている。飯山市小佐原遺跡では、隅丸長方形の土坑墓から灰釉陶器、黒色土器の副葬品が出土している。

本遺跡から８km南西に高丘丘陵古窯跡群があり、７世紀末～９世紀の須恵器の窯跡が51基確認されている。これらの窯跡は、茶臼峯（192）、立ヶ花、立ヶ花表、牛出などの支群に分かれている（長野県埋蔵文化財センター1997・2013a）。その中には瓦陶兼用窯がある池田端窯跡、「高井」・「佐玖郡」などの刻書がある須恵器が発見された清水山窯跡など奈良時代の窯跡が多く見つかっている。また、牛出窯跡（201）、沢田鍋土遺跡では奈良時代の土器製作の工房跡、池田端窯跡では粘土採掘跡が確認されている。

また、飛山遺跡（154）からは奈良時代の須恵器が出土しており、古代烽火制に係る場所であった可能性を指摘する説もある[注5]。

中世：中世には田草城（42）とその支城と考えられる小田草城（40）、北城城址（174）、南城城址（181）、安源寺城跡（185）、茶臼峯砦跡、立ヶ花城跡、草間城跡、手子塚城跡などの山城と、飯山市静間館（17）、大俣城跡（152）、風呂屋居館址（172）、内堀館跡（177）、牛出城跡、大久保館跡、高梨氏館跡（99）などの館跡またはその推定地がある。

また、西条・岩船遺跡（108）では34,000枚の備蓄銭（埋納銭）が見つかっている（中野市教育委員会1997）。珠洲焼甕や木箱に入った埋納銭が市内で15か所確認されている。全国的に見ても、中野市は埋納銭の発見が多い地域である。

２　歴史事象

『柳沢区史』（柳沢区1992）や地元の人の話をもとにまとめると、近世の柳沢村の様子は、以下のとおりである。

柳沢地区の飲用水は、滝の沢山から流出する沢水と、平地付近からの湧水を利用していた。屋敷添地籍には現在でも湧水を汲み上げる施設を管理している家があるが、近年は湧水の量が少ないとのことである（写真１）。水田等の用水については、柳沢地区を流れる滝ノ沢川は水量の多いただ１本の渓水であるが、山が浅く保水能力が少ないため、滝ノ沢川だけでは充分な灌漑用水を確保することは難

写真１　Ｃ区東側の湧水

注４：土屋積氏のご教示による。京塚古墳の調査成果は『長野県考古学会誌』159号に掲載予定。
注５：福島正樹氏のご教示による。

しかった。田地はおもに字日焼・清水・西河原の平地にあり、灌漑用水は生活用水の流末と、赤岩村・壁田村などの上流村の余水に依存していた。また、畑地は山麓に続く傾斜地にあり、生産力が低かった。

なお、前近代においては、柳沢村を南北に貫く谷街道が、隣村の田上村、赤岩村へと通じる幹線道路であった（第５図）。現在は、市道柳沢古牧線を通り折橋で夜間瀬川を渡り、国道292号線へ出るルートが幹線道路となっている。また、地元住民によれば夜間瀬川を渡る現在の折橋ができる前は、前述の湧水のそばを通り夜間瀬川を渡るルート（現在の折橋よりも北側）があったという。県道地点Ｃ・Ｄ区の周辺については、道路事情が近代以降に変容しており、景観が大きく変わっている。

なお、近代以降の柳沢村は、1889年（明治22年）に田上村、岩井村と合併し倭村となる。1954年（昭和29年）に中野町と倭村を含めた８ヶ村が合併し中野市となり、2005年（平成17年）に豊田村と合併し現在の中野市域となったが、柳沢の地名は、中野市の区の名称として今も続いている。

参考文献

飯綱町教育委員会　2016 『飯綱町遺跡詳細分布調査報告書』

飯山市教育委員会　2003 『飯山市遺跡分布図』

飯山市教育委員会　2010 『田草川尻遺跡Ⅹ・今井遺跡群』飯山市埋蔵文化財調査報告書　第76集

豊田村教育委員会　2005 『飯綱平遺跡Ⅱ』

豊野町誌刊行委員会　2001 『豊野町の資料一　豊野町誌５』

笹澤　浩　2008 「信濃の弥生文化と柳沢遺跡」『北信濃　柳沢遺跡の銅戈・銅鐸』信濃毎日新聞社

笹澤　浩　2009 『善光寺平の弥生文化』（10月７日長野県立歴史館における講演会資料）

中野市教育委員会　1983 『姥ヶ沢』

中野市教育委員会　1997 『西条・岩船遺跡発掘調査報告書』

中野市教育委員会　2014 『長野県中野市遺跡詳細分布図（改訂版）』

長野県埋蔵文化財センター　1997 『飯田古屋敷遺跡　玄照寺跡　がまん淵遺跡　沢田鍋土遺跡　清水山遺跡　池田端窯跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24

長野県埋蔵文化財センター　2010 『月岡遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書95

長野県埋蔵文化財センター　2012 『柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100

長野県埋蔵文化財センター　2013a 『沢田鍋土遺跡　立ヶ花表遺跡　立ヶ花城跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書94

長野県埋蔵文化財センター　2013b 『千田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書98

長野県埋蔵文化財センター　2013c 『川久保・宮沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書99

長野県埋蔵文化財センター　2016 『南大原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書111

柳沢区　1992 『柳沢区史』柳沢区史刊行委員会

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　遺跡記号と遺構記号

（１）遺跡記号

本書で報告する柳沢遺跡県道地点の遺跡記号は「AYSB」とした。各種記録類や遺物の注記にはこの遺跡記号を用いた。

通常、県埋文センターでは記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット３文字で示す遺跡記号を用いている。本遺跡でも１文字目は長野県を10分割した地区記号で、須坂市以北の千曲川東岸地区を示す「A」、２文字目および３文字目は遺跡名のローマ字表記（**Y**ANAGI**S**AWA）から２文字「YS」を選択した。ただし、本調査地点は、後述のように築堤地点とは測量の基準（測地系）が異なる。例えば同じグリッド名でも異なる地点を示す。よって築堤地点とは峻別する必要があり、その遺跡記号「AYS」と区別するために４文字目に「B」を付している。

（２）遺構記号と遺構番号

遺構の名称は、県埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付し、遺構番号は築堤地点の続きの番号を用いた。

SB：２ｍを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘込み。【竪穴建物跡等】

SK：単独、もしくは他の掘込みとの関係が認められないSBより小さな掘込み。【土坑等】

ST：ＳＢより小さな落込みや石が一定間隔で方形、円形に配置するもの。【掘立柱建物跡】

SF：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。【火床】

SD：溝状の掘込み。【溝跡、河道、自然流路等】

SQ：遺物が面的に集中するもの。【旧石器のブロック、廃棄場等】本報告書では、遺物集中に用いている。

SH：石が面的に出土するもの。

SL：複数の帯状の盛り上がり、掘込みが規則的に配置し、一つの面を形成しているもの。【水田跡、畑跡等】

県道地点で用いた遺構番号は次のとおりである。

SB：61～62　　SK：2301～2360　　ST：11　　SD：81～91

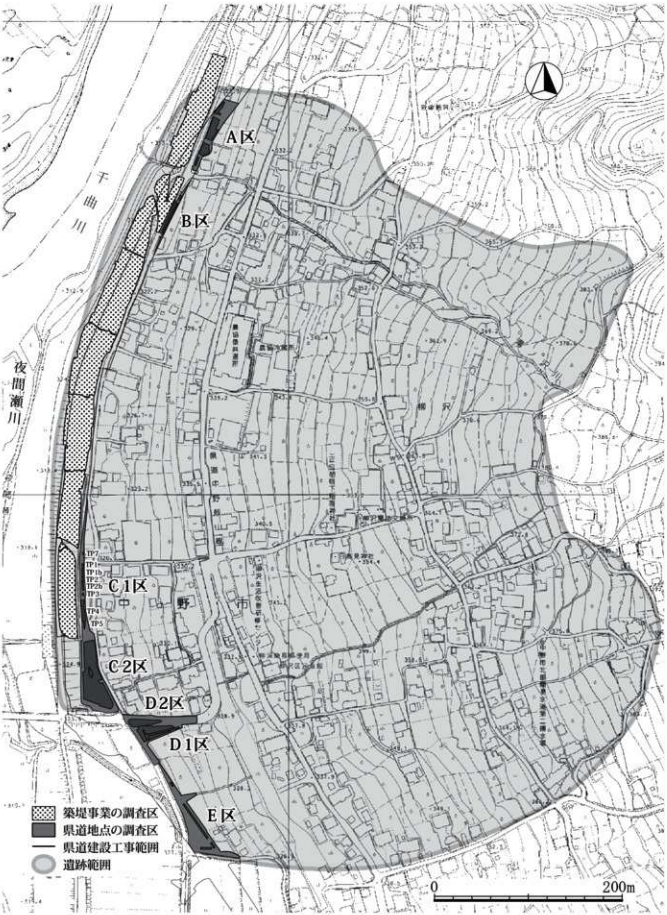
SQ：51～60　　SH：31～33（なお、整理作業の結果SH31・32は欠番）　　SL：１

２　調査区とグリッドの設定

（１）調査区の設定（第７図）

調査区をＡ～Ｅ区に区分し、発掘作業を実施した。Ｃ～Ｄ区をそれぞれ細分し、B1、B2、C1、C2、D1、D2区とした。C1区はトレンチ状に分割調査をし、それぞれTP１～７の名称を付した[注1]。なお、

注１：Ｂ区とＤ区は２ヶ年に分けて発掘したため、それぞれ、B1、B2、D1、D2区とした。Ｃ区はトレンチ調査とした北側をC1区、広く調査した南側をC2区とした。C1区の調査は当初テストピットを設定して確認調査を実施したところ、土器片が多数出土したため、掘削範囲を広げた。調査対象地の幅員が狭くトレンチ状の調査区となったが、当初用いたTP（テストピット）番号をそのまま用いた。



第７図　築堤地点と県道地点の調査区（１：4,000）

Ｅ区はトレンチ掘削による確認調査のみで終了した。

（2）グリッドの設定

築堤地点では、日本測地系に基づいて基準線を設定した（長野県埋蔵文化財センター2012b）。県道地点の調査に当たり、世界測地系に基づいて新たに基準線を設定した。第８図に県道地点と築堤地点の基準線およびグリッド名称を示す。

調査区が狭いため、Ｃ・Ｄ区のみグリッド杭を設置し、他の地区はグリッド杭を設定せず、基準点を設置し、単点測量で記録を行った。なお、測量基準点および基準線の設定、単点測量は専門業者（株式会社写真測図研究所）に委託した。

基準線設定の原則は、国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基点（Ｘ＝0.0000、Ｙ＝0.0000）に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設ける。これを元に、調査対象範囲をカバーするようにグリッドを設定した。グリッドは以下のように、大々地区、大地区、中地区、小地区の４段階に区分した（第８図）。

大々地区は200ｍ×200ｍの区画で、ローマ数字で示す。Ｘ＝89600.00、Ｙ＝－12800.00を基準として調査対象地区全体にかかる10区画を設定し、Ⅰ～Ⅹと表記した。

大地区は大々地区を40ｍ×40ｍの25区画に分割し、北西から南東へＡ～Ｙまでのアルファベット大文字を用いた。

中地区は大地区を８ｍ×８ｍの25区画に分割したもので、北西から南東へ１から25の算用数字を用いた。

小区画は中区画を２ｍ×２ｍの16区画に分割したものである。

なお、グリッド杭は８ｍ×８ｍの中地区に打設した。

3　表土の掘削と遺構の調査

（1）表土の掘削および遺構検出

表土および遺物密度が低い一部の基本土層Ⅱ層は、重機を用いて掘削した。遺構の検出面は、Ａ・Ｂ・Ｄ区が基本土層Ⅳ層上面、Ｃ区が基本土層Ⅲ層上面となる（基本土層は第３章２節参照）。検出した竪穴建物跡、土坑などの掘込みがある遺構は少ないが、遺物包含層で遺物の密度が高いところを遺物集中地点として記録した。遺物の密度が薄い部分は重機で、遺物集中地点は両刃鎌、移植ゴテなどで掘削した。

なお、Ｃ２区は、近世以降の洪水砂が厚く堆積していたため、安全を考慮して、調査区壁面の法面を45度の勾配で掘削した。

（2）遺物の取上げ

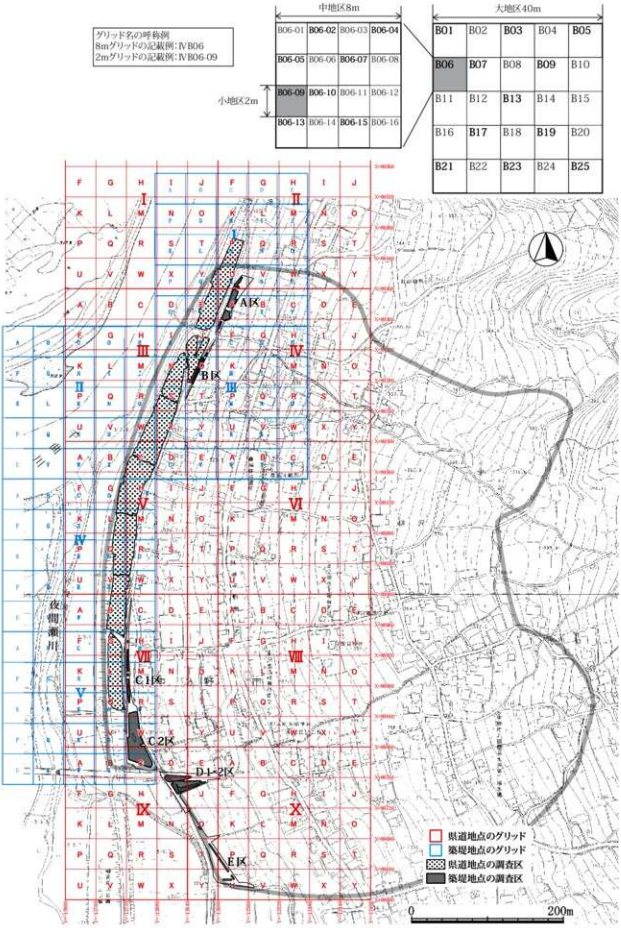
遺構内の遺物は出土層位を分けて取り上げ、出土地点の記録が必要なものには遺構ごとの遺物番号を付した。遺構に属さない遺物は８ｍグリッド単位で取り上げた。なお、金属器、有機質等の遺物は脆弱遺物台帳を作成し管理した。

4　記録作成

（1）遺構の記録

遺構平面図には、８ｍグリッドを基準に測量し図面用紙に記録したものと、デジタル技術を用いた遺構測量支援システム「遺構くん」で測量したものがある。後者の平面図は、A2判の用紙にプリントアウトしたものが原図となる。遺構断面図はすべて図面用紙に記録している。遺構図の縮尺は1/20を基本とし、必要に応じて1/10で測量した。また、トレンチ位置、調査区範囲、地形は単点測量で実施した。

写真記録は６×７リバーサル・モノクロフィルム、一眼レフデジタルカメラを用いた。デジタル写真の



第８図　調査区とグリッドの設定（１：5,000）

ファイル名は遺跡記号と通し番号を組み合わせたものとし（例：AYSB0001、AYSB0002…）、LAWデータ形式、JPEG形式、TIFF形式のデータを保存した。発掘作業では撮影記録簿にファイル番号、フィルム番号、撮影内容等を記載した。

5　自然科学分析

弥生時代と平安時代の水田域の範囲を確認するため、プラント・オパール分析を実施した。2017年度、2018年度に調査したC2区とD2区の３か所の土壌を採取し、専門業者（株式会社古環境研究所）に分析を委託した。分析結果の概要は第３章に記す。委託業者による報告書は添付DVDに収録した。

6　整理作業の方法

（1）遺物の注記と遺物管理番号

金属器以外の土器・石器は1.5cm角以下程度の微細な資料を除き、すべてに注記をした。微細な資料はビニール袋に未注記の札を入れて収納した。遺跡名には遺跡記号（AYSB）を用い、出土地点、層位には以下の略号を用いた。

埋：埋土（覆土）　床：床面　表：表土・表採　検：検出面　カク：かく乱

サイ下：最下部　レキ：礫層　Z：出土地点不明　T：トレンチ　Tp：テストピット

報告書に実測図または写真の掲載が必要であると判断した遺物を抽出し、管理番号を付した。これらの資料については、出土地点、器種、遺物の属性などを記載した遺物管理台帳を作成した。管理番号を付したが、実測図、写真等で掲載しなかった資料は遺物観察表に記載した。管理番号は以下のとおりである。

縄文時代の土器・土製品　№１～219

弥生時代の土器・土製品　№301～557

古墳時代の土器・土製品　№601～611

奈良・平安時代の土器・土製品　№701～771

中世以降の土器・土製品・陶磁器　№901～928

石器・石製品　№1001～1053

木器　№2001～2002

金属器　№3001～3003

（2）遺物の整理について

ブラシで水洗した後、マシンおよび手書きによる注記を行い、土器、石器、金属器等の素材別に整理を進めた。

土器・土製品はすべての破片を器種分類し、遺構別に破片数をカウントした。接合作業は、当該グリッドの土器を含めて遺構ごとに実施した。分布範囲が重複して接する遺物集中地点については、遺構間接合も試みた。

石器・石製品は、器種分類した後、石器類、石核、剥片、砕片の法量と重量の計測を行った。出土点数が少なく、剥片等の接合は期待できないと判断し、接合作業は行っていない。石材分類・鑑定は整理担当者が行った。

金属器は、発掘作業後はシリカゲルを入れてタッパーに保管し、県立歴史館でＸ線透過観察を行った後、記録保存のため特に必要なものは県立歴史館で応急保存処理を行った。

（3）遺構図の整理

遺構図は、グリッドを基準にして図面用紙に1/20で測量したものと、委託業務による単点測量を用いて

記録したものがある。原図の不備を修正した後、デジタルトレースによる全体図、個別遺構図、断面図を作成した。デジタルトレースはIllustrator CS6・CCを用いた。

（4）写真記録の整理

フィルム写真は調査年度別にアルバムに収納し、撮影内容を注記した。デジタル写真は、RAWデータとTIFF形式、JPEG形式のデータをハードディスクとDVDに記録した。写真データはAYSB0001～AYSB2804の通し番号をファイル名とし、ファイル名と撮影内容を記入した写真台帳を作成した。また、JPEG形式のデータについては、上記の通し番号と撮影内容をファイル名としたものを別途作成し保存した。

第２節　基本土層と遺構の概要

１　基本土層

本書で扱う県道地点の基本土層（第９・10図）は、築堤地点とは様相が異なる場合があり、同地点の基本土層名（長野県埋蔵文化財センター2012b）を踏襲できなかった。さらに、県道地点の各地区も土層に変異があり、全地区に対応する基本土層を認識できなかったため、地区ごとの基本土層を設定した。具体的には、Ａ・Ｂ区は風成層主体の類似した層であったので、共通する基本土層名称を用いたが、Ｃ区は、低地で水成層が多く、Ｄ区は水成層と風成層が混在していたので、Ａ・Ｂ区とＣ・Ｄ区は、それぞれ異なる土層名称を用いている。

なお、築堤地点の基本土層は、全地区（１～15区）の西壁土層の所見を加えて、整理作業時に確定したものである。各地区の土層の記録を詳細にみると、県道地点と対比可能な土層も存在している。築堤地点の基本土層との対比可能な土層については、対応する層名を土層説明の末尾に記載した。

Ａ・Ｂ区の土層は、高社山から供給された土が堆積したものである。大形の礫を多量に含む土層は、土石流に起因するものと考えられる。Ｃ・Ｄ区に堆積した砂層とシルト層は、千曲川の洪水に由来するもので、基盤には高社山から供給された大形礫を含む礫層が堆積する。千曲川の洪水に由来する土層は、Ｃ区では厚く、Ｄ区では浅くなる。

Ａ区の土層

Ⅰ層：黒褐色土（Hue7.5YR2/2）。耕作土

Ⅱ層：黒褐色土（Hue7.5YR3/2）。10cm大～人頭大の礫を多数含む。縄文時代から平安時代の遺物包含層

Ⅲ層：暗褐色土（Hue7.5YR3/4）。Ⅱ層とⅣ層の漸移層

Ⅳ層：明褐色土（HueYR7.5YR5/6）。ローム層に２cm大の礫をわずかに含む

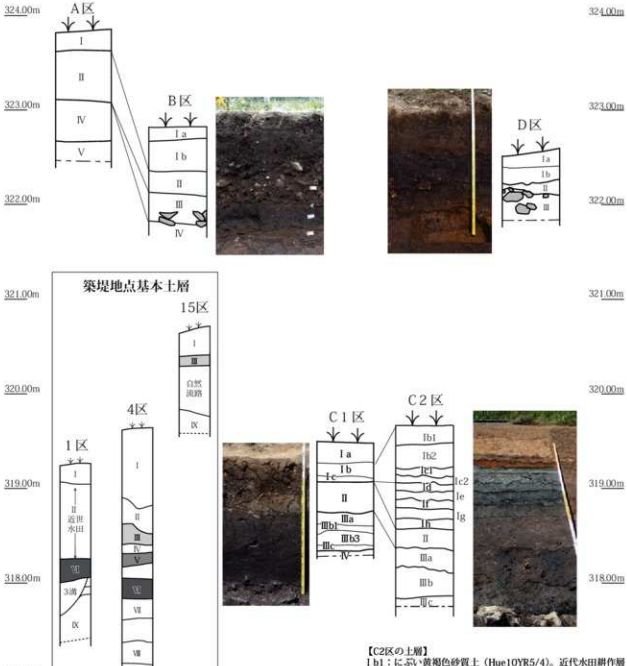
Ⅴ層：褐色土（HueYR7.5YR4/6）。拳大～人頭大の礫を多く含む

Ｂ区の土層

Ⅰa層：灰黄褐色土（Hue10YR4/2）。耕作土

Ⅰb層：黒褐色（Hue10YR3/1）。耕作土

Ⅱ層：暗褐色砂質土（Hue10YR3/3）。円礫・亜角礫を多数含み、黄褐色土ブロックを含む。土石流堆積物を含むと判断した。縄文時代遺物包含層。築堤地点基本土層Ⅷ層、15区自然流路層に相当



【築堤地点の基本土層】
Ⅰ層：調査区全体の表土（耕作土・造成土・かく乱）
Ⅱ層：暗褐色シルト（10YR3/4）。近世以降の耕作・整地土層
Ⅲ層：黒褐色シルト（10YR2/3）。炭粒、白色粒を含む。平安時代～近世の腐植土
Ⅳ層：黒褐色（10YR3/1）～褐色（10YR4/4）中～細粒砂。平安時代の洪水砂層
Ⅴ層：暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）。粘性強い
Ⅵ層：黒色シルト（10YR2/1）。粘性強い。弥生時代中期～古墳時代前期の土器を含む
Ⅶ層：暗オリーブ褐色粘質土（2.5Y3/3）。粘性強い。角礫・亜角礫や白色粒など検鏡物を若干含むシルト。弥生時代の遺構検出面
Ⅷ層：黒褐色シルト（10YR3/1）。5～10cm大の角礫・亜角礫や白色粒を含む。Ⅸ層の腐植化や扇状地上方よりの腐植土が二次的に堆積した土層。12区以北では縄文土器を含む。15区でⅨ層上部からⅧ層下部にかけて土石流と思われる帯状の砂礫層が多く見つかった。
Ⅸ層：暗褐色シルト（10YR3/4）。5～10cm大の角礫・亜角礫、白色粒を多く含むと２次堆積ローム

【C2区の土層】
Ⅰb1：にぶい黄褐色砂質土（Hue10YR5/4）。近代水田耕作層
Ⅰb2：にぶい黄褐色砂（Hue10YR5/3）
Ⅰc1：褐色中粘砂（Hue7.5YR4/3）。下面に鉄分沈着
Ⅰc2：褐色粗粒砂（Hue7.5YR4/6）
Ⅰd：灰色細粒砂（Hue5Y5/1）
Ⅰe：灰色粘土（Hue7.5Y4/1）。黒褐色の腐植をブロック状に含む
Ⅰf：灰色細粒砂（Hue7.5Y4/1）
Ⅰg：灰色粗粒・中粒砂（Hue5Y4/1）
Ⅰh：黒褐色シルト（Hue2.5Y3/1）。土層がまだらになる耕作土
Ⅱ：黒色～黒褐色（Hue10YR2/1～2/2）粘土質シルト～粘土。1～3cm大の礫を含む
Ⅲa：黒色粘土質シルト（Hue10YR1.7/1）。平安時代、弥生土器の遺物包含層
Ⅲb：灰色砂質シルト（Hue7.5Y4/1）Ⅲaまたは Ⅲc層が混在。酸化すると黄褐色になる。弥生時代の包含層
Ⅲc：黒色粘土（Hue2.5Y2/1）無遺物層。礫を含む下部にいくほど礫が多い

第９図　基本土層

Ⅲ層：黒褐色～暗褐色土（Hue10YR3/2～3/3）。亜角礫を含む。縄文時代遺物包含層。下部はⅣ層との漸移層。築堤地点基本土層Ⅷに相当

Ⅳ層：褐色～黄褐色土（HueYR10YR4/4～5/8）。１cm大の礫を含む。部分的に20～30cm大の大形礫を含む

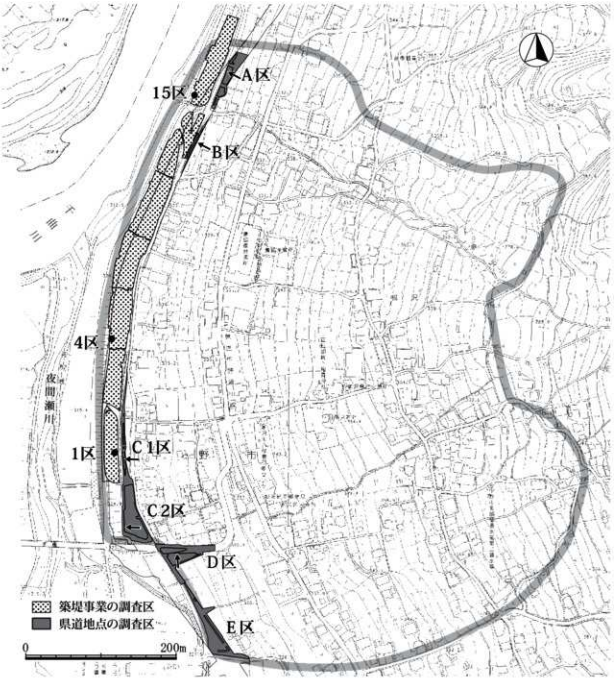
Ｃ区の土層

Ⅰ層：耕作土。C1区では下記の３層に分層、C2区では９層に分層（第９図参照）

Ⅰa層：黒褐色粘質シルト（Hue10YR2/2）と灰黄褐色（Hue10YR5/2）シルトの混土層。盛土

Ⅰb層：灰黄褐色シルト（Hue 10YR5/2）。近代水田耕作層

Ⅰc層：Ⅱ層とⅠb層の混土層



第10図　調査区と基本土層記録地点（１：5,000）

Ⅱ層：黒褐色粘土質シルト（Hue10YR2/2）。中近世の遺物が出土。Ⅲa層との層境は耕作痕と思われる不整合面

Ⅲ層：黒褐色～黒色の粘土または粘土質シルト層。砂礫層を挟むことがある。弥生時代、平安時代の遺物が出土。以下のように分層

Ⅲa層：黒色粘土～粘土質シルト（Hue10YR2/1）

Ⅲa1層：黒色粘土質シルト（Hue10YR2/1）

Ⅲa2層：黒色粘土質シルト（Hue10YR1.7/1）。Ⅲa層と類似

Ⅲb層：黒色～黒褐色の粘土または粘土質シルト層。砂礫層を間に挟む。以下のように分層した。なお、Ⅲb1層とⅢb2層とが明確に分層できるところは下記のとおり分け、明確に分けられないところはⅢb1層とする

Ⅲb1層：黒色粘土（Hue10YR1.7/1）。泥炭を含む。弥生時代、平安時代の遺物包含層。築堤地点基本土層Ⅵ層に相当

Ⅲb2層：黒褐色シルト（Hue2.5YR3/1）。部分的に砂礫を含む。弥生時代の遺物包含層

Ⅲb3層：砂礫層

Ⅲc層：黒色粘土質シルト（Hue10YR2/1）。Ⅳ層をブロック状に含む

Ⅳ層：灰色砂質シルト（HueY5/1）

D区の土層

Ⅰ層：耕作土

Ⅰa層：暗褐色土（Hue10YR3/3）。耕作土

1b層：褐灰色シルト（Hue10YR4/1）。橙色鉄分の集積あり。水田耕作土

Ⅱ層：灰褐色～黒褐色粘土質シルト（Hue10YR4/1～3/1）。弥生時代と平安時代の遺物包含層。下部が黒色が強く、暗褐色シルトのⅡa層と黒色粘土のⅡb層に分けられるところがある。築堤地点基本土層Ⅵ層に相当

Ⅲ層：黒褐色～褐灰色砂質シルト（Hue10YR4/1～3/1）。多数の円礫・亜角礫を含む。部分的に砂礫層となる

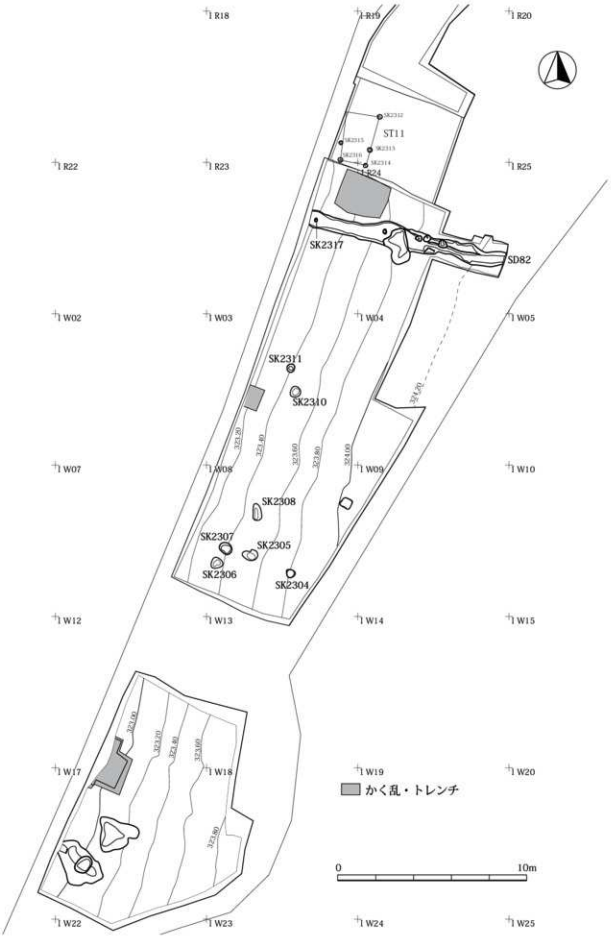
2　遺構の概要

A～D区で本調査を実施し、遺構が確認された。検出した遺構数は第５表のとおりである。各地区の遺構配置図を第11～14図に示した。

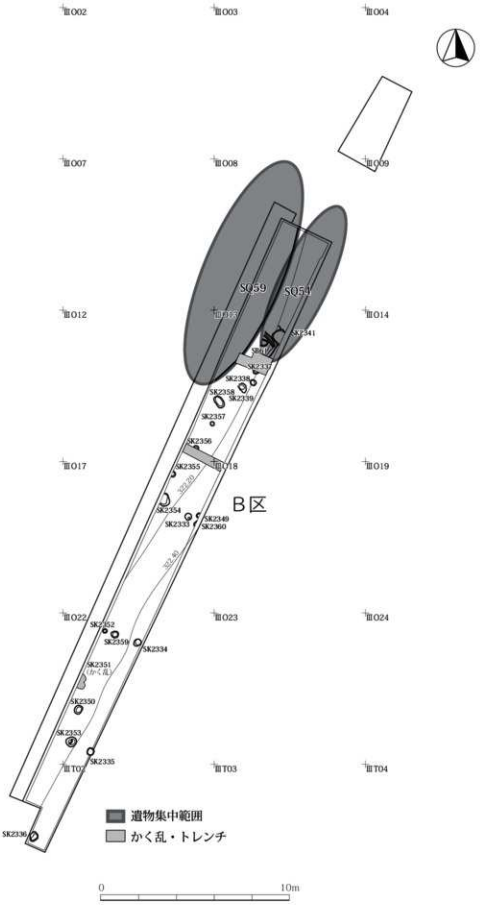
第５表　地区別遺構数

種　類	記号	A区	B区	C区	D区	合計	備　考
竪穴建物跡	SB				1	1	弥生時代1
掘立柱建物跡	ST	1				1	平安時代以降1
溝跡	SD	2		5	4	11	弥生時代1、中世～近代10
土坑	SK	12	22	2	20	56	縄文時代～平安時代26、中世～近代17、時期不明18
水田跡	SL			○	1	1	弥生時代、近世以降
石垣	SH				1	1	近世以降
遺物集中	SQ		1	5	3	9	縄文時代2、弥生時代～平安時代8[注2]

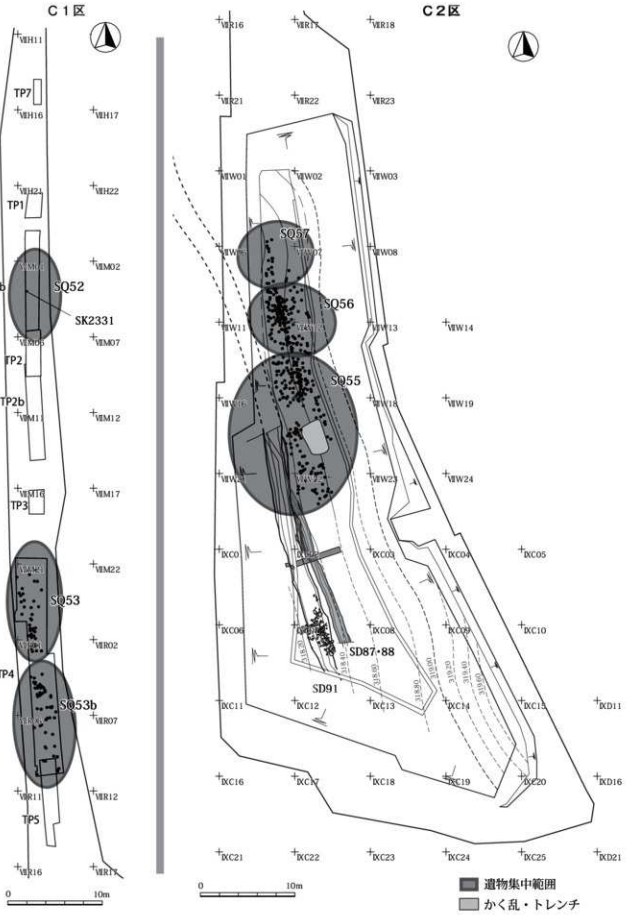
注２：現場で遺物集中（SQ）として遺物取上げを行ったものが９地点ある。整理、分析の結果、遺構には含めないものとしたが、参考までに本表の末尾に付記しておく。



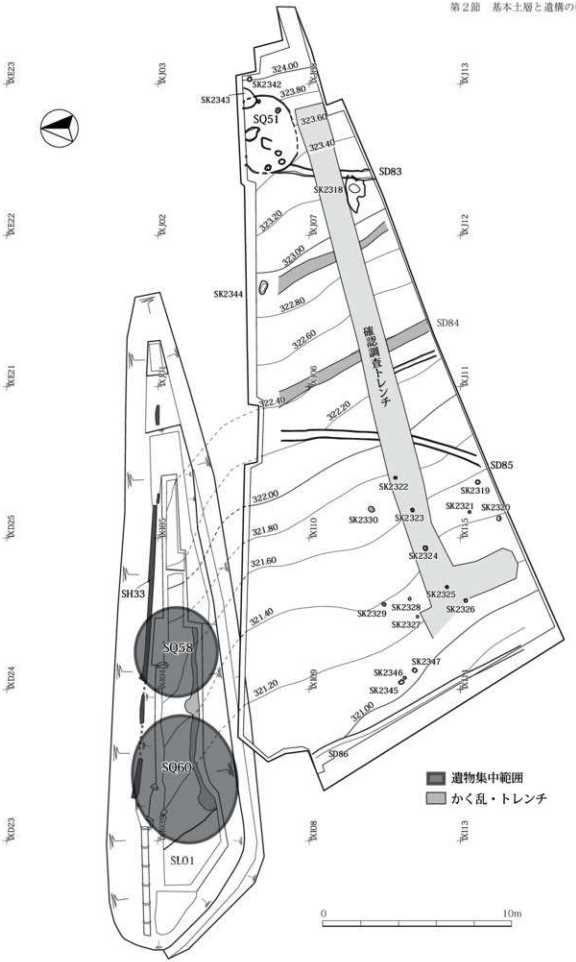
第11図　A区の遺構配置図（1：200）



第12図　B区の遺構配置図（1：200）



第13図　C区の遺構配置図（1：400）



第14図　D区の遺構配置図（１：200）

第３節　縄文時代の遺構と遺物

１　概要

縄文時代の遺構・遺物の多くはＢ区で検出した。Ａ・Ｃ・Ｄ区ではわずかに土器片が出土したのみで、遺構は確認できなかった。出土遺物の大多数は中期後葉から後期前葉であるが、わずかに早期、前期、晩期の遺物が出土した。早期と前期の土器がＣ・Ｄ区にまとまっており、晩期の土器はＤ区のみに出土した。Ｂ区では、竪穴建物跡の可能性がある遺構１基、土坑５基を確認した。この他、炉跡や土坑として調査を進めたが、自然石の集積、自然地形の窪みなどであると判明したもの（炉跡１・２、SK2340）がある。さらに、遺物の大半が北側に出土しており、築堤地点で検出された自然流路の遺物と時期が一致し、分布域も連続することから一連のものと判断した。(注１)

２　縄文時代の遺構

（１）土坑（第12・15図）

SB61

B1区ⅢO13グリッドのⅣ層上面で検出した。Ⅱb層から多数の土器が出土しており、遺構の可能性があると判断しⅢ層下部で精査したところ、落込みを確認した。周溝状の窪みを確認したことから、竪穴建物跡として調査した。ただし、調査区の幅が１ｍほどであり、遺構か否かを含め疑問を残した。次年度西側のB2区の調査ではSB61の続きを確認できなかった。SB61周辺では遺物包含層に大形の礫が含まれており、SB61と認識したものが土石流等の自然の作用で生じた窪みの可能性も否定できず、竪穴建物跡であるか否かの確認はできなかったので、ここでは土坑に分類した。

出土遺物：縄文時代中期末葉～後期初頭の土器（第17図１～３）が少量出土した。なお、遺構検出面上部ではSB61周辺から中期末葉を主体とした土器が多数出土したので、遺物集中SQ54として取り上げた。

SK2334

B1区ⅢO22グリッドのⅣ層上面で検出した。35cm×40cmの円形で、深さ30cmである。埋土には炭化物が含まれており、SK2335と同様の遺物出土状況を示す。

土器片17点と微細な剥離がある剥片が出土した。中期後葉の土器（第17図４・５）が出土しており、中期後葉の遺構と判断した。

SK2335

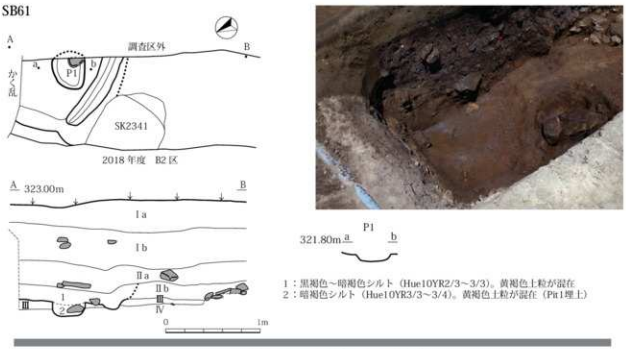
B1区ⅢO22グリッドのⅣ層上面で検出した。55cm×45cmの楕円形で、深さ15cmである。

埋土から土器片が78点出土した。土器は後期初頭から前葉（第17図６～11）が主体となる。後期前葉の遺構と判断した。

SK2341

B1区ⅢO13グリッドのⅣ層上面で検出した。長さ75cm以上、幅75cmの長方形で、深さ29cmである。自然礫の集積の下層で検出し、当初は炉跡の掘り方とも考えたが、焼土

注１：礫の集積が石囲炉の縁石のように見えたが、周辺に同じ大きさの自然礫があること、炉跡とした部分に炭化物と焼土がないことから、自然礫の集積と判断した。



第15図　縄文時代の遺構（1：40、1：30）

や炭化物も無いことから土坑とした。ただし、自然礫が落ち込んでおり、自然地形の窪みの可能性もある。土層断面図は無いが、埋土は以下のとおり３層に分かれる。１層は黒褐色シルト（Hue10YR2/2）で、炭化物や土器片を含む。２層は黒褐色シルト（Hue10YR3/2）、砂礫を含む。３層は褐色シルト（Hue10YR4/4）、基本土層Ⅳ層の黄褐色土粒を含む。

埋土には詳細な時期を判別できるものがないが、17点の縄文時代中期の土器片が出土したので、縄文時代中期の遺構と判断した。

SK2349

B1区ⅢO17グリッドⅣ層上面で検出した。調査区東壁際で確認され、半分は調査区外である。径23~26cm程度の円形で、深さ９cmである。出土遺物はないが、Ⅱa層に覆われていることから、縄文時代の遺構と判断した。

SK2360

B1区ⅢO17グリッドⅣ層上面で検出した。調査区東壁際で確認され、半分以上は調査区外である。形状は不明で、深さ６cmである。出土遺物はないが、Ⅱb層に覆われていることから、縄文時代の遺構と判断した。

（２）Ｂ区Ⅱ・Ⅲ層の遺物出土状況（第16図）

縄文時代の遺物の大半はＢ区端のⅢO08・13グリッドから出土した。当該部分は２年次に分けて調査しており、それぞれ遺物集中SQ54・59として取り上げた。Ｂ区基本土層Ⅱ層とⅢ層が遺物包含層である。遺物の大半は縄文時代中期後葉から後期前葉であり、Ⅲ層は縄文土器のみ、Ⅱ層は縄文土器のほかに弥生時代中期の土器が数片出土した。SQ54・59部分は築堤地点の谷状地形の自然流路東側にあたる。遺物包含層は、斜面下方の西側ほど厚くなり、調査区西壁ではⅡ層は３つに分層できる。SQ54・59部分は谷状地形になっており、Ｂ区基本土層で示した黒褐色土に礫を含むⅡa・Ⅱb層は認められず、黒色土に土器と礫を多量に含むⅡc1層が堆積する。礫が少ないⅡc2・Ⅲ層からも土器片が出土する。Ｂ区基本土層のⅡa・Ⅱb層とⅡc層との層序関係は確認できなかった。

なお、Ｂ区は2017年に調査した破線の東側をB1区、その西側の2018年調査分をB2区とした（第16図）。B2区では調査区内の遺物分布密度を調べるため、２ｍ単位に仮グリッド①～⑰区を設定して遺物を取り上げた。各グリッドの土器点数を見ると、自然流路の谷状地形に土器が集中していることがわかる（第６表）。

第６表　B2区仮グリッド別縄文土器出土点数

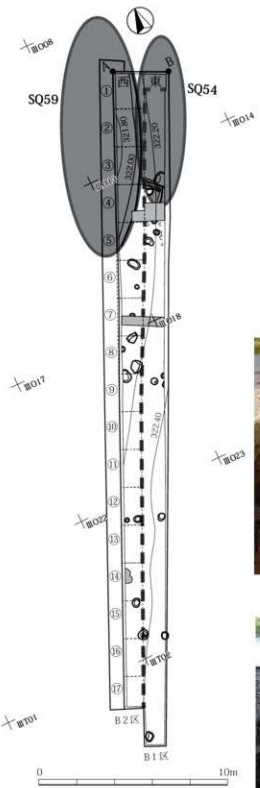
仮グリッド名	点数
①西	247
①東	136
②	247
③	155
④	115
⑤	17
⑥	11
⑦	19
⑧	12
⑨	18
⑩	8
⑪	0
⑫	5
⑬	21
⑭	6
⑮	8
⑯	1
⑰	0

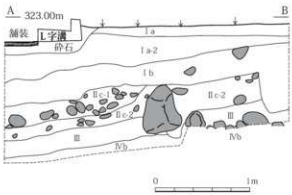
３　縄文時代の遺物

（１）土器・土製品

①概要

縄文土器は、コンテナ５箱分で、その大半はＢ区から出土した。Ｃ・Ｄ区では数点出土したのみである。Ｂ区の主体は中期だが、後期前葉の土器が出土している。また、Ｃ区では前期の土器が、Ｄ区では早期と晩期の土器がわずかに出土した。詳細は遺物観察表を参照いただきたい。





Ⅰa：耕作土
Ⅰa2：砂層
Ⅱc1：黒色土（Hue10YR1.7/1）。10～15cm大の亜角礫を主体に、最大50cm大の礫を含む（SQ54・59遺物包含層）
Ⅱc2：黒褐色土（Hue10YR2/2）。Ⅱc1層に比べ礫が少ない（SQ54・59遺物包含層）
Ⅲ（Ⅱd）：黒褐色砂質土（Hue10YR3/2）。Ⅱc2層より礫が多い
Ⅳb：礫層。暗褐色砂質土（Hue10YR3/3）と礫の混土層

調査区北壁断面Ａ－Ｂ

大形礫を壁面から外した状態

第16図　Ｂ区遺物包含層（SQ54・SQ59）（1：200、1：40）

②土器の観察と分類

県道地点出土土器の分類は、築堤地点とは著しく異なるものはなく、おおむね網羅されるので、築堤地点に準拠する（長野県埋蔵文化財センター2012b）。具体的には以下のとおり。なお、胎土の分類は、本報告書で定めた。土器の文様、胎土、色調などの観察結果は遺物観察表に記した。

土器の分類

第Ⅰ群　早期土器－１類：押型文系土器（1a類：押型文施文、1b類：縄文施文[注2]、２類：沈線文系土器、３類：条痕文系土器

第Ⅱ群　前期土器－１類：羽状縄文系土器、２類：諸磯式土器、刈羽式土器

第Ⅲ群　中期土器－１類：中葉土器、２類：後葉土器、３類：末葉土器[注3]

第Ⅳ群　後期土器－１類：初頭土器、２類：前葉土器、３類：中葉土器、４類：後葉土器

第Ⅴ群　晩期土器－１類：前葉土器、２類：後葉土器（氷式土器）

胎土の分類

胎土は肉眼観察によって以下のとおりに分類した。

A類：褐色粒を含むもの。褐色粒の量によりA1類とA2類に細分する。

A1類：白色鉱物を含み、褐色粒が顕著である。白色鉱物が特に多いものをA1a類、特に少ないものをA1b類とする。

Ａ２類：白色鉱物を含み、褐色粒がわずかである。

B類：白色鉱物を含み、褐色粒を含まないもので、Ｃ・Ｄ・Ｅ類以外のもの。B1～B3類に細分する。

Ｂ１類：褐色粒を含まない。白色鉱物が特に多いものをB1a、白色鉱物が少ないものをB1b類とする。

Ｂ２類：透明な石英を多く含む。

Ｂ３類：輝石などの黒色鉱物を多く含む。

C類：白色鉱物と金雲母を含むもの。

D類：胎土が他に比べ白色を呈するもの。含有物により、D1～D3類に細分する。

Ｄ１類：他に比べ白色を呈し、褐色の粒子を含まない。

Ｄ２類：他に比べ白色を呈し、褐色の粒子を含む。

Ｄ３類：他に比べ白色を呈し、砂粒を多く含む。褐色の粒子を含まない。

E類：植物繊維痕があるもの（繊維土器）。

③遺構出土土器（第17図）

１～３はSB61から出土した。１は中期末葉、２・３は称名寺式併行と判断した。４・５はSK2334から出土した。中期後葉～末葉と考えられ、いずれも無節Ｒの縄文が施文されている。６～11はSK2335から出土した。後期初頭から前葉のものと判断した。９は条線文土器で、中期後葉から末葉の可能性もある。10は網代痕がある底部、１は無文の頸部にくびれがある壺形の土器であるが、類例を見いだせない。

④遺構外出土土器（第17図～23図）

B区から出土した中期後葉から末葉の土器が大半を占める。19・186がＡ区、17・18・110・138～144がＣ区、12～14・16・23・33・119・159・205・206がＤ区で出土した。他はすべてＢ区である。

注２：築堤地点では１類と一括しているが、信濃町東裏遺跡の押型文土器前半期に伴う表裏縄文土器に類似する縄文施文土器が確認されたため、本書では押型文施文をⅠa類、縄文施文土器をⅠb類に細分した。

注３：本報告書で用いる縄文時代中期の時期区分の呼称と土器型式の対応は以下のとおりである。なお、中期に限らないが、本書では築堤地点の分類に従うが、その群・類・呼称は用いていない。
縄文中期中葉：新道式、藤内Ⅰ・Ⅱ式、井戸尻Ⅰ・Ⅲ式、曽利Ⅰ式
縄文中期後葉土器：大木8b式、加曽利ＥⅡ式
縄文中期末葉土器：大木９・10式、加曽利ＥⅢ・Ⅳ式、沖ノ原式、串田新式

第Ⅰ群（早期土器）（第17図）：１類（押型文系土器）では押型文土器は確認できなかったが、押型文土器に伴うと想定される縄文土器（1b類）がＤ区で出土した（第17図12～14）。いずれも金雲母を多量に含んでおり、中・後期の土器と胎土が異なる。類似する胎土は、信濃町東裏遺跡等で押型文土器に伴う縄文または表裏縄文土器に見られることから、早期前半の土器と判断した（長野県埋蔵文化財センター2000b）。

２類（沈線文系土器）は確認できなかった。

３類（条痕文系土器）がＢ区とＤ区でわずかに出土した。16は外面は細い絡条体条痕（または櫛歯工具による条線文）で、内面には太い絡条体条痕が認められる。胎土に繊維を含む。

第Ⅱ群（前期土器）（第17図）：拓本を掲載した２点の２類を確認した（第17図17・18）。17は諸磯ａ式、18は諸磯ｂ式である。この他に、第21図127・130などの薄手の単節縄文施文土器は前期の可能性があるが、明確に区分することはできなかった。１類は確認していない。

第Ⅲ群（中期土器）（第17図～21図）：１類（中葉土器）は確認できなかった。94が該当する可能性もあるが、小破片のため断定できない。

２類（後葉土器）に断定できる遺物はないが、84～89の口縁にめぐる円形刺突列や口縁部隆帯に刺突または圧痕があるものが、中期後葉～末葉に存在する。これらが中期後葉のものであるとは断定できない。90、91、95が相当する可能性があると思われるが、小破片で特定できない。

３類（末葉土器）は、本調査地点の中期土器の大半を占める。19は沖ノ原式、20・21は串田新式である。22～33は曲線的な微隆起帯を有し、加曽利ＥⅢ式に併行のものである。34～57は横走または縦走する微隆起帯を有し、加曽利ＥⅣ式併行のものと考えられる。58～63は両耳壺である。64～68・72はＶ字またはＵ字の沈線で区画した単節縄文施文の一群で、加曽利ＥⅣ式から称名寺式に併行するものである。73～80は口縁部の横走沈線と縄文施文の一群である。97～134は無節あるいは単節縄文で、他時期のものを含んでいる可能性がある。135～149は条線文が施されている。150・151は南垂状の短沈線があるもので、Ｂ区では類例が少ない。152は粘土紐を撚った隆帯装飾である。153～156は把手の破片である。

なお、無節あるいは単節縄文、条線文は後期初頭の称名寺式土器と共伴する土器にも施文されており、これらの中には後期の土器を含んでいると考えられるが峻別できなかったので、ここに含めた。

Ⅳ群（後期土器）（第22図・23図）：１類は第22図157～173（称名寺式併行）、２類は第22図176～189（堀之内式併行）である。157・158は称名寺式古段階に並行するものと判断した[注4]。159～170は称名寺式、171～174は三十稲葉式、176～189は堀之内式並行のものである[注5]。190～197は無文土器で、土器型式を判別することはできないが、中期末葉から後期前葉のもので、多くは後期の称名寺式から堀之内式に伴うものであろう。198～204は底部破片であり、199以外は網代痕が確認できる。これらの多くは１・２類のものと判断した。

３・４類の土器は確認できなかった。

Ⅴ群（晩期土器）（第23図）：１類は確認できなかった。205は口唇部に刻みがあり、206は浮線文が施される。いずれも２類の氷式期のものと判断した。

⑤土製品・ミニチュア土器（第23図207～212）

いずれもＢ区の遺物集中（SQ54・59）で出土した。207・208は土製円板、209は土偶の腕、210はミニチュア土器である。211は円筒形で、下部は欠損している。212は断面円形で、両端が欠損している。

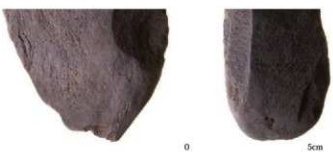
注４：柳沢遺跡桑堤地点で類似資料が出土している（長野県埋蔵文化財センター2012b）。
注５：堀之内式併行期については「ひんご１式、２式」が提唱されているが（長野県埋蔵文化財センター2018）、本遺跡では良好な資料が出土しておらず、ひんご式に該当するのかどうかはわからない。

（２）石器・石製品（第24図・第25図）

Ｂ～Ｄ区で石器44点、剥片83点が出土した（第７表）。本節では、縄文時代の石器についてまとめるが、Ｄ区の遺物集中は、縄文土器が少なく弥生土器が多いので、同地点から出土した石器、特に石核と剥片は、弥生時代のものが含まれている可能性が高い。出土状況または形態から明らかに弥生時代中期のものと判断できるものは第４節で報告する。

１～５は石鏃である。１は草創期の有茎尖頭器である可能性が高い。６・７は石鏃未成品、８は縦長剥片を用いた掻削器、９・10は石錐、11は削器、13は磨製石斧である。12・14～24は打製石斧で、下の写真で見えるとおり、19と21の刃部に顕著な摩耗痕が認められる。25は石錘である。26～28は石核で、いずれも縄文土器が少ないＤ区で出土したもので、弥生時代の遺物である可能性もある。29は厚さ3.5cmの板状の破片で、片面が摩耗しており、敷石住居跡の敷石の破片であろう。

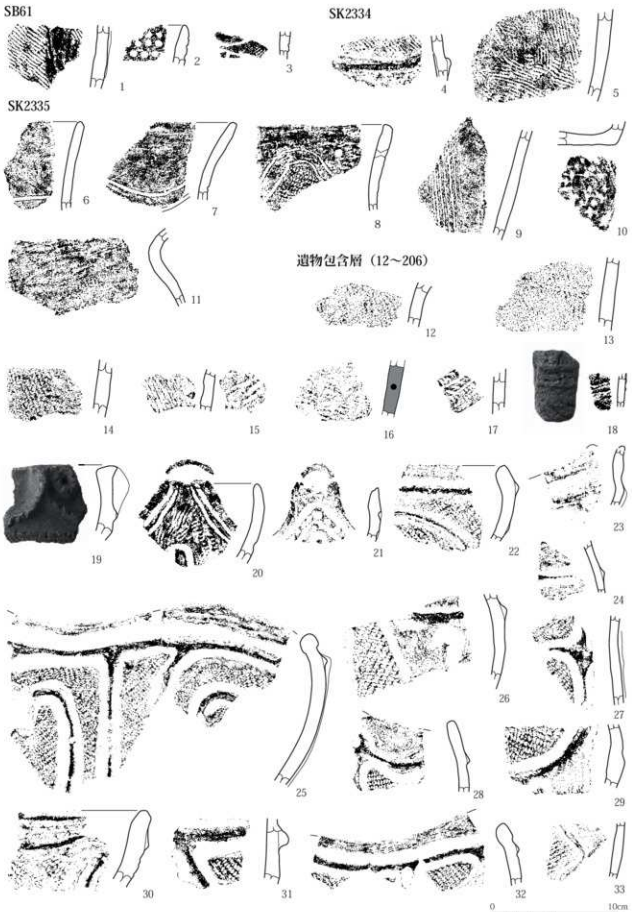
剥片の石材は黒曜石22点、チャート18点、頁岩18点、安山岩12点、その他13点である。Ｂ区の剥片の中には、調整剥片が含まれている。特に、打製石斧と同じ石材である頁岩の剥片には調整剥片が多い。また、黒曜石剥片の中に両極打法により剥離したものが認められる。



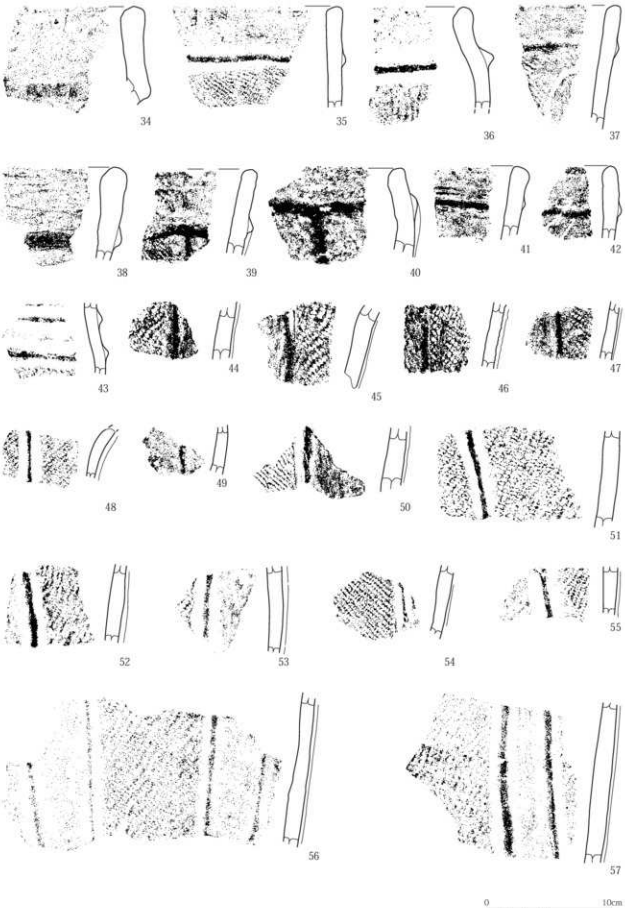
打製石斧摩耗痕　右：第25図19、左：第25図21

第７表　縄文時代の石器器種組成

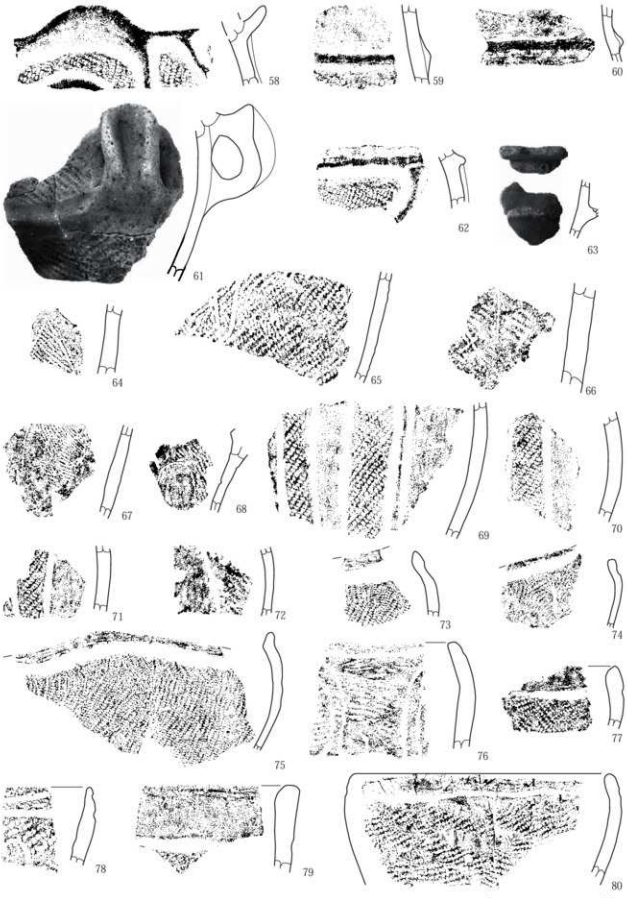
地区名	石鏃	石鏃未成品	石錐	掻削器	削器	抉入削器	楔形石器	二次加工がある剥片	微細な剥離がある剥片	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧破片	石錘	砥石	軽石	石核	小計	剥片	合計
Ｂ区	4	2	1		2	1	1	2	3	14	1	1	1			1	34	55	89
Ｃ区	1		1											1	2		5		5
Ｄ区				1						1						3	5	28	33
合計	5	2	2	1	2	1	1	2	3	15	1	1	1	1	2	4	44	83	127



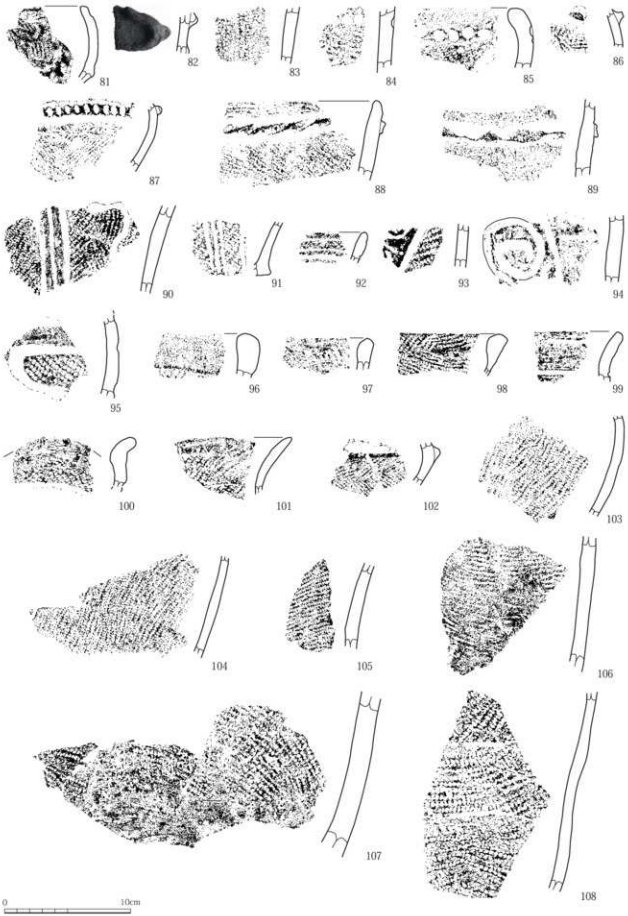
第17図　縄文時代の土器１



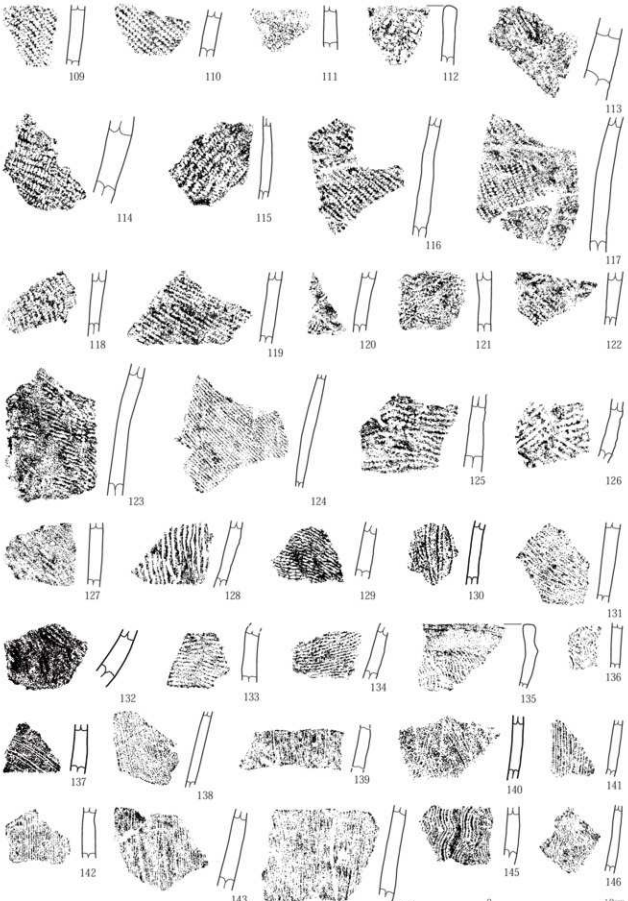
第18図　縄文時代の土器２



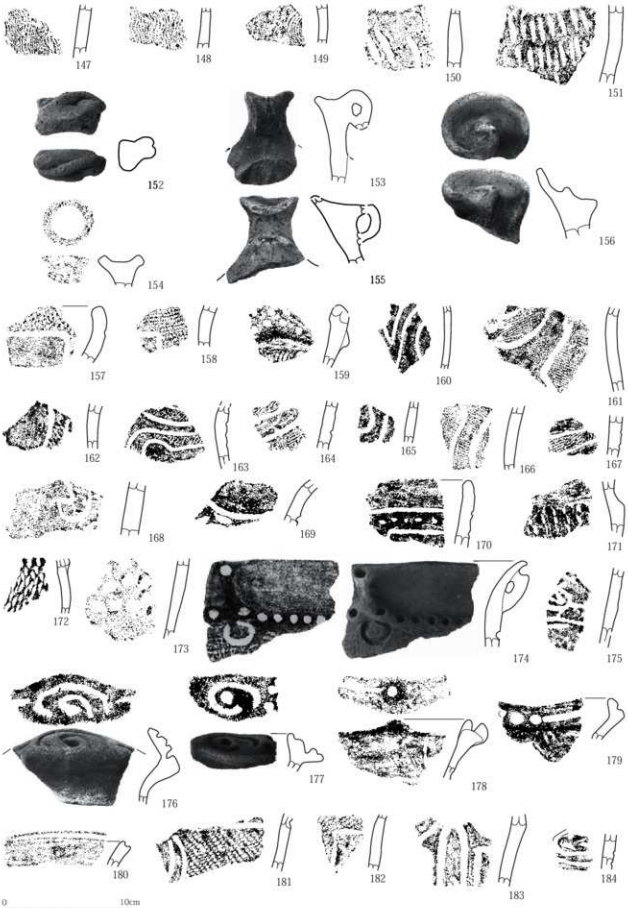
第19図　縄文時代の土器３



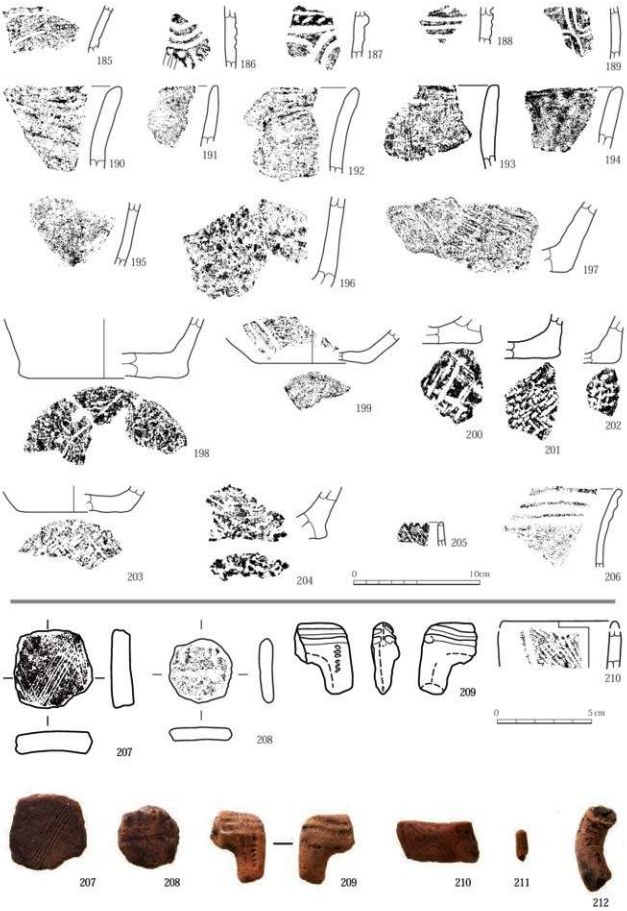
第20図　縄文時代の土器４



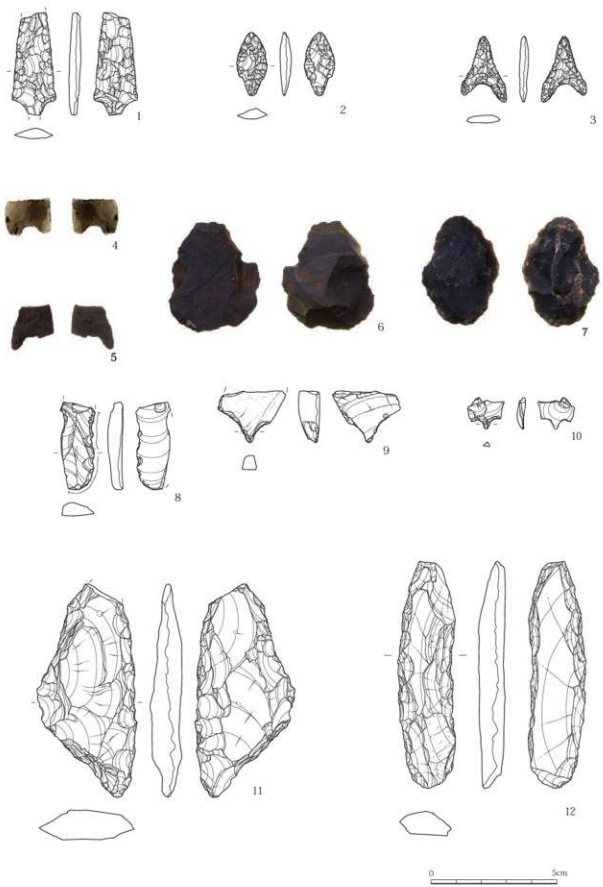
第21図　縄文時代の土器５



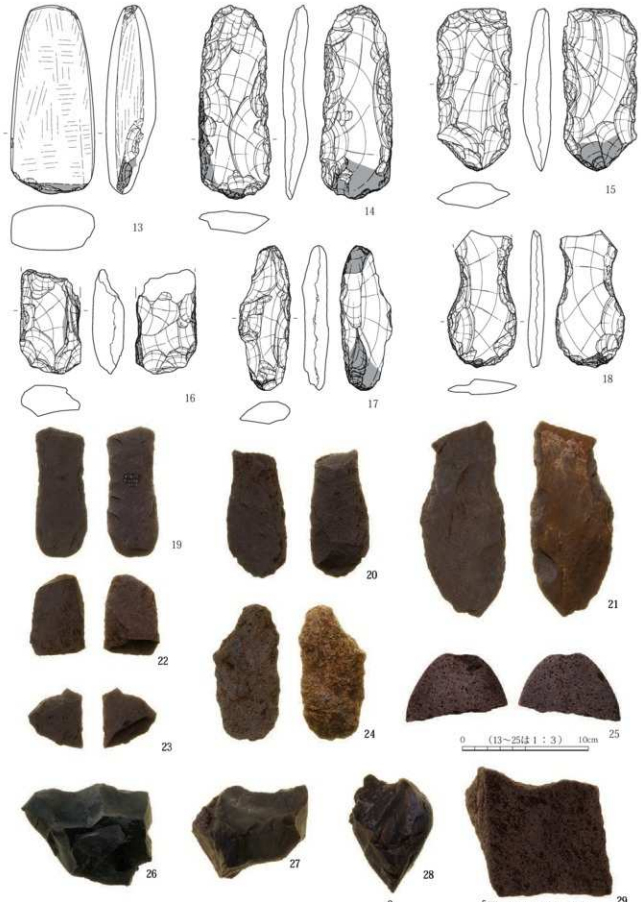
第22図　縄文時代の土器６



第23図　縄文時代の土器７・土製品・ミニチュア土器



第24図　縄文時代の石器１



第25図　縄文時代の石器２

第４節　弥生時代の遺構と遺物

１　概要

弥生時代の遺構・遺物の多くはＣ・Ｄ区で検出した。Ａ・Ｂ区では土器がわずかに出土したのみで、遺構は無かった。Ｃ区では、水田の用水と考えられる溝跡１条、Ｄ区では縦軸４ｍを越える楕円形の竪穴建物跡を検出した。土器は中期後半が主体だが、後期もわずかに出土した。Ｃ・Ｄ区では、遺物の出土地点の平面分布がまとまっている傾向にあり、遺物集中（SQ53、55～58、60）として把握した。弥生時代に限定できる石器は少なく、刃器２点、凹石１点のみである。

２　弥生時代の遺構

（１）竪穴建物跡

SB62（SQ51）（第14・26図）

Ｄ区のⅨJ02グリッドのⅢ層上面で検出した。当初、土器がまとまって出土することから遺物集中SQ51として調査を進め、基本土層Ⅲ層上面で落込みを確認した。落ち込みの形状等を確認するために、調査区の北側を拡張した。竪穴建物跡の可能性が高いと判断して、整理段階でSB62の遺構番号を付した。なお、記録類と遺物の注記はSQ51の遺構記号を用いている。

SD83、SK2343は本遺構を切っており、いずれも本遺構より新しい。また、南壁の一部を確認調査トレンチよってに削平している。

長軸420cm、短軸推定300cm、深さ９cmの楕円形を呈す。排水溝と確認調査トレンチで掘削したため、壁が確認できなかったところは破線で示した。柱穴と考えられるピットを６基（P2～P7）検出したものの、一定間隔で配置されていないため、柱穴と断定できなかった。遺構中央部に炉跡に対応し得る窪み（P1）があるが、わずかに炭化物は見られるものの、焼土は確認できず、炉跡と断定できない。貼床もなかった。１層～８層が埋土である。５層～８層には礫が多く含まれており、これらの礫は、土石流に由来する可能性がある。なお、埋土や地山がグライ化しており、焼土を認識できなかった可能性もある。規模や形状から竪穴建物跡の可能性が高いと考えた。

弥生時代中期後半の土器（第31図213～261）と掻削器、打製石斧（第24図８・第25図17）が出土した。２点の石器については、埋土内に剥片が認められないこと、縄文時代中期の土器片が数点出土していることから、縄文時代の混入品と思われる。

出土土器から栗林２式期の遺構と判断した。

（２）溝跡

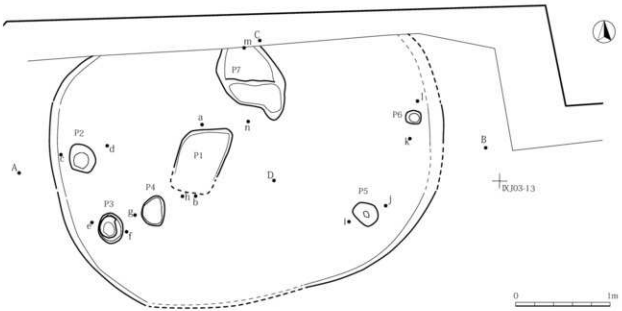
SD91（第13・27図）

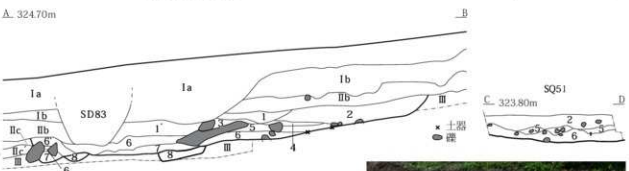
SD91（南から）

Ｃ区ⅦW16グリッドからⅨC07グリッドにかけて、Ｃ区基本土層Ⅲ層（Ⅲe層）上面で検出した。ⅨC02・07グリッドではⅢb1'層が覆っており、Ⅲb1'層を除去して溝を検出した。地山が粘土質シルト層で、埋土が砂質シルトまたは砂層であることから明確に認識できた。

SD87・88に切られており、いずれも本遺構より新しい。

検出した部分は、幅1.62ｍ～2.0ｍ、長さ26ｍ、深さ



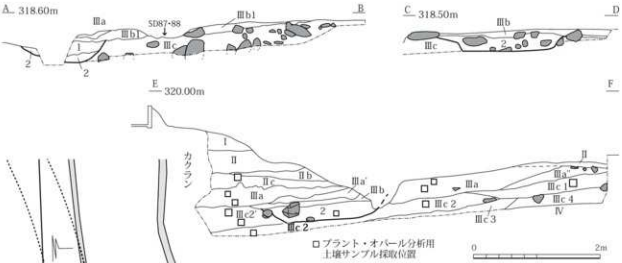


【断面Ａ－Ｂ、断面Ｃ－Ｄ】
Ⅰ層群～Ⅲ層群は基本土層
１：黒褐色粘土質シルト（Hue10YR3/1）。ラミナを含む
２：黒褐色粘土質シルト（Hue10YR3/1）。Ⅱｂ層より灰色
３：褐灰色砂まじりシルト（Hue10YR4/1）
４：褐灰色砂質シルト（Hue10YR5/1）
５：褐灰色砂質シルト（Hue10YR5/1）。風化した黄褐色礫を混じる。褐灰色シルトブロックを混じる
６：褐灰色シルト（Hue10YR4/1）。白色、明黄褐色の５mm ～５cm 大の礫を含む
７：褐灰～灰黄褐色砂質シルト（Hue10YR6/1 ～6/2）。風化した明黄褐色の礫を含む
８：灰黄褐色粘質シルト（Hue10YR5/2）

【Ｐ１～Ｐ６断面】
１：灰黄褐色粘質シルト（Hue10YR5/2）

【Ｐ７断面】
１：灰黄褐色粘質シルト（Hue10YR5/2）。灰黄褐色粘質シルトブロックを含む
２：灰黄褐色砂質シルト（Hue10YR5/2）

第26図　SB62（SQ51）（１：40）



SD91 理土
１：灰色砂質シルト（Hue5Y4/1）
２：灰色砂礫（Hue5Y4/1）。粗粒砂に１～３cm 大の円礫が多く混じる

※ローマ数字はＣ区基本土層名に対応する
Ⅰ：灰黄色シルト（Hue10YR5/2）。現代の水田耕作土
Ⅱ：黒褐色シルト（Hue10YR3/1）。粘性あり
Ⅱb：褐灰色～黒褐色シルト（Hue10YR4/1 ～ 3/1）
Ⅱc：褐灰色～黒褐色シルト（Hue10YR4/1 ～ 3/1）。Ⅱb 層よりも砂質。中世すり鉢破片出土
Ⅲa：黒褐色粘土質シルト（Hue10YR2/2）
Ⅲa'：黒褐色シルト（Hue10YR2/2）。Ⅲa 層に砂を混じる
Ⅲa"：黒褐色シルト（Hue10YR3/2）15 ～ 20cm 大の礫を含む
Ⅲb1：灰色シルト（Hue5Y4/1）Ⅲa 層が粒状に混じる時間がたつと酸化して（黄味がかった）黒褐色（Hue2.5Y3/2）に変色する
Ⅲb2：灰色砂質シルト（Hue5Y4/1）。Ⅲb1 より砂質。酸化して（黄味がかった）黒褐色土（Hue2.5Y3/2）に変色する
Ⅲc：黒褐色粘質シルト（Hue10YR2/2）。１～ 30cm 大の礫を多く含む
Ⅲc2：黒褐～褐灰色粘土質シルト（Hue10YR3/2 ～ 4/1）
Ⅲc2'：褐灰色粘質シルト（Hue10YR4/1）。１～５cm 大の礫を少量含む
Ⅲc3：褐灰色～灰黄褐色粘土質シルト（Hue10YR4/1 ～ 4/2）
Ⅲc4：黒褐色粘土質シルト（Hue10YR3/1）。15 ～ 20cm 大の礫を含む
Ⅳ：黒褐～褐灰色粘土質シルト（Hue10YR5/1 ～ 4/1）

SD91断面Ｃ－Ｄ

第27図　SD91（１：200、１：60）

28cm～40cmである。調査区南壁面で、SD91埋土を確認できたことから、溝はさらに南へ延びている。底面は南に向かってわずかに下がる。南端部のⅨC07グリッド周辺で埋土中に人頭大の礫がまとまって出土した。礫の分布は溝に沿って５ｍほどの範囲に及んでおり、他の地点では見られないことから、これらの礫は溝にかかわる施設の構築材であった可能性がある。

埋土に砂層が厚く堆積することから、洪水砂で埋没したと判断した。溝の位置、方向、埋土が類似することから築堤地点の３号溝の続きと考えられる。

なお、断面Ｅ－ＦのⅡｃ～Ⅲc層のプラントオパール分析をしたところ、Ⅲc2'層では多量のプラントオパールが検出されたが、SD91より東側のⅢc2層では１点も検出されなかった。分析結果と所見は第３章第８節で詳述する。

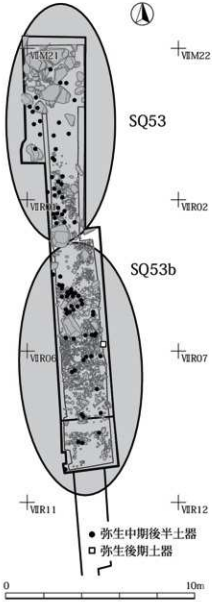
弥生時代中期後半の土器（第32図262～283）、土製円板１点（第37図458）、刃器１点（第38図22）、凹石１点（同図23）が出土した。出土した土器から栗林２式期以降に埋没したと判断した。なお、本遺構を覆うⅢb層からは弥生時代後期吉田式と思われる土器片が出土しており、遅くとも吉田式期には埋没していたことがわかる。

（３）遺物包含層の出土状況

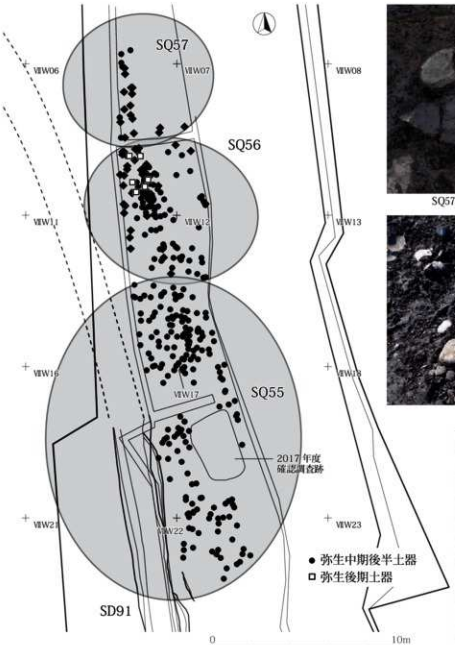
弥生時代の遺物は主にＣ区、Ｄ区で出土した。特にC1区、C2区、D2区で土器がまとまって出土した。これらを遺物集中として記録し、それぞれSQ53・53ｂ（C1区）、SQ55・56・57（C2区）、SQ58・60（D2区）の記号を遺物注記、図面類に用いている。

Ｃ区では、５cm大以上の大きさの土器片は出土位置を記録し、第28・29図にその出土状況を示した。SQ53・53bでは遺物包含層中に、50cm大以上の亜角礫が複数点在しており、拳大の礫も多量に出土した。これらの礫は、調査区の東側にある高杜山から崩落したものと思われる。SQ53・SQ53bの遺物集中の遺物は、基本土層Ⅲb1、Ⅲb2層から出土し、同層中には古墳時代から平安時代の土器が混在していた。古墳時代と平安時代の遺物の出土状況については、それぞれ、第３章第５・６節で記述する。

Ｄ区では、基本土層Ⅱ層で弥生時代の土器がまとまって出土した。同層中には平安時代の土器が混在して出土するが、SQ58のⅡ層下部



第28図　遺物包含層の弥生時代土器出土状況（SQ53・53ｂ）（１：200）



SQ57遺物出土状況（第33図310）

SQ56遺物出土状況

SQ55遺物出土状況（第33図320）

SQ55南半部

SQ55・SQ56

第29図　遺物包含層の弥生時代土器出土状況（SQ55～57）（１：200）

では弥生土器のみが出土した。

３　弥生時代の遺物

（１）土器・土製品

①　概要

弥生土器は中期後半の栗林式土器を主体とし、中期中葉と後期の吉田式、箱清水式がわずかに出土した。中期後半の土器はＡ～Ｄ地区で出土したが、後期の土器はＣ区にまとまる。

栗林式土器の段階設定は、築堤地点に準拠して石川日出志氏の区分を基にした（石川2002、2012）。

②　土器の分類と観察

器種分類

土器の器種名称は本来、壺形土器、甕形土器、高杯形土器、鉢形土器などであるが、本文中では省略して壺、無頸壺、甕、台付甕、高杯、鉢、甑、蓋と呼称した。これらの器種を模倣した器高10cm以下の小型の土器をミニチュア土器とした。

文様の分類と施文方法及び器面調整の呼称

施文方法、文様、器面調整については、詳しい分析が行われている松原遺跡の呼称に概ね準拠し、以下のように定義した（長野県埋蔵文化財センター2000）。第31～36図に掲載した土器の観察結果は、以下の用語を用いて遺物観察表に記載した。なお、掲載していない属性は添付DVDに収録した。

文様の施文方法の呼称：出土土器に見られる文様要素には以下のものがある。

沈線文：施文原体は１本の棒状工具で、３～５mm程の幅の沈線が多い。横方向に描くことが基本となり１本ずつ描かれる。まれに幅１mm程度の細沈線がある。

櫛描文：施文原体は細い棒状のヒゴを束ねたものが想定され、徳永哲秀氏は「簾状工具」と命名している（徳永1995）。簾状工具は径１～２mmの棒が横位に編み込まれて結束したもので、櫛描文はその端部を器面にあて移動させることによって文様を描く。

刺突文：工具を器面に直角に刺突するもので、刺突の形状により以下の３類に分類した。

Ａ類：施文具の鋭い縁辺部で器面に刺突し、幅１～２mm程度の細い刺突が連続するもの。

Ｂ類：扁平な棒状工具等で刺突し、幅３mm前後の刺突が連続するもの。刺突の内部に線状や網目状の文様が見られる場合がある。

Ｃ類：断面円形の棒状工具で刺突し、円形の刺突が連続するもの。

押引き文：施文原体は幅３～５mmほどの棒状工具または竹管で、原体を器面に斜めに押し当ててから位置をずらし、再び器面に押し当てることを繰り返し、線状に並ぶ列点となる。押引き列点文と呼称する場合もある。

回転縄文・撚糸文：回転縄文では無節または単節縄文がみられ、単節縄文ではLRが圧倒的に多い。絡条体を原体とした撚糸文。

貼付文：薄い円形の粘土を貼り付けたもの。

口縁端部調整の呼称：以下の口縁端部調整の手法が見られる。

ユビオサエ：口縁端部を内外面から指でつまんで調整を行うもので、口唇部が波状を呈することがある。

オサエ：口唇部に棒状工具、縄、植物の雄花序などの側面で押圧するもの。

刺突：口縁端部に板状工具の小口を突き刺すもので、ユビオサエ、オサエよりも細くて深い縦位線が刻まれるもの。なお、オサエか刺突か判断できないものもあり、両者を合わせてキザミと表現する場合もある。

文様の呼称：第30図に弥生時代中期後半から後期に見られる主な文様の分類図を示した。基本的には松原遺跡の文様呼称に従ったが、各文様の細分は行わなかった[注1]。

沈線文様は、横走沈線文、波状沈線文、山形沈線文、鋸歯沈線文、押引き文、連弧文、重山形文、懸垂文、重三角文、複合鋸歯文、コの字重ね文、重斜線文[注2]がある。変形工字文は今回の調査では出土していない。懸垂文[注3]は、U字状の沈線内部に櫛描文または縄文などを充填し、沈線に沿って押引き列点文が付加される場合がある。

櫛描による文様は、櫛描直線文、櫛描簾状文、櫛描波状文、櫛描山形文、櫛描短斜線文、櫛描縦羽状文、櫛描横羽状文、櫛描斜線文、櫛描垂下文、櫛描格子目文[注4]、櫛描T字文（T字文）がある。T字文は図に示していないが、密接施文の櫛描直線文の後、（櫛描）垂下文を描くもので、弥生時代後期の壺にみられる。

沈線、櫛描による文様の他に、ボタン状貼付文（円形貼付文）、赤彩などの文様がある。器面の摩耗が著しく、特に中期後半の土器は赤彩が剥れている例が認められる。実測図では、赤彩が想定される場合は、剝れた部分も想定して、網掛けで示した。

器面調整の呼称：本報告書で用いる器面調整に伴う痕跡には、ナデ、ハケメ、ミガキ、ケズリがある。ハケ調整については条線の密度により以下のとおり分類した。

ハケA：１cmに10本以上の条線がある細密なハケ調整。

ハケB：ハケAより粗く、ハケCより細密なハケ調整。

ハケC：１cmに５本以下の条線がある櫛描文に近い粗いハケ調整。

胎土の分類：胎土は肉眼観察によって以下のとおりに分類した。個々の胎土の観察結果は、巻末の遺物観察表に記した。

A類：褐色粒を含むもの。褐色粒の量によりA1類とA2類に細分する。

A1類：白色鉱物を含み、褐色粒が顕著である。白色鉱物が特に多いものをA1a類、特に少ないものをA1b類とする。

A2類：白色鉱物を含み、褐色粒がわずかである。

B類：白色鉱物を含み、褐色粒を含まないもので、C・D・E類以外のもの。B１～３類に細分する。

B1類：褐色粒を含まない。白色鉱物が特に多いものをB1a、白色鉱物が少ないものをB1b類とする。

B2類：透明な石英を多く含む。

B3類：輝石などの黒色鉱物を多く含む。

C類：白色鉱物と金雲母を含むもの。

D類：胎土が他に比べ白色を呈するもの。含有物により、D１～３類に細分する。

D1類：他に比べ白色を呈し、褐色の粒子を含まない。

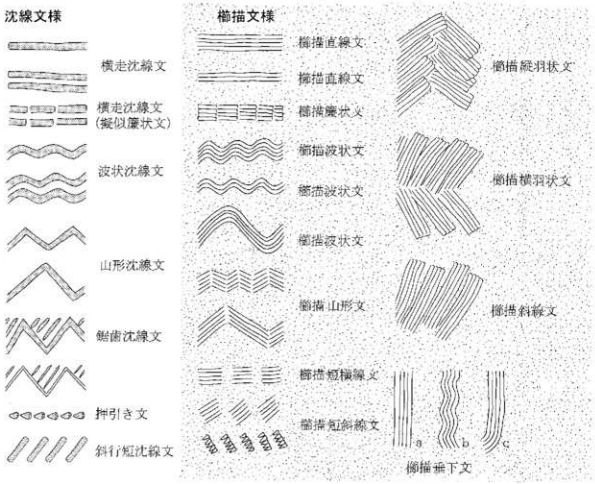
D2類：他に比べ白色を呈し、褐色の粒子を含む。

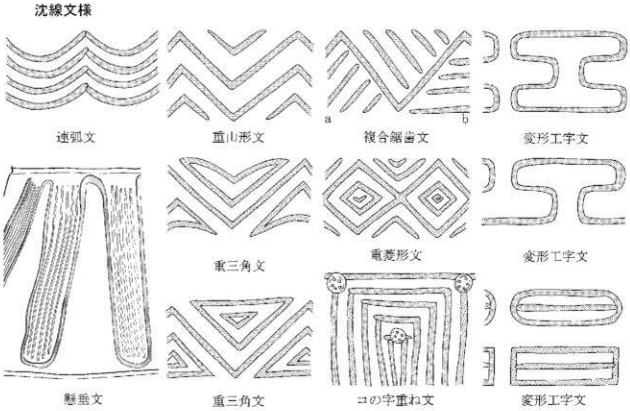
D3類：他に比べ白色を呈し、砂粒を多く含む。褐色の粒子を含まない。

③　道構内の土器

SB62（SQ51）（第31図213～261）：213～218・229～246は壺、219・220・247～259は甕、221は台付甕、222～224は高杯、225～228・260・261は鉢である。大半は栗林２式のものと思われるが、それ以外の型式の土器を以下に記す。214・246は同一個体の可能性があり、沈線と貼付文を組み合わせた特殊な文様があ

注１：松原遺跡では、各文様をａ・ｂ・ｃなどに細分している。
注２：第32図310の胴部に見られる複数の斜線が併行する文様。
注３：懸垂文は、懸垂舌状文とも呼称される。
注４：第32図301に見られる櫛描斜線文で格子目を描いたもの。





第30図　弥生土器文様の呼称（長野県埋蔵文化財センター2016a）

る。226は赤彩が内面のみにあり、後期初頭吉田式の可能性がある。229には口縁内面に櫛歯状工具による刺突文があり、北陸系の小松式土器の影響が認められる。251は胴部に刺突列が巡る甕で、栗林１式にも見られる古い様相を示す。259は縄文施文の甕で、栗林式では類例が少ない。

SD91（第32図262～290）：262～265・274～279は壺、266・267・269～273・280～289は甕、268は蓋、290は鉢である。274は高台が付く器形で、栗林式には類例が見当たらないが、他に弥生時代中期後半以外の遺物が出土しないことから、当該期の土器と判断した。甕では286・284などが栗林１式から２式古段階の様相を示す。

④　遺構外の土器

中期後半の土器（第32図291～第36図440）

Ａ区・Ｂ区の土器（第32図291～304）：291～297は壺、298～303は甕、304は高杯である。いずれも栗林１式から２式のものが多い。300がＡ区、その他はＢ区で出土した。

Ｃ区の土器（第33図305～第35図404）：305～318・336～376は壺、319～327・377～400は甕、328～333は高杯、334・335・401～404は鉢である。栗林２式が主体であるが、古い様相のものと新しい様相のものが混在する。これらの大半はSQ53・SQ55～SQ57で出土したものである。

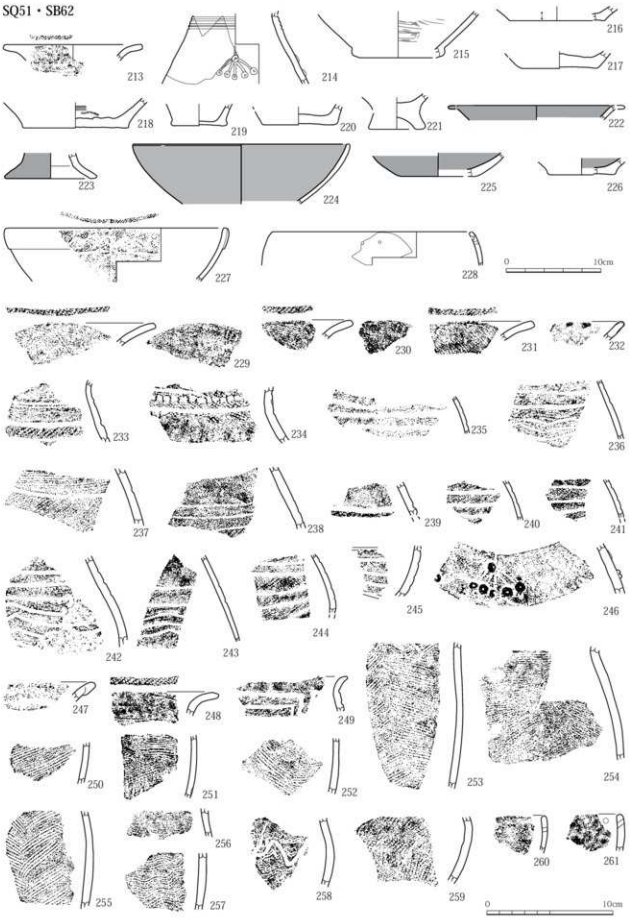
312はハケ調整の後全面にミガキ調整をした無文の壺で、栗林式では特殊な器形である。317と376は胎土と器面調整が類似しており同一個体と考えられる。胎土が栗林式と異なり白色を帯びることから、北陸系土器の搬入品である可能性が高い。317の底部には、対象物は特定できないが、圧痕がある。376は両面にハケ調整が顕著である。319は口縁外面に波状沈線が、内面に赤彩があり、類例が少ない。328は磨耗して確認できないが、赤彩された高杯と考えられる。387は縦走沈線（疑似条痕）の後に横走沈線（疑似条痕）を施文しており、力石条里遺跡群の中期中葉の甕に類似する（長野県埋蔵文化財センター2011）。400の表面には糎圧痕が確認できる。401は片口のような円孔の一部がある。栗林式に類例を確認できない。

Ｄ区の土器（第35図405～第36図440）：405～409・414～422は壺、410・411・423～438は甕、439は鉢、412・413・440は高杯である。栗林１式・２式が主体と思われるが、古い様相と新しい様相とが混在する。

405・415は口縁部内面に板状工具による刺突列が巡り、北陸系土器の影響と考えられる。特に415の羽状沈線文は小松式の影響と考えられる。412は杯部の脚部との接合面に、ヘラ状工具で凹凸を付けた痕跡がある。甕には、胴部の刺突列（431・433）などの古い様相と、頸部の横走する櫛描直線文（425・427）などの新しい様相をもつものがある。

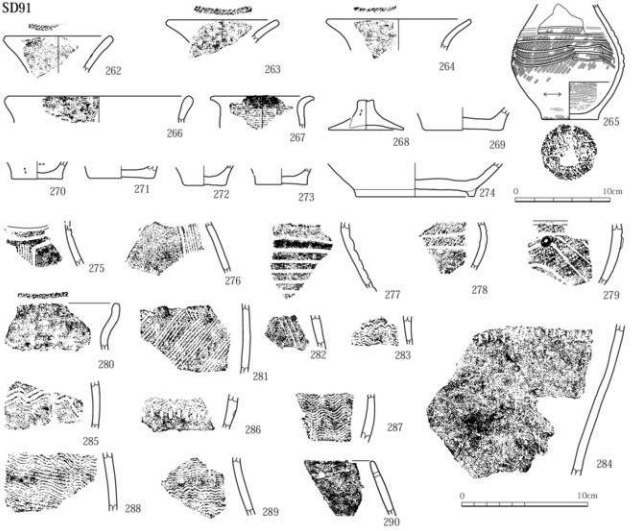
後期の土器（第36図441～452）

441～443・445～448は壺、449～452は甕、444は高杯である。いずれもＣ区から出土した。壺はいずれも吉田式と考えられるが、450・451の甕は箱清水式の可能性がある。

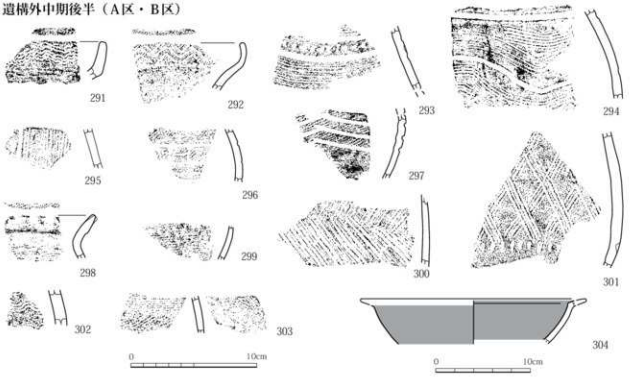


第31図　弥生時代の土器１（中期後半）

SD91

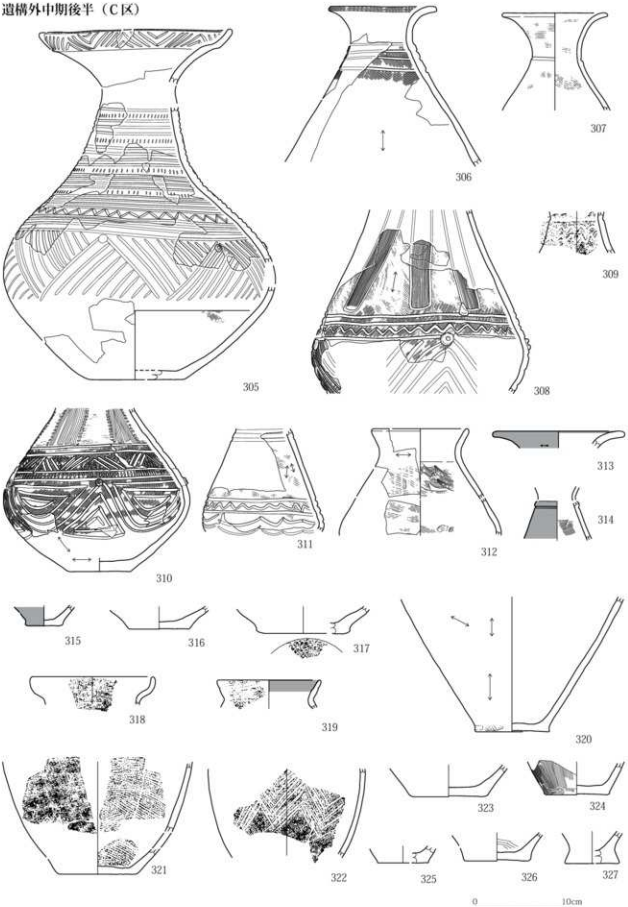


遺構外中期後半（A区・B区）

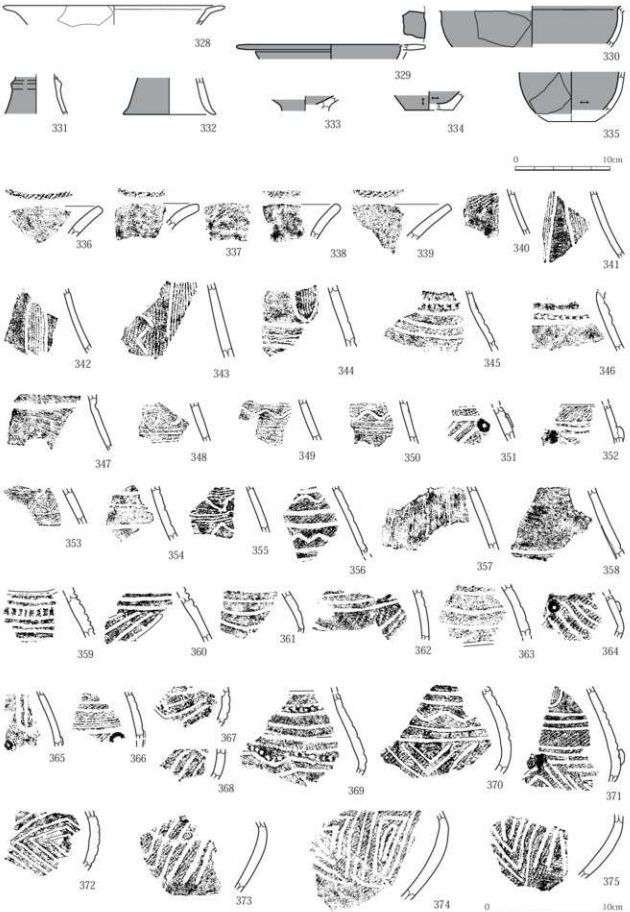


第32図　弥生時代の土器２（中期後半）

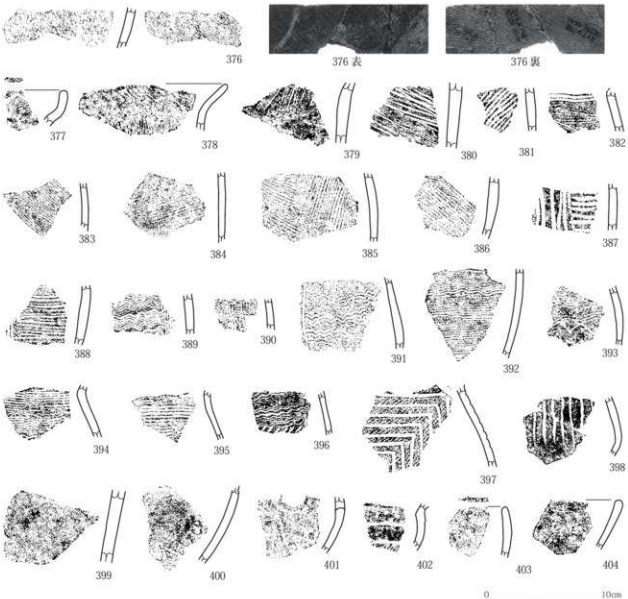
遺構外中期後半（Ｃ区）



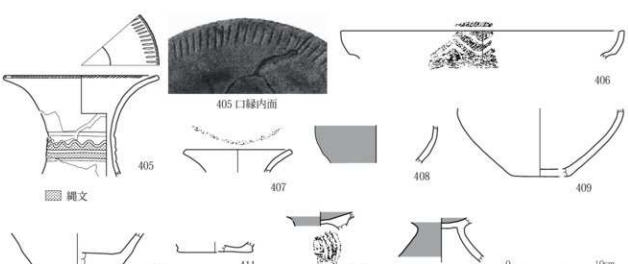
第33図　弥生時代の土器３（中期後半）



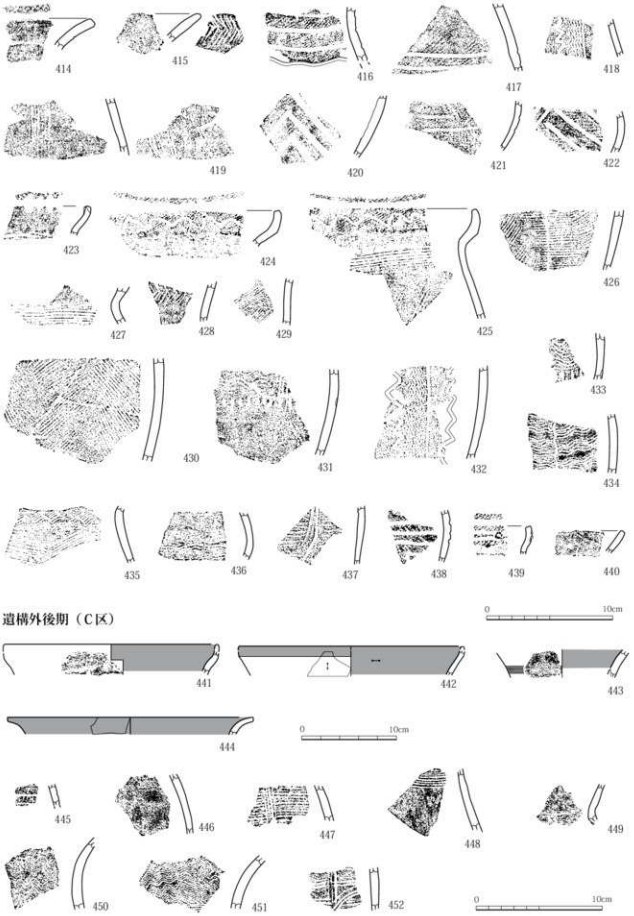
第34図　弥生時代の土器４（中期後半）



遺構外中期後半（D区）



第35図　弥生時代の土器５（中期後半）



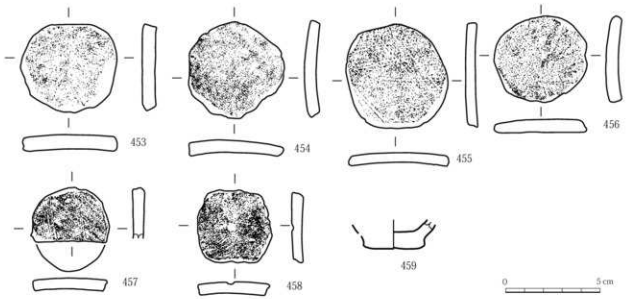
第36図　弥生時代の土器６（中期後半・後期）

⑤　土製品

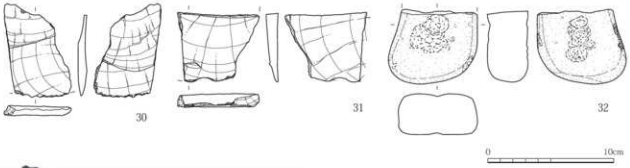
第37図453～458は土製円板である。456がＤ区、457がＢ区、他はＣ区で出土した。455・457は中期後半の櫛描羽状文の甕の破片を用いているが、他は無文部の破片を用いており時期は不明である。458は中央部に穿孔の痕跡がある。459はミニチュア土器の底部で、Ｄ区で出土した。

（２）石器

弥生時代の石器と考えられるものは、刃器４点（第38図30・31）、凹石１点である（同図32）。刃器はすべて欠損品で輝石安山岩を用いている。凹石も欠損品で安山岩製である。30は遺物集中SQ56で、31・32はSD91で出土した。



第37図　弥生時代の土製品・ミニチュア土器



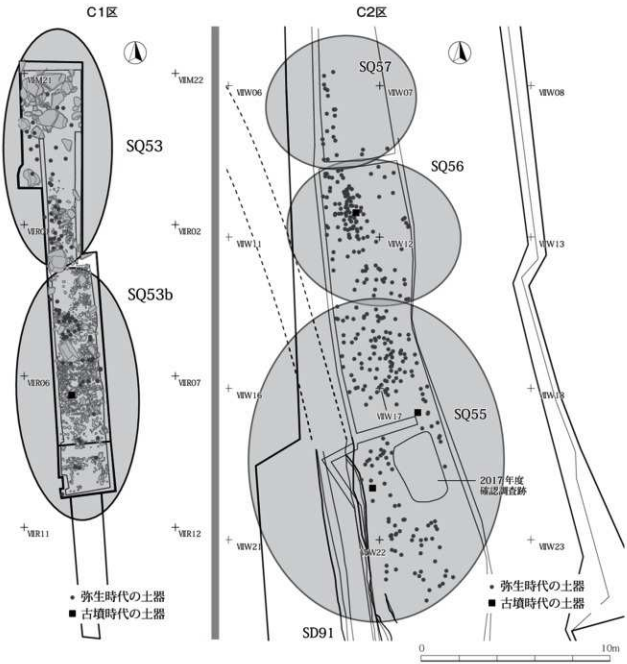
第38図　弥生時代の石器

第５節　古墳時代の遺物

１　概要

古墳時代の遺構はなく、土器がＣ区とＤ区で少数出土したのみである。Ｃ区では、弥生時代中期後半から平安時代の遺物集中SQ53b・55・56の基本土層Ⅲ層で出土した（第39図）。Ｄ区ではSB62周辺の基本土層Ⅱb層から出土した。古墳時代の土器は、図示したものを含めて19点の土器破片を確認した。

SQ57土器出土状況（第40図462）

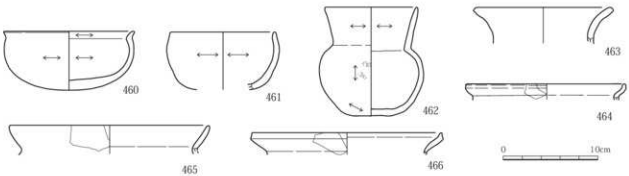


第39図　古墳時代の土器出土状況

２　古墳時代の土器（第40図）

460・461は杯、462はほぼ完形の小形丸底壺、463～466は甕である。463・464・466は前期、460～462・465は中期であると考えられる。466はＤ区で、他はＣ区で出土した。

土器の器面調整、法量等は、遺物観察表に記した。



第40図　古墳時代の土器

第６節　平安時代の遺構と遺物

１　概要

Ｃ・Ｄ区で遺構（土坑）と遺物を検出した。Ａ・Ｂ区では、遺構、遺物ともに検出されなかった。土坑はいずれも柱穴と思われる小形のものである。掘立柱建物跡は確認できなかったが、Ｄ区で柱穴と思われる小形の土坑をまとまって検出しており、これらをピット群として報告する。遺物は須恵器、土師器、灰釉陶器、鉄製品が出土した。

２　平安時代の遺構

（１）土坑

ピット群（第14・41図）

ⅨI09・I10・I14・I15グリッドのＤ区基本土層Ⅲ層上面で検出した。15基の土坑（SK2319～2330、2345～2347）を検出し、埋土はすべて黒褐色（Hue10YR3/1）粘土質シルトの単層である。平面形は円形、楕円形、方形のものがあり、一時期のものではないと思われる。いずれも小形で柱穴と推定されるが、掘立柱建物跡に組めるものがないため、ピット群として報告する。各土坑の形状と法量を第８表に示す。いずれの土坑からも遺物は出土しておらず、遺構の時期を限定する決め手を欠く。周辺から弥生時代中期後半と平安時代の土器が出土しているので、弥生時代の土坑を含む可能性もあるが、本節でまとめて報告する。

SK2331（第13・41図）

遺物集中SQ52の調査を終了後、ⅦM01グリッドにて、Ｃ区基本土層Ⅳ層上面で黒色の落ち込みを検出した。直径20cm、深さ22cmの円形で、土坑底面は断面Ｖ字状になる。杭状の丸太を打ち込んだ痕跡と判断した。出土遺物はないが、周辺から平安時代の遺物しか出土していないことから、当該期の遺構と判断した。

SK2318（第14・41図）

ⅨJ07グリッドのＤ区基本土層Ⅲ層上面で検出した。SD83と重複しSD83が新しい。残存値180cm×108cm、深さ21cmのアメーバー状の不整形な形状を呈する。形状が不定形で周辺に同時期の遺構が認められず、大形の礫が抜けるなどの自然現象による窪みの可能性もあるが、平安時代の須恵器と土師器杯の破片が出土したことから当該期の遺構とした。

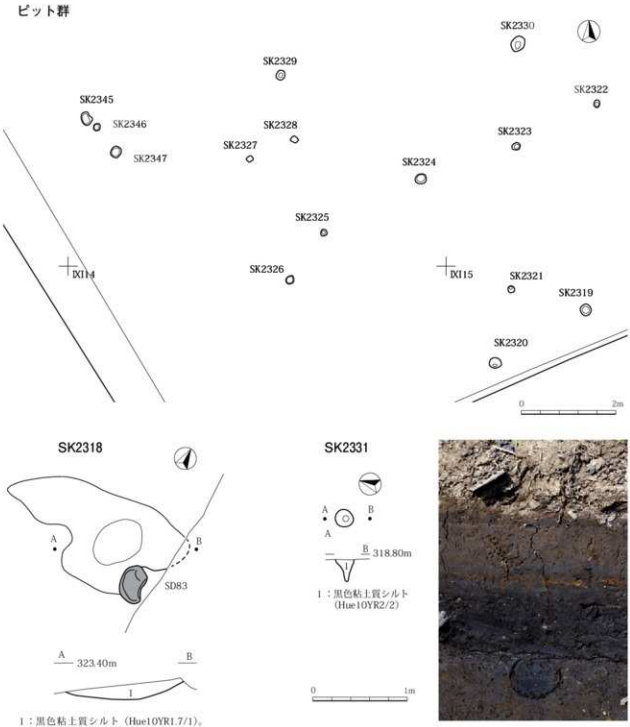
第８表　Ｄ区ピット群土坑一覧

遺構名	形状	法量
SK2319	円形	24cm×24cm　深さ9cm
SK2320	円形	16cm×14cm　深さ7cm
SK2321	円形	15cm×14cm　深さ10cm
SK2322	円形	14cm×12cm　深さ7cm
SK2323	円形	17cm×16cm　深さ14cm
SK2324	円形	16cm×15cm　深さ16cm
SK2325	方形	15cm×15cm　深さ10cm
SK2326	円形	20cm×18cm　深さ14cm
SK2327	方形	14cm×12cm　深さ15cm
SK2328	方形	16cm×14cm　深さ15cm
SK2329	楕円形	20cm×18cm　深さ5cm
SK2330	楕円形	32cm×28cm　深さ22cm
SK2345	楕円形	30cm×22cm　深さ9cm
SK2346	方形	16cm×14cm　深さ4cm
SK2347	円形	25cm×23cm　深さ5cm

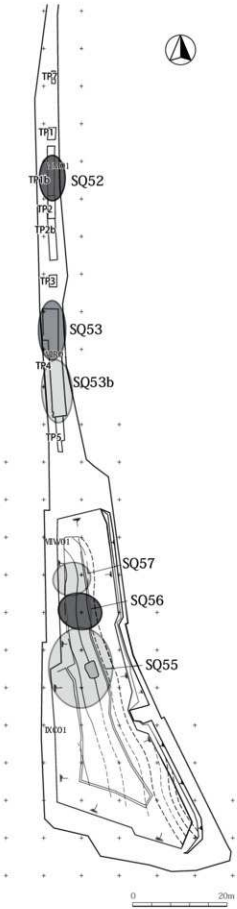
（２）遺物包含層の出土状況

平安時代の遺物はＣ・Ｄ区で出土した。Ｃ区では土器がまとまって出土しており、これらを遺物集中として記録した（第42図）。遺物集中では弥生～平安時代の遺物が同一層から出土しており、各時期ごとの分布の偏りがないか調べるために、５cm大以上の大きさの土器片は出土位置を記録した（第43図）。ただし、SQ52では他時期の土器の混入がなく、すべて平安時代の土器であったため、出土位置の記録は行わなかった。C1区ではSQ52とSQ53に、C2区で

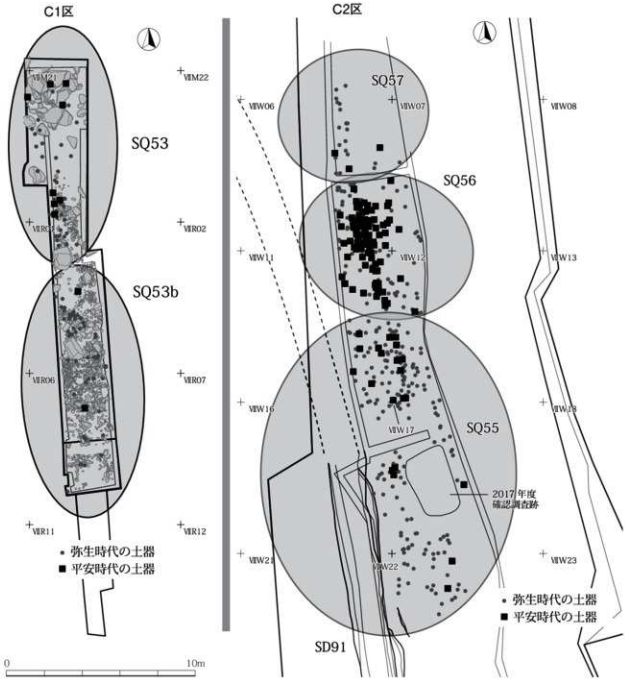
はSQ56に土器が集中した。なお、鉄製品はいずれもSQ55・56で出土した。



第41図　平安時代の遺構（１：80、１：40）



第42図　平安時代の土器出土状況１（１：800）



SQ53土器出土状況

第43図　平安時代の土器出土状況２（１：200）

３　平安時代の遺物

（１）平安時代の土器（第44・45図）

Ｃ区遺物包含層の土器

467 ～ 472はSQ52、473はSQ53、521はSQ55・56で出土した。

467～469・474～486は須恵器杯で、いずれも底面には回転糸切痕が認められる。487・488は須恵器杯蓋である。470～472・489～501は内黒の土師器杯である。473は円筒形土製品(注1)の可能性がある（写真上）。500の内面には漆と思われる付着物がある（写真下）。501は高台が剝離した高台付杯である。内黒の土師器杯は、底面に静止ヘラケズリ調整されるものが大半を占める。502は三日月高台の灰釉陶器椀である。503～505・510は須恵器壺、506～509・514～517は土師器甕、511～513は須恵器甕である。須恵器高台付杯は確認されず、出土した杯蓋もわずかなので、いずれも平安時代前半期の土器と判断した。

円筒形土製品（第44図473）

杯内面の付着物（第44図500）

Ｄ区遺物包含層の土器

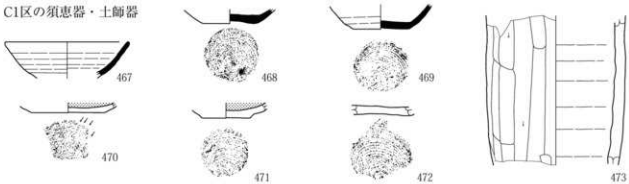
518は須恵器杯で底部に回転糸切痕がある。519は須恵器杯蓋である。520は内黒土師器杯で底部に静止ヘラケズリがある。521・522は土師器甕で、前者は底部に回転糸切痕があ

（２）平安時代の鉄製品

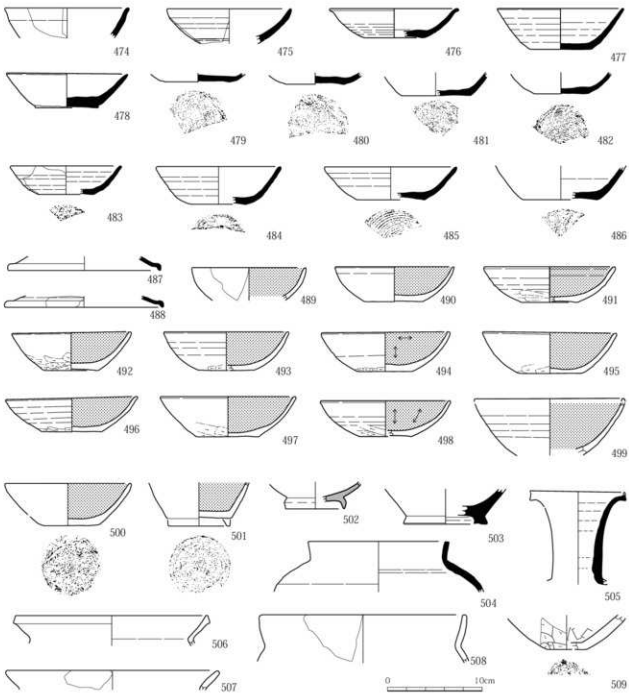
１は鉄鏃の茎の可能性がある棒状鉄製品、２は中間部がねじられた鉄製品で、器種は不明である。３は刀子である。いずれもＣ区から出土したもので、１はSQ55、２はSQ56のＣ区基本土層Ⅲ層から、３は確認調査トレンチの埋戻し土から出土したため、表土か遺物包含層出土かは特定できない。確認トレンチはSQ55内を掘削しており、３は本来SQ55のⅢ層に包含されていたものと判断した。

注１：円筒形土製品は、７世紀代にカマドの芯材として用いられ、その後長胴甕がカマド芯材に多様されるようになると、いったん消失し、長野県では９世紀代に再び出現するとされていた（西山1996・上田2000）。しかし、中野市沢田遺土遺跡では８世紀前半の円筒形土製品が出土し、７世紀から９世紀代まで継続して存在していたと考えられる（長野県埋蔵文化財センター2013b）。ここでは、平安時代の遺物としたが、それ以前に遡る可能性もある。なお、円筒形土製品は、長野県、山梨県、三重県、関東と東北の一部、北陸地方を中心に分布し、土師器焼成遺構との関わりも指摘されている（望月2002）。

C1区の須恵器・土師器



C2区SQ55～SQ60



第44図　平安時代の土器１

C2区SQ55～SQ60

510　511　512　513　514　515　516　517

0　10cm

D区

518　519　520　521　522

0　10cm

523　524

0　10cm

第45図　平安時代の土器２

1　2　3

0　5cm

第46図　平安時代の鉄製品

第７節　中世以降の遺構と遺物

１　概要

中世以降の遺構は、掘立柱建物跡１棟、土坑13基、溝跡３条を検出した。出土遺物は、中世のものが十数点であり、他は近世以降のものである。

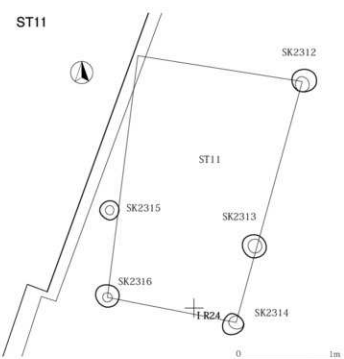
２　中世以降の遺構

（１）掘立柱建物跡

ST11（第11・47図）

A区ⅠR18・19グリッドの基本土層Ⅲ層下部で検出した。発掘作業ではSK2312～2316として記録したものである。整理作業で、不整形な配置の１×２間（1.8m×2.6m）の掘立柱建物跡の柱穴と認識し、ST11の遺構記号を付した。柱穴は直径20cm～26cmの円形、深さは14cm～35cmである。埋土はいずれも黒褐色土（Hue10YR3/2）で基本土層Ⅱ層に類似する。埋土から遺物は出土しなかったが、A区では弥生時代と中世の遺物がわずかに出土している。しかし、縄文時代、古墳時代、平安時代の遺物は確認できず、弥生時代の遺構も周辺では認められないことから、中世以降の遺構と判断した。

ST11（北から）



第47図　中世以降の遺構１（１：40）

（２）土坑

Ａ～Ｄ区で13基の土坑を検出した。第９表に規模、形状等を示した。出土遺物がなく、時期判別をすることが難しいが、検出面、埋土等から中世以降の土坑であると判断した。

第９表　中世以降の土坑一覧

遺構名	地区	グリッド	時期	形状・規模	埋土
SK2317	A区	ⅠR23	不明	円形　17cm×14cm　深さ8cm	黒褐色シルト
SK2336	B区	ⅢT01	不明	楕円形　55cm×45cm　深さ15cm	黒褐～暗褐色シルト
SK2342	D区	ⅨJ02	不明	楕円形　110cm×70cm（残存長）　深さ20cm	褐灰色～黒褐色粘土質シルト
SK2344	D区	ⅨJ01	不明	楕円形　70cm×40cm　深さ15cm	黒褐色砂混じり粘質シルト
SK2350	B2区	Ⅲ022	不明	円形　46cm×44cm　深さ22cm	黒褐色砂質シルト
SK2352	B2区	Ⅲ022	不明	円形　24cm×22cm　深さ6cm	黒褐色～暗褐色砂質シルト
SK2353	B2区	Ⅲ022	不明	楕円形　35cm×40cm　深さ30cm	黒褐色砂質シルト
SK2354	B2区	Ⅲ017	不明	楕円形　68cm×52cm　深さ14cm	黒褐色～暗褐色砂質シルト
SK2355	B2区	Ⅲ017	不明	円形　30cm×30cm（推定値）　深さ14cm	黒褐色～暗褐色砂質シルト（Ⅱ層）
SK2356	B2区	Ⅲ012	不明	円形　26cm×26cm（推定値）　深さ10cm	黒褐色～暗褐色砂質シルト（Ⅱ層）
SK2357	B2区	Ⅲ012	不明	円形　12cm×14cm　深さ8cm	黒褐色～暗褐色砂質シルト（Ⅱ層）
SK2358	B2区	Ⅲ013	不明	楕円形　64cm×56cm　深さ10cm	黒褐色砂質シルト
SK2359	B2区	Ⅲ022	不明	円形　40cm×36cm　深さ16cm	黒褐色砂質シルト

（３）溝跡

SD82（第48図）

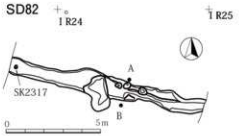
Ａ区ⅠR23グリッドのＡ区基本土層Ⅳ層上面で、長さ10.4mにわたって検出した。幅80cm～120cm、深さ15cm～30cmである。埋土掘下げ後、底面でSK2317を検出しており、本遺構がSK2317より新しいことを確認した。近世・近代の陶磁器とともに、中世の内耳鍋破片（第49図525）が出土した。溝の縁に並べた礫を検出した。溝跡は、現在の筆界と一致している。埋没時期は近代ではあるが、内耳鍋などの中世の遺物が数点出土していることから、溝の掘削時期が少なくとも近世あるいは中世に遡る可能性がある。

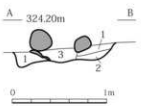
SD87・88（第48図）

Ｃ区ⅦW22・ⅨC02・ⅨC07グリッドの基本土層Ⅲ層で、長さ18.1mにわたり検出した。検出時には遺構の重複を認識できず、１条の溝跡として掘下げを開始したが、掘り進むと、２条の溝が重複していることが判明した。

２層がSD87、３層がSD88の埋土で、いずれも洪水砂と思われる。断面Ａ－Ｂ、Ｃ－Ｄの観察で、SD87・88の２条を覆う１層を埋土とする新たな溝跡（SD87b）が重複し、SD88→SD87→SD87bの新旧関係があることが判明した。それぞれの溝の規模は、SD87bが幅102cm、深さ10cm・SD87は幅50cm、深さ20cm。SD88は幅42cmで深さ17cmである。なお、SD87bの平面形状は近世以降のかく乱のため残っておらず記録できなかった。

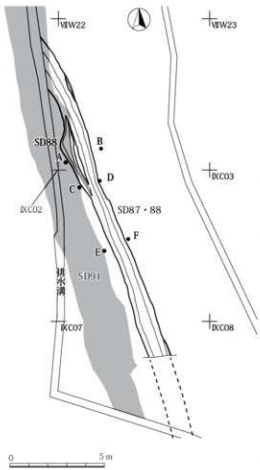
SD82

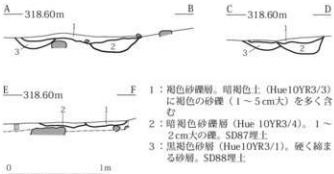




1：黒褐色土（Hue10YR2/3）。５mm大の小礫を多く含む。裏込め土
2：黄褐色土（Hue10YR5/6）。ロームブロックを多く含む。裏込め土
3：黒褐色土（Hue10YR3/2）。５mm大の小礫を多量に含む。褐色土粒を多量に含む

SD87・88





1：褐色砂礫層。暗褐色土（Hue10YR3/3）に褐色の砂礫（１～５cm大）を多く含む
2：暗褐色砂礫層（Hue 10YR3/4）。１～２cm大の礫。SD87埋土
3：黒褐色砂層（Hue10YR3/1）。硬く締まる砂層。SD88埋土

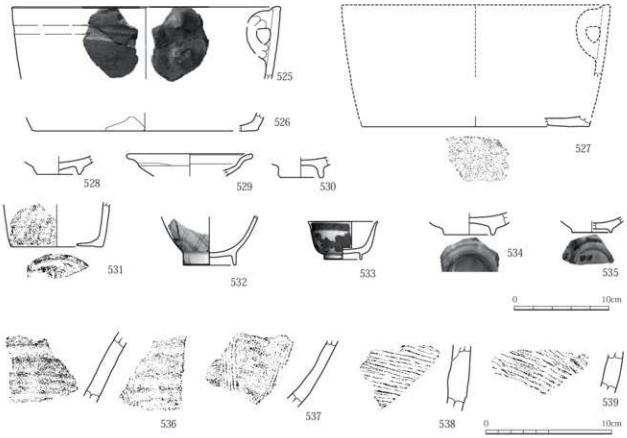
第48図　中世以降の遺構２（１：40、１：200）

埋土からは近世・近代陶磁器が出土した。とくに２～３層からは、主に近世の陶磁器が出土したが、層ごとに厳密に区分して遺物を取り上げられなかったため、出土遺物から重複した溝跡のそれぞれの時期を判定することができなかった。一番古いSD88がいつまで遡るかが不明であるが、平安時代の遺物包含層を掘り込んでいることから、層位的にこれらの溝跡は中世以降であることは明らかである。一番新しいSD87bが埋没したのは近代であるが、絵図によると当該地区が近世以降は水田であることがわかっているので、近世に機能していた溝跡の可能性が高い。

３　中世以降の遺物

第49図に出土遺物を示した。525がＡ区、526がＢ区、527・529・531～539がＣ区、528・530がＤ区で出土した。

525～527は内耳鍋、528は青磁碗、529～535は近世・近代陶磁器、536・537は珠洲焼の擂鉢、538・539は珠洲焼の甕である。



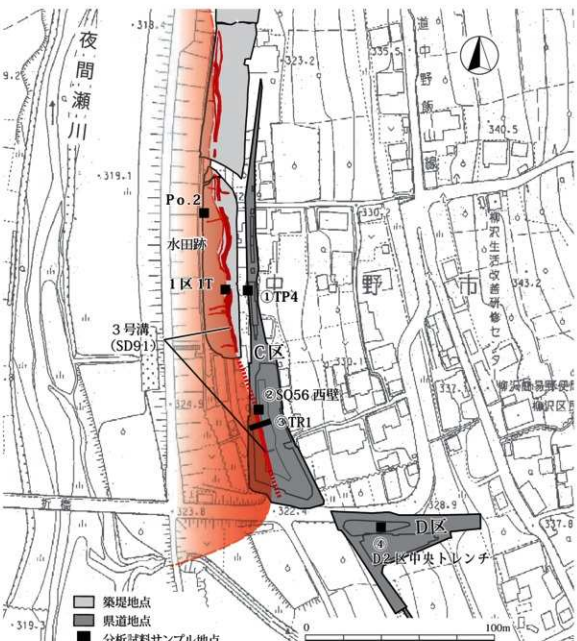
第49図　中世以降の遺物

第８節　自然科学分析

１　概要

築堤地点では弥生時代中期後半の水田跡とそれに伴う溝跡（３号溝）が明らかとなった。県道地点の調査では、３号溝の延長部分と思われる溝跡をSD91と呼称した。本調査では、SD91の東側に弥生時代の水田がさらに広がっていたか否かを確認するために、プラント・オパール分析を行った。

分析は、Ｃ・Ｄ区の４地点（①～④地点）で試料採取し（第50図）、2017年度と2018年度の２回に分けて、専門業者に委託し実施した。第50図①～④の後ろに括弧で記した呼称は、科学分析業務委託報告で用いた地点名である。なお、Po.2、１区１Ｔは築堤地点の調査で実施したプラント・オパール分析試料の採取地点とその呼称であり、弥生時代水田層から2,400～4,800個/gのプラント・オパールが検出されてい



第50図　分析試料採取地点（１：2,000）

る（長野県埋蔵文化財センター2012b）。

分析業者によるプラント・オパール分析の報告書は添付DVDにPDFデータを収録した。

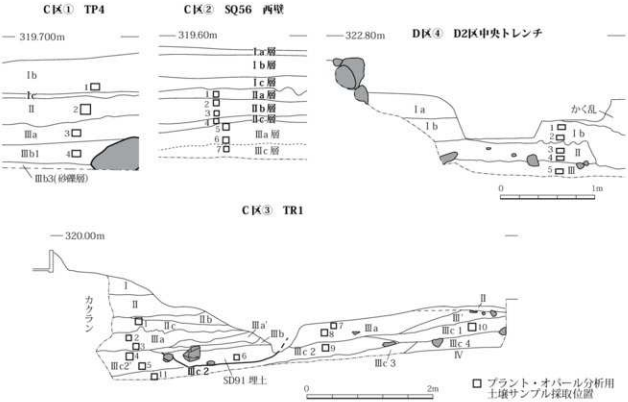
2　分析結果

第51図に分析試料を採取した地点の土層断面図を示す。Ｃ区Ⅲ層群（Ⅲa～Ⅲc4層）、Ｄ区Ⅲ層が弥生時代から平安時代の遺物包含層である。分析結果から１ｇ当たりのイネのプラント・オパール検出数と土層の時期を第10表にまとめた。なお、プラント・オパール3,000個/g以上が検出されると水田耕作層の可能性が高いとされる[注1]。

Ｃ区のプラント・オパール検出数を見ると、①～③地点の中近世の土層は4,400個/g以上が検出され、いずれも水田耕作層であったことが判明した。また、弥生時代から平安時代の遺物を包含するⅢa・Ⅲb層では1,600～6,400個/gが検出され、①・②地点では上部ほど数が多い傾向にある。このことは、弥生時代には水田ではなく、平安時代には水田であった可能性を示唆している。さらに、③地点のⅢｃ層では、SD91の西側のサンプル４で4,500個/gが検出されたのに対し、東側のサンプル９では検出されていない。Ⅲc層は弥生時代の溝跡SD91が掘り込んでいる土層であり、そこで検出されたプラント・オパールは弥生時代に水田耕作があったことを示している。

また、Ｄ区では、弥生時代～平安時代の堆積層のプラント・オパール数は1,000個に満たない。

以上の分析結果から、弥生時代の水田は、SD91（３号溝）を境にその西側に広がっていたことが確認できた。また、平安時代までには、水田域がSD91の東側に拡大したが、斜面上方のＤ区までは及んでい



第51図　分析試料採取地点の土層断面

注１：水田跡の検証や探査を行う場合、一般にプラント・オパールが試料１ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、今回の分析では判断の基準を3,000個/gとしている。

なかったことが明らかとなった。

調査前には果樹園であったD区が、戦後は水田として利用していたことが地権者の証言で分かっている。プラント・オパール分析により、時代を追って水田域が広がってきた歴史が垣間見られた。

第10表　分析試料のプラント・オパール数

調査年度	地区	地点名	No.	層位	土層の時代	イネのプラント・オパール数(個/g)	水田の可能性
2017	C区	①TP4	1	Ⅰb層	近代	4,900	○
			2	Ⅱ層	中近世	8,100	○
			3	Ⅲa層	中世～平安	4,900	○
			4	Ⅲb1層	弥生～平安	2,300	
		②SQ56西壁	1	Ⅱa層	中近世	5,600	○
			2	Ⅱb上層		4,500	○
			3	Ⅱb下層		8,200	○
			4	Ⅱc層		4,400	○
			5	Ⅲ上層（Ⅲa）	弥生～平安	5,400	○
			6	Ⅲ中層（Ⅲa）		2,700	
			7	Ⅲ下層（Ⅲc）	弥生	600	
		③TR1	1	Ⅱ層	中近世	4,500	○
			2	Ⅲa層上	弥生～平安	6,400	○
			3	Ⅲa層下	弥生～平安	2,200	
			4	Ⅲb層上（Ⅱc2'層）※1	弥生時代水田層	4,500	○
			5	Ⅲb層下（Ⅱc2'層）※1	弥生時代以前	1,500	
			6	SD91 埋土	弥生時代の洪水砂	0	
			7	Ⅲ（Ⅲa）層上	弥生～平安	1,600	
			8	Ⅲ（Ⅲa）層中	弥生～平安	3,900	○
			9	Ⅲc－2層	弥生時代以前	0	
			10	Ⅲc－1層	弥生時代以前	0	
			11	Ⅲc－2層	弥生時代以前	2,000	
2018	D区	④D2区中央トレンチ	1	Ⅰb層	近世以降	3,700	○
			2	Ⅰb層	近世以降	3,200	○
			3	Ⅱ層	弥生～平安	500	
			4	Ⅱ層	弥生～平安	500	
			5	Ⅲ層	弥生時代以前	0	

※1：土壌サンプル時点ではⅢb層としていたが、調査が進みSD91を被覆するシルト層（Ⅲb層）が部分的に存在することが判明し、当初Ⅲb層としたものをⅢc2層群ととらえ、Ⅲc2'層と呼称を変更した。

参考文献

石川日出志　2002 「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』138・139合併号
石川日出志　2012 「Ⅱ栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市　柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
上田典男　2000 「第４章２節２（１）円筒形土製品」『松原遺跡　古代・中世』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書53
関東弥生文化研究会　埼玉弥生土器観会　2014 『熊谷市前中西遺跡を語る―弥生時代の大規模集落―』 考古学リーダー23　六一書房出版
関東弥生文化研究会　埼玉弥生土器観会　2013 『シンポジウム　熊谷市前中西遺跡を語る　弥生時代の大規模集落　発表要旨　資料集』
徳永哲秀　1995 「箱清水式土器の施文具および施文法について」『長野県考古学会誌』75
杉山真二　2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社
中野市教育委員会　2014 『長野県中野市遺跡詳細分布図（改訂版）』
長野県埋蔵文化財センター　1994 『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書　栗林遺跡　七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19
長野県埋蔵文化財センター　2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５　松原遺跡　弥生・総論３弥生中期・土器本文』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36
長野県埋蔵文化財センター　2000b 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16　星光山荘Ａ・星光山荘Ｂ・西岡Ａ・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平Ｂ・日向林Ａ・日向林Ｂ・七ッ梨・普光田　縄文～近世』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書49
長野県埋蔵文化財センター　2011 『主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書１―千曲市内―　力石条里遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書96
長野県埋蔵文化財センター　2012 『北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書６　南曽峯遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書93
長野県埋蔵文化財センター　2012b 『中野市柳沢遺跡　千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書　中野市内その３』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
長野県埋蔵文化財センター　2013a 『中野市千田遺跡　千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書　中野市内その１』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書98
長野県埋蔵文化財センター　2013b 『沢田鍋土遺跡　立ヶ花表遺跡　立ヶ花城跡　北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書　中野市内その１』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書94
長野県埋蔵文化財センター　2014 『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５　森平遺跡　寄塚遺跡群　今井西原遺跡　今井宮の前遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　107
長野県埋蔵文化財センター　2016a 『一般県道三水中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書　南大原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書111
長野県埋蔵文化財センター　2016b 『一般県道豊田中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書　琵琶島遺跡・壁田城跡・ねごや遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書112
長野県埋蔵文化財センター　2018 『ひんご遺跡』長野県埋蔵文化財発掘調査報告書118
西山克己　1996 「７世紀代に用いられた円筒形土器」『長野県考古学会誌』79
望月精司　2002 「（３）その他の特殊器種について（台付鉢及び獣足鉢について・円筒形土製品について）」『二ツ梨一貫山窯跡』小松市教育委員会

第４章　総括

第１節　調査成果

本節は、県道地点の調査成果を報告することを第一義とするが、遺跡を分析し、地域の歴史を解明する上では、密接不可分な関係にある築堤地点の調査成果を踏まえる必要がある。したがって、まず築堤地点の発掘調査報告書の中でも、県道地点に関係が深い部分について概要を紹介し、その上で、県道地点の調査成果としてまとめたい。

１　築堤地点の調査成果の概要

築堤地点は2006～2008年に発掘を行った。柳沢遺跡の西端部を南北に貫くトレンチを入れる形となり、縄文時代から近世に至る遺構・遺物が確認された（長野県埋蔵文化財センター2012b）。時代別に遺構の検出状況を概観する。なお、本節で示した県道地点時代別遺構配置図の第52・55・56・57・60図は、築堤地点で用いた日本測地系に基づいて設定したグリッドを用いている。県道地点Ａ～Ｄ区と築堤地点の遺構配置図の第62・63図は、世界測地系に基づいて設定したグリッドを用いている。

縄文時代（第52図～54図）

遺構は、竪穴建物跡５軒[注１]、埋設土器５基、土坑56基（貯蔵穴、墓坑などを含む）、列石１か所を、滝ノ沢川南岸の８・12～14・16区で検出した（第52図）。遺物は、これらの遺構に伴うもののほか、８区－14区間と、12区の谷状の窪地から多量に出土している。

遺構に伴う土器は、縄文時代中期末葉から後期初頭[注２]のもので、遺構外から出土した土器は、８区－14区の谷状の窪地から加曽利ＥⅢ式期、12区では加曽利ＥⅣ式から称名寺式期のものが出土した（第53・54図）[注３]。土器はこのほか、７～９区で早期（第54図172・218～221）、１・５・７～10区で前期（第54図173・222～228）、５・７区で後期後半（第54図233・234・236）、７・10・15区で晩期（第53図114、第54図217・237）のものが出土するなど、２～４・６区を除く全地区から出土している。

石器は767点出土し、石鏃、打製石斧、磨石類が主体である（第11表）。

このほか、ミニチュア土器５点（写真１：１～５）、土偶３点（写真１：６～８）、土製円板21点、石棒６点、垂飾１点が出土した。

写真１　築堤地点縄文時代ミニチュア土器と土偶

注１：築堤地点の報告書では竪穴住居跡の用語を用いているが、本書では竪穴建物跡を用いているため、用語を統一するために竪穴建物跡と表記した。
注２：本書で用いている縄文中期末葉土器は大木９・10式、加曽利ＥⅢ・Ⅳ式、沖ノ原式、串田新式併行、後期初頭は堀之内式併行期を示す。
注３：築堤地点出土の縄文時代から近世の遺物は、築堤地点報告書添付DVDに収録されたものを縮小して掲載した。これらの遺物の観察表を本書の添付DVDに再録した。

弥生時代（第55図、第12表）

遺構は、竪穴建物跡６軒、礫床木棺墓20基、土器棺墓１基、青銅器埋納坑１基、水田跡、溝跡15条[注4]、土坑21基を検出した。これらの遺構群は、滝ノ沢川を北限として、北側から建物跡や土坑など居住域を構成する遺構、その南側に礫床木棺墓からなる墓域、さらにその南側に青銅器埋納坑と並び、発掘区南部の低地では水田跡と用水路と推定した溝跡を確認した。遺構の多くは中期後半栗林式期のものであり、ほかに後期吉田式期の水田跡とそれに伴う溝跡、土器棺墓１基、土器集中４か所、箱清水式期の竪穴建物跡１基、焼土跡１か所、土器集中４か所である。

東日本で唯一の青銅器埋納坑は、「中期後半に伴うものとして考えているが、埋納時期については後期初頭までド下る可能性をわずかながら残したい」（長野県埋蔵文化財センター2012b）としており、埋納された銅鐸は外縁付鈕１式２点、同２式２点、外縁付鈕２式～扁平鈕式古段階１点であり、銅戈は中細形Ｃ類１点、近畿型Ⅰ式７点と、いずれも中期栗林１式から３式と接点をもつと整理している。また、栗林式期とされる礫床木棺墓群は６区と７区の２か所で確認し、６区の18基は周溝区画されている。６区の１号礫床木棺墓（SM01）は、木棺が設置される礫床の周りに、高さ10～20cm、幅70cmの高まり（礫集積帯）を築いた特殊な構造をもつもので、全体は250×220cmと、ひときわ大形の礫床木棺墓である。埋葬部に人骨は残っていなかったが、101点の管玉が出土している。この他、８区で検出した栗林式期の長方形土坑SK2251からは多量の壺形土器の破片が出土し、周辺からはミニチュア土器がまとまって出土していることが注目される。

写真２　築堤地点　６区礫床木棺墓群
中央が１号礫床木棺墓

遺物は栗林式土器を主体とし、他に吉田式、箱清水式土器が出土した。シカ絵の壺形土器も出土した。石器では、打製石鏃、磨製石鏃、磨製石斧、刃器などが出土した（第12表）。

古墳時代（第56図）

遺構は無かった。前期の土器が４・６・７・９区、中期が11・15区と比較的広範囲から出土した。調査区内に黒丸と網掛けで示したところで土器が出土しており、出土地点に付した番号は第56図の遺物番号と一致する。

平安時代（第57～59図）

竪穴建物跡38軒、土坑数基を検出した。竪穴建物跡の多くは９世紀代のものであるが、38号竪穴建物跡など12世紀代と思われるものがわずかに認められる。竪穴建物跡は、６～15区の広範囲にあり、古墳時代まで遺構が認められない滝ノ沢川の北側にも集落が広がったことが確認できる。竪穴建物跡のカマドは、辺の中央部と隅近くに設置されたものとがあり、隅カマドが多い。また、礫を芯材とした石組粘土カマドが多いことも指摘している。さらに、Ｌ字状の煙道も確認するなど[注5]、複数のカマド構造が存在することから、出自の異なる複数の集団の共住の可能性を想定している。また、19・24・30号竪穴建物跡では埋土内に洪水によると思われる砂層が堆積しているが、仁和の洪水との関連は否定している（長野県埋蔵文化財センター2012b）。

注４：15条の溝跡は３～８・９・11・25・45・63～68号溝で、25号溝を後期、他を中期後半の遺構と理解した。
注５：Ｌ字状の煙道は、中野市川久保遺跡SB01とSB18（長野県埋蔵文化財センター2013b）で類例がある。いずれも９世紀代の遺構と考えられている。

第57～58図に示した遺物の大半は、９世紀中頃から末の年代に比定されている。須恵器、土師器の杯は、底部回転糸切と手持ちヘラケズリがあり、土師器は内面黒色処理したいわゆる黒色土器が多い。須恵器は杯蓋、杯Ｂと分類される高台付杯が少数あり、灰釉陶器は皿（136）が出土している。土師器甕は、ハケ調整と胴下半部ケズリ調整があるもの、タタキ痕があるもの、カキメとロクロナデ調整があるものなど、複数の器面調整の方法が確認できる。また、これらの甕は北陸地方との近親性を指摘している。土器以外では、土製紡錘車、鉄製紡錘車、コモ編み石（写真３）などが竪穴建物跡から出土した。

写真３　コモ編み石出土状況（９区32号住居跡）

中近世（第60図）

１区低地で水田跡、１区北端～15区で柱穴跡・土坑・溝跡・畑跡を検出した（第60図）。遺構は大部分が18世紀末以後のものである。８・15区では13世紀、２～４区や９・10・14区では15・16世紀の焼物が出土し、当該期の遺構も点在すると想定している。また、柱穴跡は調査地東の現道（市道柳沢44号・倭２号線）から20～22m前後の幅に分布し、道沿いの南北に屋敷が並んだ景観であったと想定している。

出土した789点の焼物は、大半が近世のもので、わずかに中世のものがある（第13表）。第61図に示した焼き物、分銅と思われる計量器具（近世以降）、鏡（近世）、景徳元寶、祥符元寶、治平元寶、永樂通寶、寛永通寶等の古銭が出土した。

２　県道地点の調査成果の概要

県道地点の調査では、縄文時代から中・近世の遺構・遺物を確認し、第３章で各時代の遺構と遺物について報告した。県道地点は、遺跡北端部のＡ・Ｂ区と、南端部のＣ・Ｄ区の２地点に分かれる。ここでは、これら２地点の調査成果を、築堤地点の調査成果の概要と合わせながら、時代ごとにまとめてみたい。

縄文時代

県道地点の遺構は、Ｂ区で土坑６基と遺物集中を確認した。遺物はＢ区に集中しており、Ｃ・Ｄ区からは数点出土したのみである。大半は中期末葉のⅢ群３類から後期前葉のⅣ群２類までの土器であり、わずかに早期（Ⅰ群）、前期（Ⅱ群）、中期後葉（Ⅲ群１類）、晩期（Ⅴ群）がある。

築堤地点では、県道地点Ｂ区に西接する８・12～14・16区に遺構が集中しており、８・14区と12区の谷状の窪地から遺物が多量に出土している。

したがって、柳沢遺跡の縄文時代中期末葉から後期前葉の集落は、滝ノ沢川下流の南岸に集中して営まれていたと考えられる。また、この辺りには、わずかながら早・前期、中期後葉、晩期の遺物も出土していることから、滝ノ沢川の中流に面した高社山麓傾斜面にかけて、当該期を含む縄文時代の集落域が存在する可能性もある。一方、滝ノ沢川から離れた本遺跡の中央から南側一帯は、縄文時代の集落域になっていない。

弥生時代

県道地点では、Ｃ区で溝跡１条、Ｄ区で竪穴建物跡１軒を検出したほか、Ｃ・Ｄ区で６か所の遺物集中箇所を確認した。遺物はＣ・Ｄ区を中心に出土しており、Ａ・Ｂ区ではわずかに遺物が出土したのみで、遺構は確認されなかった。

県道地点Ｃ区北西の築堤地点１～３区は低地で、栗林式期から吉田式期に営まれた複数の溝跡や畦畔を

伴う水田面を確認した。また、４区には青銅器埋納坑が、６・７区に礫床木棺墓群があり、９区から県道地点Ｂ区西側の13区にかけて竪穴建物跡や土坑が分布する居住域がある。さらに、県道地点Ａ区に西接する15区の自然流路内には、祭祀行為を行ったと考えられる箱清水式期の土器集中がある。

Ｃ区で検出した溝跡SD91は、吉田式土器を含むシルト層に覆われていることから、後期段階には廃絶されていたと考えられる。SD91は位置と方向、断面形状や埋土の特徴から、築堤地点１区の３号溝に連なることは確実で、３号溝やその周辺から栗林２式土器が多量に出土し、また溝内からは緑色凝灰岩製の管玉、刃器、扁平片刃石斧片が出土していることから、３号溝＝SD91は中期後半段階に機能していたと考えられている。また、SD91にかかるTR １の東西に堆積する土壌のプラントオパール分析の結果、東側のNo. 9は０個/gだったものの、西側のNo. 4は4,500個/gと多量で、水田耕作の可能性がある（第50・51図、第10表）。とすると、SD91から掛け落した用水で営む水田が県道地点のＣ区以西に広がっていたことになり、築堤地点１～３区で確認した生産域が南側へ延びることになる。

集落域は、築堤地点では15区の土器集中を非日常の場として切り離せば、滝ノ沢川を北限とする千曲川沿い（築堤地点９～13区）にあり、県道地点以東には広がっていない。しかし、県道地点Ｄ区では、中期の竪穴建物跡と思われる遺構を検出している。この建物跡は、炉跡や柱穴が不明確だったため建物跡と認定するのに躊躇するが、築堤地点の集落域から青銅器埋納坑や礫床木棺墓群をはさんで約400m南側に、生産域に面した別の集落域が存在する可能性がある。

古墳時代

県道地点にも遺構はなく、遺物もＣ・Ｄ区で少量出土しているだけである。

築堤地点の状況と考え合わせると、この時期には千曲川や夜間瀬川に沿った遺跡西端には集落域も墓域もつくられていなかった。ただし、いずれの地点でも中期と後期の土器が出土しており、遺跡内には２基の古墳があるというから、どこかに集落跡が存在するのかもしれない。

平安時代

県道地点のＡ・Ｂ区では、遺構・遺物ともに確認することはできなかったが、Ｃ・Ｄ区では土坑と遺物を検出した。なかでもＤ区は、掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。一方、築堤地点では、Ａ・Ｂ区に西接する13・15・16区と６・７・９～11区とに竪穴建物群がまとまり、県道地点と対照的な遺構分布状態となっている。

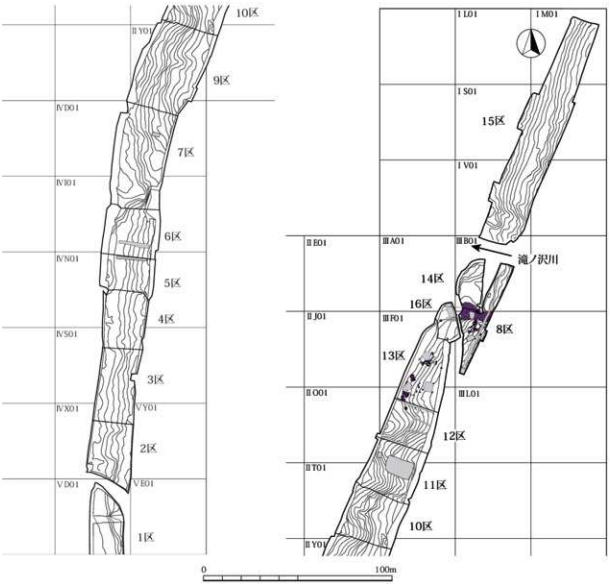
平安時代の集落域のひとつは、本遺跡の西北側、千曲川に沿って営まれていたことが明確になったが、Ｃ区にまとまった数の土器が集中して出土していることや、Ｄ区から掘立柱建物跡らしき遺構が見つかっていることから、本遺跡の南側に別の集落域が広がっていた可能性はある。

また、Ｃ区のTR1の東西に堆積する土壌分析の結果、弥生時代から平安時代にかけての土層から採取したNo. 2やNo. 8で高密度のプラントオパールが検出されたため、弥生時代中期後半段階では西の低地側だけに広がっていた水田が、平安時代までの間に南東側のＤ区手前まで水田域が拡張されていたことが明らかになった（第50・51図、第10表）。

中世以降

Ａ区で掘立柱建物跡と溝跡、Ｃ区で溝跡が見つかったほか、各地区で土坑を検出している。築堤地点では、市道柳沢44号に沿った幅20～22m前後の間に柱穴が分布しており、道沿いの南北に屋敷が並んで、まさに「屋敷添」の景観であったと想定しているが、Ａ区の掘立柱建物跡も、これに包摂されるものであろう。

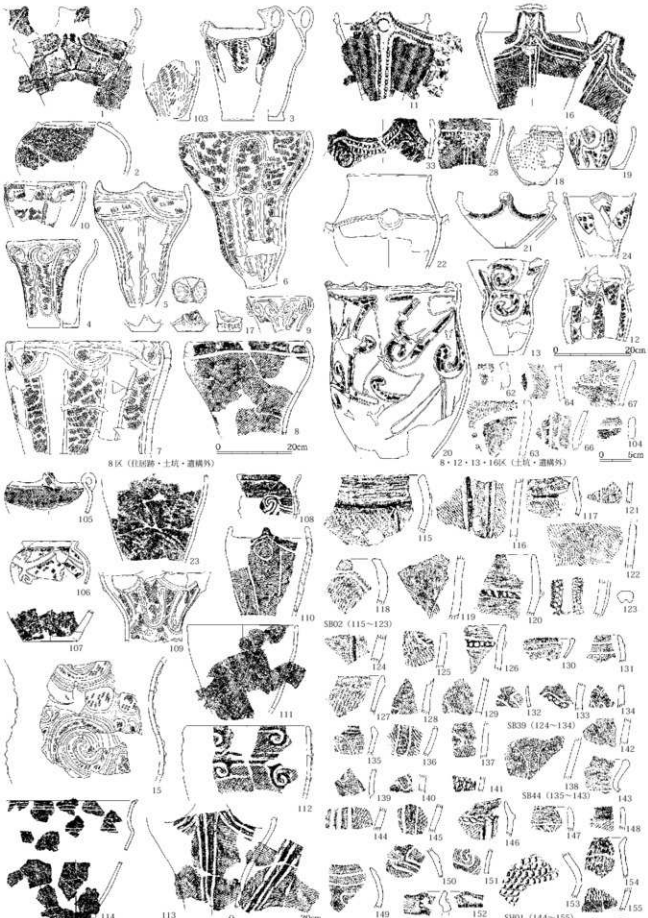
また、Ｃ区の溝跡SD87・88は、築堤地点１区の１号溝や２号溝に連なるもので、築堤地点の調査結果からすると18世紀以降に掘削された水田施設と考えられる（長野県埋蔵文化財センター2012b）。



第52図　築堤地点縄文時代の遺構

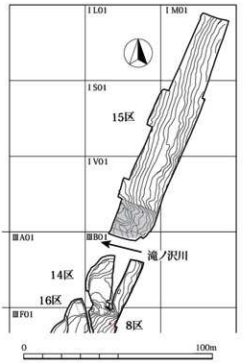
第11表　築堤地点縄文時代石器器種組成

地区名	石鏃	石錐	スクレイパー	鉤状石器	異形石器	打製石斧	磨製石斧	石錘	スタンプ形石器	特殊磨石	磨石類	敲石	多孔石	石棒	砥石	垂飾	研磨石	棒状礫	合計
3区									2										2
6区								1											1
7区									1	1									2
8区	19	5	14			21	6	12			30	5	6	1	1		1		121
9区		1	2				1					2							6
10区												2							2
12区	9	3	10			11	1	1		4		6							45
13区	7	3	9	1		7	5	2	1	1	6	4	1	2		1		4	54
14区						3	1	2											6
15区	5				1														6
16区			1																1
合計	40	12	36	1	1	42	14	18	4	6	36	19	7	3	1	1	1	4	246



第53図　築堤地点縄文時代の土器1

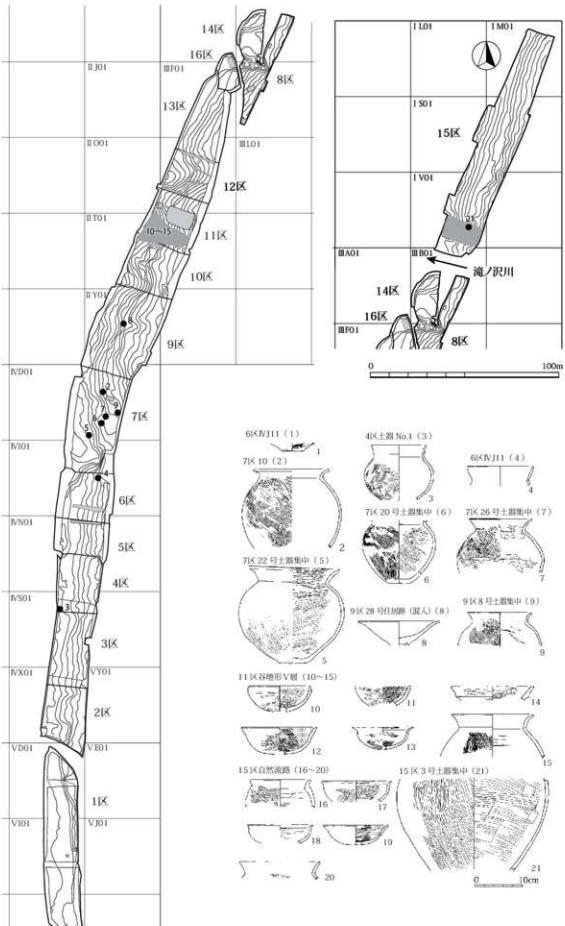
第54図　築堤地点縄文時代の土器2



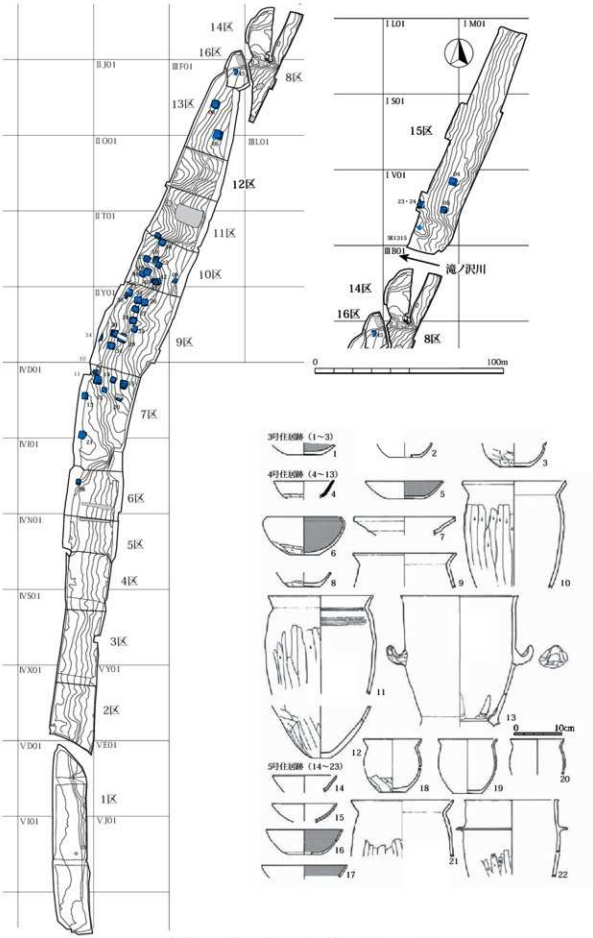
第55図　築堤地点弥生時代の遺構

第12表　築堤地点弥生時代石器器種組成

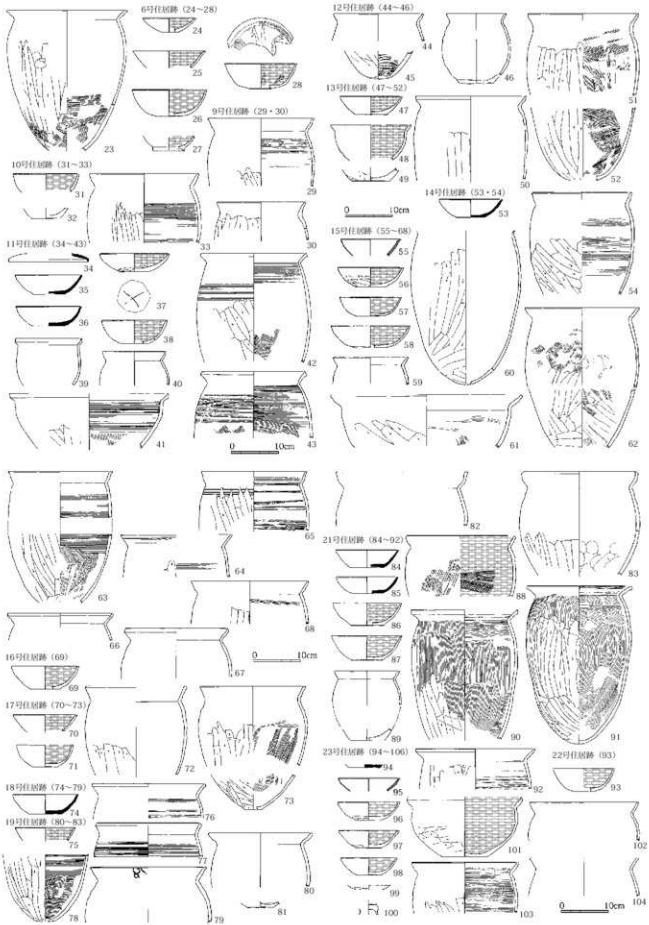
地区名	打製石鏃	打製石鏃未成品	磨製石鏃	刃器	小形磨製石斧	扁平片刃石斧	太形蛤刃石斧	石槌	有孔石剣未成品？	凹石	台石	合計
1区				1		1						2
2区				2		1						3
3区	1			1		1						3
4区							1					1
5区				3								3
6区	1			1								2
7区			1					1				2
8区	2	4	1									7
9区	4	2		2	2	4	6		1	2	1	24
10区				1								1
11区	2											2
12区							1	1				2
13区		2			2		1				1	6
15区							1					1
不明	2		1				3					6
合計	12	8	3	11	4	7	13	2	1	2	2	65



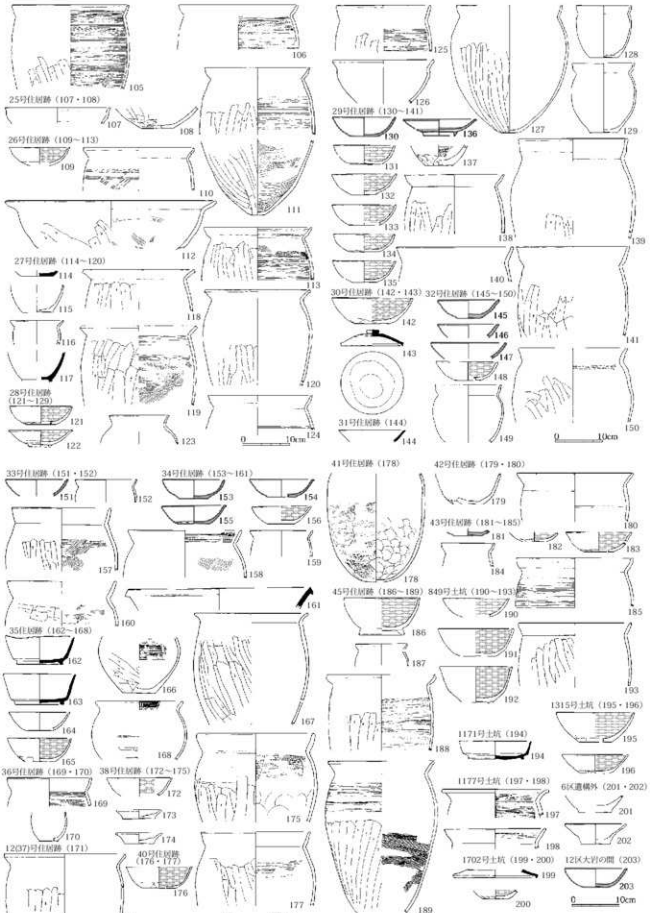
第56図　築堤地点古墳時代の土器と出土状況



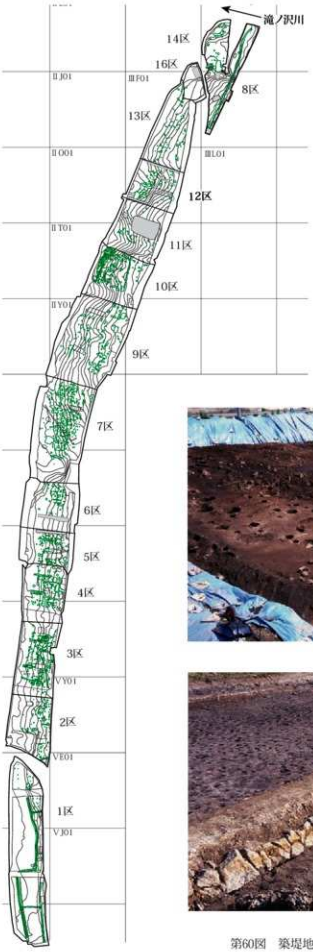
第57図　築堤地点平安時代の遺構と平安時代の土器１

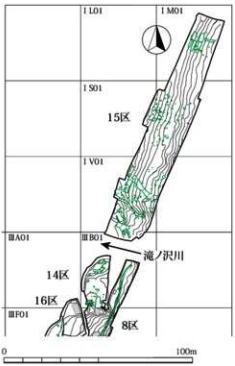


第58図　築堤地点平安時代の土器２



第59図　築堤地点平安時代の土器3

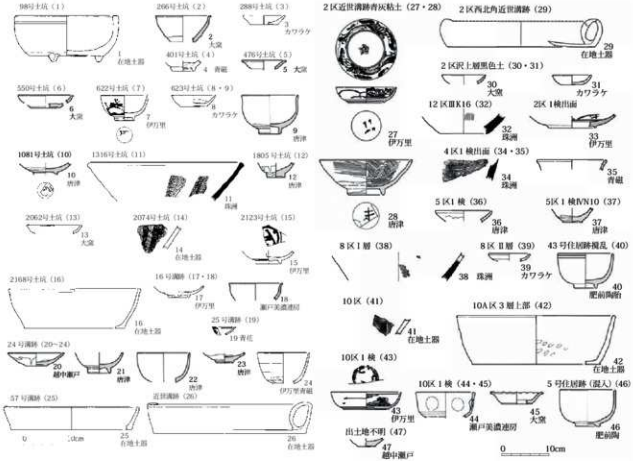




10区遺構検出状況（北西から）

１区１号溝（北から）

第60図　築堤地点中近世の遺構



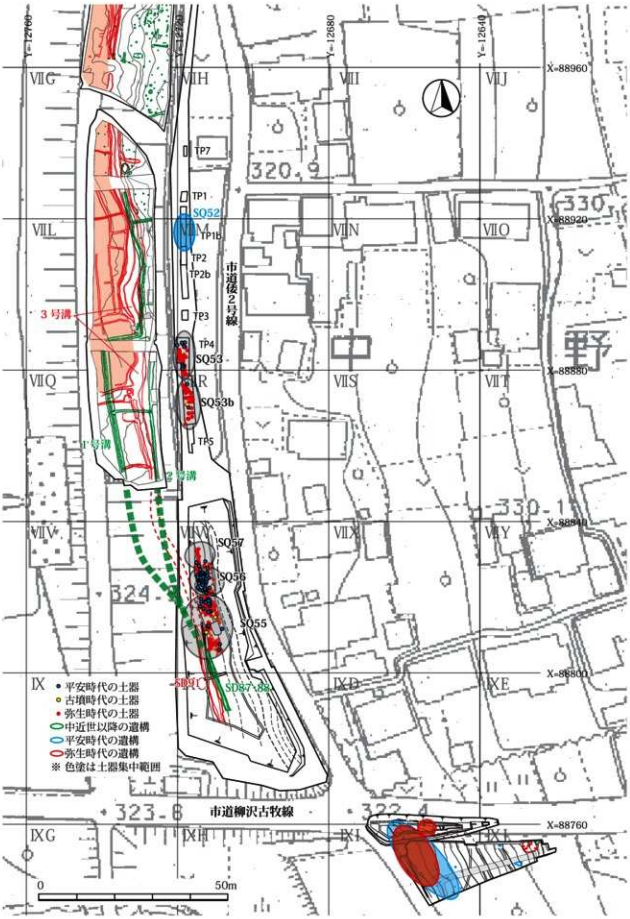
第61図　築堤地点中近世の遺物

第13表　築堤地点中近世の出土遺物集計（長野県埋蔵文化財センター2012b）

時期	産物	時期	器種	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	11区	12区	13区	14区	15区	16区	不明	合計
13C	在地	手づくね	カワラケ								1										1
13C	青磁	龍泉窯	碗								5										5
13C	珠洲	Ⅱ・Ⅲ期	すり鉢								2							1			3
13C	珠洲	Ⅱ・Ⅲ期	壺		1		1														2
15・16C	在地	土器	内耳鍋		6	3							4				41			1	55
15・16C	在地	土器	すり鉢									1								1	2
15・16C	青磁		碗	1		1	2														4
15・16C	青磁		皿		1																1
15・16C	白磁		皿			1															1
15・16C	在地	ロクロ	カワラケ		1		2		1												4
中世	珠洲	中世	すり鉢												1					1	2
中世	青磁		他	1																	1
16 C	大窯		皿		4		1					1	2	1	1						10
16 C	大窯		天目茶碗			1	1														2
16 C	唐津	Ⅰ	皿		1			1			1										3
16 C	唐津	Ⅰ	碗					1													1
17 C	唐津	Ⅱ	皿							1	1		1	1		1					5
17 C	唐津	Ⅱ	碗		1	1				1	1		3								7
17 C	伊万里	Ⅱ	碗		1		1			1	2	1									6
17 C	越中瀬戸		皿																	1	1
17 C	越中瀬戸		天目茶碗			1															1
17 C	越中瀬戸		すり鉢																	1	1
17 C	越中瀬戸		瓶																	1	1
17 C	瀬戸美濃		天目茶碗			1															1
17 C	瀬戸美濃		志野丸皿							1											1
17 C	瀬戸美濃		碗			2															2
17 C	唐津	Ⅲ	皿			1															1
17 C	唐津	Ⅲ	すり鉢	1	1	1							1								4
17 C	伊万里	Ⅲ	碗		1				1	1											3
17 C	伊万里	Ⅲ	皿		1	3		1	1				1								7
17・18C	唐津	Ⅲ・Ⅳ	碗	3	1	6	12	9	1	18	4	3	20	1	1	5	2			3	89
18C	伊万里	Ⅳ	碗		1	1	3			3		1	2								11
18C	伊万里	Ⅳ	皿		4		1														5
18C	唐津	Ⅳ	皿			3							1								4
18C	唐津	Ⅳ	片口鉢				6														6
18C	瀬戸陶	Ⅳ	碗										2								2
18 末～	唐津	Ⅳ・Ⅴ	鉢		2	1						1	2								6
18・19C	唐津	Ⅳ・Ⅴ	すり鉢		5	1	3	2		3						1	1				16
18・19C	陶胎	Ⅳ・Ⅴ	碗	5	5	2	4		1	6	4		12			1	4				44
18 末～	伊万里	Ⅴ	碗	5	4	4	2	1		6	1		6		4	1	2				36
18 末～	伊万里	Ⅴ	皿		1							2	1			1					5
18 末～	伊万里	Ⅴ	他		3								1		1						5
18 末～	瀬戸陶		碗			1	4	1		3		2	8			1					20
18 末～	瀬戸陶		皿							1			1		4						6
18 末～	瀬戸陶		鉢										2								2
18 末～	瀬戸陶		他				1		1	1			1		3					1	8
18 末～	瀬戸織		碗	4	7		4	7			6	3	9		4	6	6	1	1		58
18 末～	瀬戸織		皿・鉢		1			3			2		4		1	1					12
18 末～	瀬戸織		他		1							1	2			1	1				6
18 末～	京焼		碗			1											1				2
18 末～	京焼		他								1		2		4						7
18 末～	近在窯		碗				2										2				4
18 末～	近在窯		壺		1					3					5	2					11
18 末～	近在窯		すり鉢		1						1		1		1						4
18 末～	近在窯		鉢		1	1	1				1									1	5
18 末～	近在窯		他	1	4	1			1	1			3		2	2	1			2	18
近世	在地	近世	焙烙		35	2	6	2		6		3	17		2	1	83	1		4	162
近世	在地	近世	火鉢		10					1		22	3				5			4	45
近世	唐津	近世	瓶類	1			1						1				3				6
近世	唐津	近世	皿				1														1
近世	唐津	近世	鉢				3														3
近世	唐津	近世	碗		2					2											4
近世	唐津	近世	不明														1				1
近世	伊万里	近世	碗		9		4	1		1	1		2								18
近世	伊万里	近世	他		2			1		1		1	4		1		4				14
近世	伊万里	近世	皿			1							1		1						3
近世	瀬戸美濃	近世	天目茶碗							1											1
近世	不明陶	近世	不明																	1	1
合計	789 片			22	119	41	66	30	7	62	35	41	120	3	36	24	157	3	1	22	

瀬戸陶＝瀬戸美濃産陶器　瀬美織＝瀬戸美濃産織器　陶胎＝平戸・波佐美陶胎染付

第62図　県道地点Ａ・Ｂ区と築堤地点（１：1,000）



第63図　県道地点Ｃ・Ｄ区と築堤地点（１：1,000）

第２節　今後の課題

中野市柳沢遺跡は、築堤地点で行った発掘調査で、2007年に東日本で初めて弥生時代の青銅器埋納坑が発見され、全国的に知られることとなった。その後、市教委は、柳沢遺跡全体の範囲と内容を把握するために試掘調査を継続し、地元柳沢地区は柳沢遺跡等対策委員会を立ち上げて、遺跡の保存と活用にかかわる活動を担ってきている。こうした中で行われた今回の発掘調査では、これまで見てきたとおり、築堤地点に沿って縄文時代、弥生時代、平安時代、中世以降の集落跡と水田跡などの生産域を確認することができた。

本節では、今回の調査成果を受けて、柳沢遺跡の理解を深め、遺跡の保存・活用を進めていくために、今後必要と思われる課題を提示して、本報告書のまとめとしたい。

遺跡範囲について

市教委は、過去の発掘調査および遺物採集、聞き取り調査を通じて、第64図の太破線で示した範囲を柳沢遺跡と認定してきた。今回の調査では、Ａ区から中世以降の遺構が見つかったほか、Ｄ区でも弥生時代や平安時代の遺構や遺物集中を検出しているため、現在の県道中野飯山線以西における南北の境は、おおむね市教委が示した箇所になると考えられる。ただ、市教委が行った５地点や県埋文センターが行ったＥ区の試掘・確認調査では遺構・遺物がなかったため、南限はやや北側になるかもしれない。しかし、Ｄ区とＥ区との間に明らかな地形変換点がないため、現状では、市教委が定めた範囲で遺跡を保護していくべきであろう。

遺跡範囲は、県道中野飯山線以東の広大な高社山麓の傾斜面を含んでいるが、この部分に遺構や遺物包含層の広がりがあるか否かについての情報は、ほとんどない。市教委が線引きした遺跡範囲内外の試掘調査を通じて、県道以東における遺跡の北・東・南の範囲を確定していくことが必要だろう。

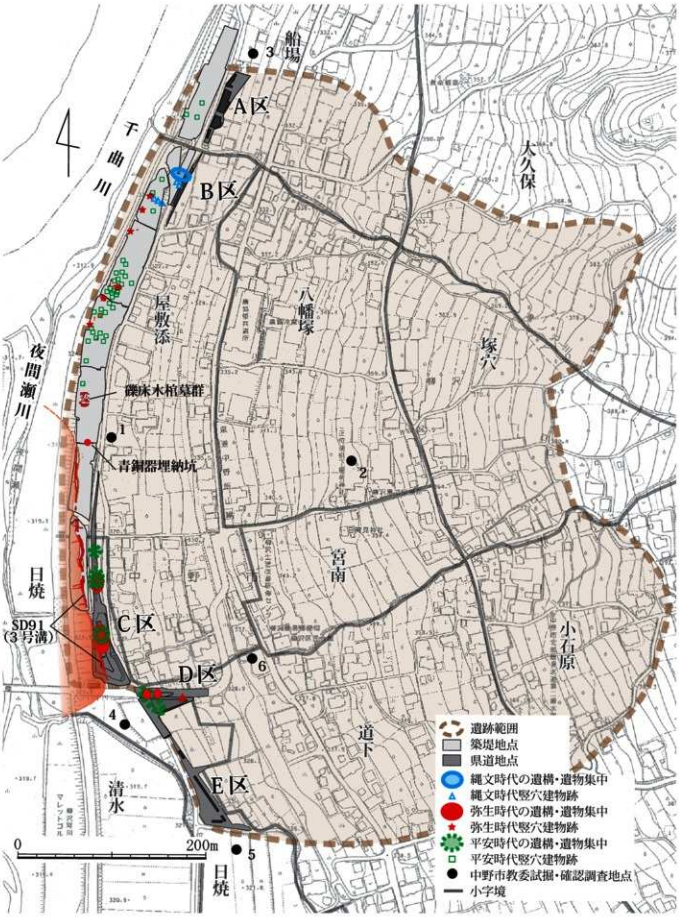
集落跡について

縄文時代は、滝ノ沢川下流の南岸域に、中期末葉から後期前葉にかけての集落跡があることがわかった。この集落跡は、高社山麓の傾斜面に向けて東に広がる可能性がある。また、築堤地点と県道地点の調査範囲北半からは、縄文早期から晩期の土器が少量ながら出土している。これらは、高社山の傾斜地から供給されたと考えられるので、遺跡の北半中央部から東部にかけて、縄文時代各期の集落跡が点在しているのかもしれない。

弥生時代は、Ｄ区から竪穴建物跡と思われる遺構が見つかったことにより、青銅器埋納坑や礫床木棺墓群をはさんで、南側にも居住域がある可能性を指摘した。北側の居住域は滝ノ沢川を北限として千曲川東岸に広がることがわかった。南側は、広がりはもとより、居住域としてとらえられるか不明であるが、青銅器埋納坑を評価する上で、居住域を含む集落景観の復元は欠かせない。

青銅器の埋納は、集落数の減少と連動するのではないかとの想定により、畿内第Ⅳ様式内に埋納したと築堤地点では結論づけている（長野県埋蔵文化財センター2012b）。今回の調査でも、後期初頭吉田式期の竪穴建物跡は見つからず、当該期は、今のところ土器棺墓１基と土器集中地点を確認したにとどまる。中野・飯山地域の千曲川流域では、上流の中野市千田遺跡でのみ吉田式期の集落跡を確認している（長野県埋蔵文化財センター2013a）。栗林式期の集落遺跡の動態については、柳沢遺跡調査指導委員会委員長の笹澤浩氏により整理され、その上で、青銅器の導入や埋納の背景等について見解が示されているが（笹澤2012）、遺跡内外における中期最終末から後期初頭にかけての集落跡の様相を把握することは、青銅器埋納の背景を理解する上で忘れてはならない。

平安時代の集落跡は、築堤地点では夜間瀬川や千曲川に沿った遺跡西北部に竪穴建物跡などが分布し、



第64図　柳沢遺跡全体図（１：4,000）

それらは滝ノ沢川を越えて北に延びる様相を示していたが、今回は新たに遺跡西南部のＣ区からＤ区にかけて土坑と遺物集中が見つかった。出土土器は著しく磨滅しているわけではないため、屋敷添地籍南部から宮南地籍にかけて集落跡が存在する可能性がある。

生産域について

今回の調査では、弥生時代中期後半の溝跡が築堤地点から南へ延びることが確実になり、土壌分析の結果、溝跡の西側に水田土壌があることもわかった。この結果と第２章第１節で述べた明治期の夜間瀬川の流路変更を踏まえると、当時の生産域は、日焼地籍から清水地籍にかけて広がっていた可能性がある。とすると、第９図右上の「明治12年柳沢村道路網」に示された斜線の水田は、すでに弥生時代中期後半に開かれていたと見ることができるのだが、この場所は市教委の試掘・確認調査（No.４地点）でも明らかなように、夜間瀬川の付替えや土地利用による地形改変が著しく、現状では考古学的にそれを証明することは難しい。

今後の発掘調査により、集落域と生産域を含む柳沢地区全体の景観が明らかになることを期待して、本報告書のまとめとしたい。

参考文献

笹澤　浩　2012「柳沢遺跡調査指導委員会の見解Ⅶ　長野盆地北部における栗林期集落遺跡の動態と柳沢遺跡」『中野市柳沢遺跡　千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発調査報告書　中野市内その３』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100

長野県埋蔵文化財センター　2012『北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書６　南曽峯遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書93

長野県埋蔵文化財センター　2012b『中野市柳沢遺跡　千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発調査報告書　中野市内その３』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100

長野県埋蔵文化財センター　2013a『中野市千田遺跡　千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発調査報告書　中野市内その１』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書98

長野県埋蔵文化財センター　2013b『中野市川久保遺跡・宮沖遺跡　千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発調査報告書　中野市内その２』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書99

柳沢遺跡の解説看板

遺物観察表

土器・土製品観察表

金属器観察表

石器観察表

土器・土製品観察表

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
1	51	B	SB61床	縄文	中期末		深鉢	隆線→無節L	ナデ
2	53	B	SB61 上層	縄文	後期		深鉢	刺突文	ナデ
3	52	B	SB61 上層	縄文	後期		深鉢	磨消縄文（単節RL）	ナデ
4	24	B	SK2334	縄文	中期末		深鉢	隆帯+無節R	
5	99	B	SK2334	縄文	中期～後期		深鉢	無節R	ナデ。ヘラナデ
6	60	B	SK2335 上層	縄文	後期？		深鉢	沈線 口唇部面取り	ナデ
7	59	B	SK2335 上層	縄文	後期		深鉢	沈線	ナデ
8	49	B	SK2335	縄文	後期		深鉢	沈線+単節LR	ナデ
9	47	B	SK2335	縄文	中期～後期		深鉢	条線文（7or8本1単位）	ナデ
10	48	B	SK2335	縄文	中期～後期		深鉢	網代痕（不明瞭）	不明
11	50	B	SK2335	縄文	中期～後期		深鉢	無文	ナデ
12	216	D2	Ⅸ I 03カクラン	縄文	早期		深鉢	LR単節	ナデ
13	218	D2	カクラン	縄文	早期		深鉢	LR単節	ナデ？
14	113	D	西Ⅱa層	縄文	早期		深鉢	単節LR？	摩耗して不明
15	197	B2①	SQ59 Ⅱ層	縄文	早期		深鉢	格状帯条痕？	ナデ。繊維痕が認められる
16	217	D2	Ⅰ層	縄文	早期～前期		深鉢	L無節	ナデ
17	108	C1	SQ52 Ⅲ層	縄文	前期	諸磯a式	深鉢	半截竹管の沈線＋押引き	ナデ
18	121	C2	SD91 砂層	縄文	前期	諸磯b式	深鉢	浮線文	摩耗して不明瞭
19	110	A	SD81	縄文	中期末	沖ノ原式	深鉢	隆帯＋刻み＋単節RL	ナデ
20	5	B	2T北 Ⅰ層	縄文	中期末	串田新式	深鉢	沈線→無節L	
21	166	B2③	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期末	串田新式	深鉢	沈線+刺突文	ナデ
22	179	B2②	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯→RL単節	ナデ
23	186	B2②	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯+LR単節	ナデ
24	195	B2③	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	微隆起帯	ナデ
25	149	B2	SQ59 No. 1	縄文	中期末		深鉢	RL単節→微隆起帯＋太沈線	ナデ
26	144	B2	SQ59 No. 6	縄文	中期末	加曽利E3	深鉢	隆帯＋RL単節→太沈線	ナデ
27	160	B2①	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期末		深鉢	RL単節→隆帯	ミガキ？
28	152	B2	SQ59 No. 11	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯→LR単節	ナデ
29	155	B2	SQ59 No. 10	縄文	中期末	加曽利E3	深鉢	微隆起帯＋RL単節	ナデ
30	25	B	SK2340 2層	縄文	中期末		深鉢	隆線→単節LR	
31	164	B2①	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期末		深鉢	隆帯→RL単節	ナデ
32	133	B2①	SQ59 Ⅱc層礫・礫下	縄文	中期末		深鉢	隆帯＋RL単節	ナデ
33	201	B2④	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期末		深鉢	平行する沈線→RL単節	ナデ
34	193	B2③	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯 無文	ナデ
35	140	B2	SQ59 No. 4	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯＋LR単節	
36	177	B2①東	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期末		深鉢	隆帯+単節縄文	ナデ
37	128	B2②	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期末		深鉢	隆帯→L無節→沈線	ナデ
38	39	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	無文 隆帯	指ナデ
39	11	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	隆帯+単節LR	
40	36	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	隆帯	摩耗のため不明
41	29	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	隆帯	
42	28	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	隆帯	
43	173	B2①	SQ59 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	隆帯→RL単節	ナデ
44	42	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	単節RL＋隆帯	ナデ
45	72	B	2T Ⅱ層	縄文	中期末		深鉢	隆帯+単節RL	ナデ
46	10	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	隆帯→単節RL	
47	74	B	2T Ⅱ層	縄文	中期末		深鉢	単節LR	ナデ
48	168	B2①	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期末		深鉢	隆帯→RL単節	ミガキ
49	120	B2	SQ54 炉周辺	縄文	中期末		深鉢	隆帯	摩耗して不明
50	41	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	無節L＋隆帯	ナデ
51	146	B2	SQ59 No. 6	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯→RL単節	ナデ
52	151	B2	SQ59 No. 3	縄文	中期末		深鉢	RL単節→微隆起帯	摩耗して調整不明

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
53	182	B2③	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯→RL単節	ナデ
54	162	B2③	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯→LR単節	ナデ
55	194	B2	SQ59-3 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯→RL単節	ナデ
56	156	B2	SQ59 No. 3	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯→RL単節	ナデ
57	142	B2	SQ59 No. 6	縄文	中期末		深鉢	微隆起帯＋RL単節	摩耗して不明瞭
58	134	B2	SQ59 No. 14	縄文	中期末		両耳壺	RL単節＋隆帯＋耳状突起	ナデ
59	145	B2	SQ59 No. 6	縄文	中期末		両耳壺	隆帯→LR単節	ナデ
60	16	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		両耳壺	隆帯	
61	157	B2	SQ59 No. 6	縄文	中期末		両耳壺	耳部貼付→LR単節→隆帯	ナデ
62	136	B2	SQ59 No. 3	縄文	中期末		両耳壺	RL単節＋隆帯	
63	40	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期～後期		両耳壺	無文＋刺突＋耳状突起	ナデ
64	174	B2①東	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期末		深鉢	L無節→沈線（磨消）	ナデ
65	38	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節LR→沈線	ナデ
66	1	B	2T北 Ⅰ層	縄文	中期末		深鉢	単節LR?	
67	2	B	2T北 Ⅰ層	縄文	中期末		深鉢	無節L　単沈線	
68	18	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	磨消縄文 無節	
69	154	B2	SQ59 No. 7	縄文	中期末		深鉢	太沈線→RL単節	ナデ
70	159	B2③	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期末		深鉢	太沈線→LR単節	ナデ
71	199	B2④	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期末		深鉢	沈線→RL単節	ナデ
72	4	B	2T北 Ⅰ層	縄文	中期末		深鉢	沈線+単節RL	
73	135	B2	SQ59 No. 1	縄文	中期後葉～末		深鉢	波状口縁 RL単節	ナデ
74	172	B2①	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期後葉～末		深鉢	太沈線→RL単節	ナデ
75	137	B2	SQ59 No. 2・Ⅱc層	縄文	中期後葉～末		深鉢	波状口縁 RL単節	ナデ
76	150	B2	SQ59 No. 4	縄文	中期後葉～末		深鉢	沈線＋短沈線	ｙ４
77	81	B	2T北 Ⅰ層	縄文	中期末		深鉢	単節LR→沈線	ナデ
78	143	B2	SQ59 No. 6	縄文	中期末		深鉢	沈線→LR単節	ナデ
79	213	B2①	SQ59 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	太沈線→LR単節	ナデ
80	101	C2	SQ56, 57 Ⅲa層	縄文	中期末		深鉢	沈線+単節LR	
81	15	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期後葉～末		深鉢	単節RL 圧痕隆帯	
82	115	D	SQ51 Ⅱ層	縄文	中期後葉～末		深鉢	隆帯	摩耗して不明
83	175	B2①東	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期後葉～末		不明	単節縄文？+円形刺突列	摩耗して不明
84	198	B2④	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期後葉～末		深鉢	RL単節？+刺突文	ナデ
85	171	B2①	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期後葉～末		深鉢	円形圧痕文+RL単節	ナデ
86	219	B2②	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期後葉～末		深鉢	隆帯→RL単節→太沈線	ナデ
87	191	B2	Ⅱ層	縄文	中期後葉～末		深鉢	刻目隆帯+L無節？	ナデ
88	139	B2	SQ59 No. 4	縄文	中期後葉～末		深鉢	圧痕隆帯＋LR単節	ヨコナデ
89	132	B2②	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期後葉～末		深鉢	隆帯 無文（ナデ）	ナデ
90	89	B	2T北	縄文	中期後葉～末		深鉢	沈線＋単節RL→波状沈線	
91	123	B2①	SQ59-1 Ⅱc層	縄文	中期後葉～末		深鉢	沈線→LR単節	擦痕
92	112	D	Ⅱ層	縄文	中期後葉～末		深鉢	単節縄文RL？+沈線or半隆帯文	ナデ
93	82	B	Ⅰ層	縄文	中期後葉～末		深鉢	沈線→単節RL+沈線	ナデ
94	148	B2	SQ59 No. 6	縄文	中期		深鉢	沈線	線条痕が残るナデ
95	147	B2	SQ59 No. 6	縄文	中期後葉～末		深鉢	太沈線＋RL単節	ナデ
96	204	B2④	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期～後期		深鉢	無文 ナデ 口縁部下に稜有り	ナデ
97	119	D	SQ51 上層	縄文	中期～後期		深鉢	沈線	摩耗して不明
98	17	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節RL	
99	126	B2①東	SQ59 Ⅱ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節縄文→沈線	ナデ
100	125	B2①	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期～後期		深鉢	沈線→LR単節	ナデ
101	78	B	2T北 Ⅰ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節LR	ナデ
102	167	B2③	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期～後期		深鉢	LR単節（一段ヨコに転がし以下は縦に転がす）	ミガキ
103	138a	B2	SQ59 No. 2, 13	縄文	前期？		深鉢	RL単節	ヨコナデ

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
104	138b	B2	SQ59 No. 2, 13	縄文	前期？		深鉢	RL単節	ヨコナデ
105	77	B	2T北 Ⅰ層	縄文	前期？		深鉢	単節RL	ナデ、擦痕
106	118	B	2T Ⅱ層	縄文	中期？		深鉢	単節LR＋絡条体条痕?	
107	37	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末？		深鉢	単節LR	ナデ
108	83	B	2T Ⅰ層	縄文	中期？		深鉢	単節LR	ナデ
109	203	B2④	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期？		深鉢	LR単節	ナデ
110	32	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期？		深鉢	単節LR	
111	163	B2①	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期？		深鉢	LR単節	ナデ
112	127	B2②	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期？		深鉢	RL単節	擦痕
113	12	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期？		深鉢	一部に単節LR	
114	92	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	単節RL	ナデ
115	95	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期？		深鉢	単節LR	ナデ。指頭圧痕
116	104	C1	SQ52 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節RL	ナデ
117	102	C1	SQ52 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節RL	摩耗で不明
118	107	C1	SQ52 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節RL	ナデ
119	106	C1	SQ52 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節RL	ナデ
120	109	C1	SQ52 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節RL	
121	103	C1	SQ52 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節RL	ナデ
122	105	C1	SQ52 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	単節RL	ナデ
123	71	B	2T Ⅱ層	縄文	中期～後期		深鉢	無節L（摩耗で不明瞭）	ナデ
124	206	B2	⑦区 Ⅱ層	縄文	中期～後期		深鉢	L無節	ナデ
125	14	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	無節R 一部押圧施文より節が認められる	
126	30	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	無節L	指ナデ痕
127	200	B2④	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期～後期		深鉢	L無節	ナデ
128	45	B	2T Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	無節撚糸文？	ナデ
129	73	B	2T Ⅱ層	縄文	中期～後期		深鉢	無節L	ナデ
130	64	B	SQ54炉 2層	縄文	中期～後期		深鉢	無節の押圧縄文	ナデ
131	192	B2	Ⅱ層	縄文	中期～後期		深鉢	L無節	ナデ
132	61	B	SQ54炉 1層，2層	縄文	中期～後期		深鉢	無節L	不明
133	205	B2③	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期～後期		深鉢	L無節	ナデ
134	46	B	2T Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	無節撚糸文？	ミガキ
135	188	B2②	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	太沈線+波状条線文	ナデ
136	169	B2①	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	波状条線文	ナデ
137	57	B2	SQ54炉2周辺	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	条線文	ナデ
138	208	B2 ⑨・⑬	Ⅱ層、Ⅱb層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	条線文	ナデ
139	87	B	2T Ⅰ層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	条線文	ナデ
140	27	B	SQ54 Ⅲ層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	条線文（5本1単位）	
141	31	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	条線文（7or8本1単位）	ナデ
142	181	B2③	SQ59 Ⅱ層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	条線文	ナデ
143	65	B	2T	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	条線文（5or6本1単位）	ナデ
144	141	B2	SQ59 No. 4	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	条線文 ガジリあり	ナデ
145	80	B	2T北 Ⅰ層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	条線文（6本1単位）	ナデ
146	88	B	2T Ⅰ層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	波状条線	ナデ
147	130	B2②	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	波状条線文	ナデ
148	183	B2①	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	波状条線文(7本1単位)	ナデ
149	178	B2	SQ59-2 Ⅱc層	縄文	中期末～後期初頭		深鉢	波状条線文	ナデ
150	211	B2①	Ⅱb層	縄文	中期末		深鉢	短沈線	未調整
151	44	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末		深鉢	短沈線	ナデ
152	63	B	SQ54炉 2層	縄文	中期～後期				
153	131	B2③	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期末		深鉢	器面剥落	ナデ
154	129	B2②	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期末		深鉢	RL単節	

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
155	58	B	SQ54炉2周辺	縄文	中期末		深鉢	不明 上面に無節縄文？	ナデ
156	190	B2	Ⅱ層	縄文	中期末		深鉢	渦巻文+RL単節	ナデ
157	170	B2①	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	後期初頭	称名寺式	深鉢	沈線→LR単節	ナデ
158	214	D2	SQ58 Ⅱ層	縄文	後期初頭		深鉢	沈線+LR単節	摩耗して不明
159	69	B	2T	縄文	中期末～後期初頭	関沢類型	深鉢	円形刺突文+隆帯+単節LR	ナデ
160	75	B	2T北 Ⅰ層	縄文	後期初頭		深鉢	磨消縄文（単節LR）	ナデ
161	70	B	2T Ⅱ層	縄文	後期初頭		深鉢	磨消縄文（燃糸文？）	ナデ
162	85	B	2T Ⅱ層	縄文	後期初頭	称名寺式	深鉢	充填縄文（単節LR）？	
163	84	B	2T Ⅰ層	縄文	後期初頭		深鉢	磨消縄文（単節RL）	ナデ
164	35	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期初頭		深鉢	磨消縄文 単節LR	ナデ
165	79	B	2T北 Ⅰ層	縄文	後期初頭	称名寺式	深鉢	沈線	ナデ
166	207	B2⑦	Ⅱ層	縄文	後期初頭	称名寺式	深鉢	充填縄文（LR単節）	ナデ
167	43	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期初頭		深鉢	磨消縄文（無節L）	ナデ
168	153	B2	SQ59 No.12	縄文	後期初頭	称名寺式	深鉢	J字文	ナデ
169	9	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期初頭	称名寺式	深鉢	沈線+短沈線	
170	13	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期初頭	称名寺式	深鉢	沈線＋刺突	ケズリ＋ナデ
171	55	B	SQ54 Ⅲ層	縄文	後期初頭	三十稲場式	深鉢	爪形刺突文	ナデ
172	67	B	2T	縄文	後期初頭		深鉢	隆帯→爪形文	ナデ
173	187	B2②	SQ59 Ⅲ層	縄文	後期初頭	三十稲場式	深鉢	刺突文	ナデ
174	7	B	2T北 Ⅰ層	縄文	後期初頭		深鉢	隆帯→橋状把手＋沈線→単節縄文	ナデ
175	66	B	2T	縄文	後期？		深鉢	沈線	ナデ・ミガキ
176	23	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期前葉	堀之内1式	深鉢	沈線	ナデ
177	21	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期前葉	堀之内1式			
178	22	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期前葉		深鉢		
179	20	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期前葉		深鉢		
180	86	B	2T北	縄文	後期前葉			無文 口唇部に沈線	ナデ
181	76	B	2T北 Ⅰ層	縄文	後期前葉		深鉢	単節LR→沈線	ナデ
182	165	B2③	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	後期前葉		深鉢	磨消縄文（原体不明）	ナデ
183	117	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期前葉		深鉢	沈線	
184	33	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期前葉	堀之内式平行	深鉢	沈線+矢羽状短沈線	ナデ
185	196	B2①	SQ59 Ⅱ層	縄文	後期前葉	堀之内1式	深鉢	磨消縄文（LR単節）	摩耗して不明
186	111	A	SD81	縄文	後期前葉	堀之内1式	深鉢	沈線+刺突→単節LR？	ナデ
187	34	B	2T北 Ⅲ層	縄文	後期前葉		深鉢	隆帯＋沈線	ナデ
188	96	B	2T Ⅱ層	縄文	後期前葉		深鉢	沈線+刺突文	ナデ
189	68	B	2T北 Ⅰ層	縄文	後期前葉		深鉢	沈線	ナデ。
190	189	B2②	SQ59 Ⅱc層礫下	縄文	中期～後期		深鉢	無文 ナデ	ナデ
191	202	B2④	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期～後期		深鉢	無文 ナデ	ナデ
192	185	B2②	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期～後期		深鉢	無文 ナデ	ナデ
193	62	B	SQ54炉 1層	縄文	中期～後期		深鉢	無文	ナデ
194	8	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	無文	
195	26	B	Ⅲ023	縄文	中期～後期		深鉢	無文	ナデ
196	93	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期～後期		深鉢	無文	ナデ
197	122	B2③	SQ59 Ⅱc層	縄文	中期～後期		深鉢	ナデ	ナデ
198	94	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末～後期		深鉢	胴部無文 底部木葉痕	ナデ
199	161	B2①	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	後期前葉	堀之内1式	深鉢	沈線＋無節縄文？	ナデ
200	6	B	2T北 Ⅰ層	縄文	中期末～後期		深鉢	底部網代痕	
201	54	B	SQ54 Ⅲ層	縄文	中期末～後期		深鉢	底部網代痕	ナデ
202	19	B	2T北 Ⅲ層	縄文	中期末～後期		深鉢	網代痕	
203	210	B2⑬	Ⅱ層	縄文	中期末～後期		深鉢	底面：網代痕	ナデ
204	3	B	2T北 Ⅰ層	縄文	中期末～後期		深鉢	無節L 底部網代痕	
205	114	D	西Ⅱb層	縄文	晩期		深鉢	口唇部：刻み 条線	ナデ
206	554	D2	SQ58 カクラン	縄文	晩期	氷Ⅰ式	甕	ナデ→太く浅い凹線	ナデ

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
207	100	B	SQ54 Ⅲ層	縄文	中期末～後期初頭		土製円板	条線文	ナデ
208	428	B	2T北 Ⅰ層	縄文			土製円板	沈線	ナデ
209	56	B	SQ54 Ⅲ層	縄文			土偶	平行沈線＋刺突列	平行沈線
210	176	B2①東	SQ59 Ⅱc層礫	縄文	中期		ミニチュア	R無節+沈線	ナデ
211	184	B2②	SQ59 Ⅱc層	縄文			土製品		
212	180	B2②	SQ59 Ⅱc層	縄文			土製品		
213	464	D	SQ51 No. 52	弥生	中期	栗林式	壺	口唇：LR単節 口縁：ナデ	ナデ？
214	447	D	SQ51№2・68	弥生	中期	栗林式？	壺	ハケB→ナデ→頸部：横走沈線+胴部：沈線→ボタン状貼付文	ハケB+ナデ。指頭圧痕
215	445	D	SQ51 No. 89	弥生	中期？		壺	ハケB→ナデ	摩耗して不明瞭（ハケB？）
216	510	D	SQ51 No. 93	弥生	中期		壺	ミガキ	摩耗して不明
217	440	D	Ⅸ J02 No. 1	弥生	中期？		壺	摩耗して調整不明	ハケB+ナデ
218	469	D	SQ51 No. 16	弥生	中期？		壺	摩耗して調整不明	ハケB+ナデ。指頭圧痕
219	466	D	SQ51 No. 27	弥生	中期？		甕	摩耗して調整不明	摩耗して調整不明
220	468	D	SQ51Ⅱ層上部	弥生	中期？		甕	ハケ→ナデ	ナデ？
221	489	D	SQ51Ⅱ層下面	弥生	中期	栗林式？	台付甕	ナデ	ナデ
222	508	D	SQ51 No. 44	弥生	中期	栗林式	高杯	赤彩	赤彩
223	505	D	SQ51No. 57・64 Ⅱ層下面・Ⅱb層下	弥生	中期	栗林式？	高杯	赤彩（摩耗してわずかに残留）	ナデ＋削り
224	504	D	SQ51 No. 14・18・Ⅱ層下面	弥生	中期	栗林式	高杯	赤彩（わずかに痕跡が残る）	赤彩（わずかに痕跡が残る）
225	458	D	SQ51 No. 56	弥生	中期？		鉢	赤彩？（部分的に残存）	赤彩+ミガキ
226	459	D	SQ51 No. 54	弥生	中期～後期		鉢	ハケ→ナデ？（摩耗して不明瞭）	赤彩
227	467	D	SQ51 No. 15・26	弥生	中期	栗林式	鉢	口唇：LR単節 折り返し口縁：LR単節→山形沈線文 摩耗して調整不明	ミガキ？
228	499	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生	中期～後期		鉢	ミガキ（赤彩不明）	摩耗して調整不明
229	481	D	SQ51 Ⅱ層	弥生	中期		壺	口唇：LR単節 口縁：ハケ→ナデ？	刺突文
230	482	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生	中期		壺	口唇：LR単節 口縁：ハケ→ナデ？	刺突文
231	479	D	SQ51 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	口唇：LR単節 口縁：ハケ→ナデ	ハケ→ナデ
232	470	D	SQ51 No. 57	弥生	中期	栗林式	壺	口唇：ユビオサエ	摩耗して調整不明
233	453	D	SQ51 No. 59	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→櫛描直線文+往相沈線文	ナデ？（摩耗して不明瞭）
234	472	D	SQ51 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB→ナデ→LR単節？→横走沈線+押引き文	ハケ→ナデ
235	503	D	SQ51 Ⅱ層、Ⅱ層下面	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節？→横走沈線文	摩耗して不明
236	478	D	SQ51 No. 9	弥生	中期	栗林式	壺	横走沈線＋山形沈線＋LR単節？	ハケB
237	441	D	SQ51 No. 99	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB→櫛描直線文→横走沈線	摩耗して不明（ハケB?）
238	463	D	SQ51 No. 46	弥生	中期	栗林式	壺	横走沈線→LR単節	指頭圧痕→ハケB
239	511	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→横走沈線文	摩耗して不明
240	501	D	SQ51 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→横走沈線文	ハケA→ナデ
241	500	D	SQ51 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→横走沈線文	ハケA→ナデ
242	462	D	SQ51 No. 50	弥生	中期	栗林式	壺	疑似縄文（オオバコ文？）→横走沈線紋+連孤文	ミガキ
243	460	D	SQ51 No. 33	弥生	中期	栗林式？	壺	ハケB→LR単節→横走沈線+山形沈線紋	ハケB→ナデ
244	502	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→横走沈線文	ハケA→ナデ
245	509	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生	中期	栗林式	壺	疑似縄文（オオバコ文？）→横走沈線紋+連孤文	ハケ→ナデ
246	443	D	SQ51 No. 72・Ⅱ層	弥生	中期	栗林式？	壺	ハケB→ナデ→沈線→ボタン状貼付文	ハケB+ナデ。指頭圧痕
247	465	D	SQ51 Ⅱ層上部	弥生	中期？		甕	摩耗して調整不明 折返し口縁	摩耗して調整不明
248	483	D	SQ51	弥生	中期	栗林式	甕	口唇：LR単節 口縁：ハケ→ナデ	ハケ→ナデ

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
249	457	D	SQ51 No.60	弥生	中期	栗林式	甕	LR単節→ニの字重ね文	ミガキ
250	512	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描縦羽状文	ハケ→ナデ
251	475	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描羽状文？→刺突文B	ハケB
252	477	D	SQ51 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描縦羽状文	ハケB
253	486	D	SQ51 No.10	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描縦羽状文→櫛描波状文（5本1単位）	ハケB
254	488	D	SQ51 Ⅱb層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描簾状文？＋櫛描縦羽状文	ハケB
255	448	D	SQ51 No.87	弥生	中期	栗林式	甕	ハケB→櫛描縦羽状文（4本1単位）	ハケA
256	480	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生	中期～後期		甕	櫛描簾状文？＋櫛描波状文	摩耗して不明瞭（ハケ？）
257	451	D	SQ51 No.65	弥生	中期	栗林式	甕	ナデ→櫛描波状文（6本1単位）	ミガキ
258	473	D	SQ51 No.6	弥生	中期	栗林式？	甕	櫛描波状文→山形沈線紋	ハケB→ミガキ
259	485	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生?	中期？		甕	LR単節	指頭圧痕
260	471	D	SQ51 Ⅱ層	弥生	中期？		鉢	ミガキ（赤彩不明）	赤彩+ミガキ
261	487	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生	中期？		鉢	赤彩（わずかに残る）	赤彩（わずかに残る）
262	368	C2	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式	壺	ナデ 口唇部LR単節	ナデ
263	355	C2	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式	壺	口唇：LR単節 口縁：ハケB→ミガキ	ミガキ?
264	353	C2	SD91 Ⅲb層	弥生	中期	栗林式	壺	口唇：LR単節 口縁：ナデ	ナデ?
265	361	C2	SD91 Ⅲb層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB+LR単節→横走沈線+連弧文→ミガキ 底部：網代痕か？	ハケB→ナデ
266	369	C2	SD91 砂層	弥生	中期		甕	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ
267	377	C2	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式？	甕	ナデ→櫛描簾状文（5本1単位）	ナデ
268	350	C2	SD91 砂層	弥生	中期～後期		蓋	ミガキ	ミガキ
269	375	C2	SD91 砂層	弥生	中期		壺	ハケB→ナデ	ナデ
270	351	C2	SD91 砂層	弥生	中期		甕	ハケB→ミガキ	ハケB→ミガキ
271	352	C2	SD91 Ⅲb層	弥生	中期		甕	ハケB→ナデ?	ナデ
272	362	C2	SD91 砂層	弥生	中期		甕	ミガキ	ハケB→ミガキorナデ
273	363	C2	SD91 砂層	弥生	中期		甕	ミガキ	ミガキ
274	349	C2	SD91 砂層	弥生?	?		甕	底部高台	剥落して不明
275	367	C2	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式	壺	ナデ→LR単節→横走沈線＋懸垂文	ナデ
276	433	C2	SD91	弥生	中期	栗林式	壺	懸垂文（摩耗して調整不明）	ハケB→ナデ
277	358	C2	SD91 Ⅲb層	弥生	中期	栗林式	壺	横走沈線文	ナデ?
278	374	C2	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→横走沈線	ハケB
279	365	C2	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→重連弧文	摩耗して不明瞭
280	364	C2	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式	甕	ハケA→ナデ 口唇部LR単節	ミガキ
281	366	C2	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式	甕	ハケB→櫛描横羽状文	ハケB→一部ナデ
282	378	C2	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式？	甕	ハケB→櫛描格子目文？	ミガキ
283	356	C2	SD91 Ⅲb層	弥生	中期～後期	栗林式？	甕	櫛描波状文	ミガキ
284	360	C2	SD91 Ⅲb層	弥生	中期	栗林式	甕	ミガキ→刺突文	ミガキ
285	371	C2	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式	甕	ハケC→櫛描波状文（4本1単位）	ミガキ
286	514	C	SD91 砂層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描波状文+刺突文B	ミガキ
287	379	C2	SD91 砂層	弥生	中期～後期		甕	ハケB→ナデ→櫛描波状文（5本1単位）	ヨコミガキ
288	359	C2	SD91 砂層	弥生	中期～後期		甕	ハケC→櫛描波状文（7本1単位）	ミガキ（横）
289	354	C2	SD91 砂層	弥生	中期～後期		甕	櫛描直線文+櫛描波状文（6本1単位）	ハケB→ミガキ
290	376	C2	SD91 砂層	弥生	中期～後期		鉢	ミガキ？ 焼成前穿孔	摩耗して不明
291	347	B	2T	弥生	中期	栗林式	甕	口唇：LR縄文 口縁部：櫛描波状文 頸部：ハケB	ハケB→ミガキ
292	531	B2③	SQ59 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	口唇：RL単節 口縁：RL単節→山形沈線文	

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
293	529	B2③	SQ59 Ⅱc層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケ→沈線+櫛描直線文+押引き文	摩耗して不明
294	534	B2③	SQ59 Ⅱ・Ⅱc層	弥生	中期	栗林式	壺	沈線+波状沈線→櫛描波状文（6～7本1単位）	ハケB→ナデ
295	532	B2③	SQ59 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	沈線→櫛描直線文+押引き文	ハケB→ナデ
296	526	B2①東	SQ59 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	沈線→LR単節	ミガキ
297	346	B	2T	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB→LR単節→連弧文	ハケB →ナデ
298	527	B2③	SQ59 Ⅱc層	弥生	中期	栗林式	甕	口唇：ユビオサエ→RL単節 ナデ→櫛描波状文	ミガキ
299	212	B2③	SQ59 Ⅱc層	弥生	中期		甕	LR単節	ハケ→ナデ
300	528	B2③	SQ59 Ⅱc層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描横羽状文	ミガキ
301	530	B2③	SQ59 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描格子目文＋刺突文B	ハケB
302	439	A	SD81	弥生	中期～後期		甕	ナデ→櫛描波状文(5本1単位)	ナデ？
303	533	B2③	SQ59 Ⅱc層	弥生	中期	栗林式	甕	ハケ→櫛描直線文→LR単節	ハケC
304	525	B2①	SQ59 Ⅱc層	弥生	中期	栗林式	高杯	赤彩+ミガキ	赤彩+ミガキ
305	301	C1	SQ53 No. 1	弥生	中期	栗林式	壺	口唇：LR単節 口縁：LR単節→重山形沈線文 胴部：横走沈線→刺突文B＋山形沈線文＋LR単節＋複合鋸歯文	ハケA→ナデ
306	302	C1	SQ53 No. 9	弥生	中期	栗林式	壺	口唇：RL単節 頸部～胴部：RL単節→横走沈線→ミガキ	口縁：ミガキ。胴部：ハケ？→ナデ（摩耗して不明瞭）
307	411	C2	SQ57 Ⅲ層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB→ナデ→横走沈線	ハケB→ナデ
308	393	C2	SQ57 Ⅲ層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB→ミガキ+LR単節→懸垂文（櫛描直線文→沈線）+山形沈線文+重山形文→円形添付文（4個）	器面剥落して不明
309	397	C2	SQ57 Ⅲb層カ	弥生	中期	栗林式	壺	ナデ→横走沈線+波状沈線	ナデ
310	394	C2	SQ57 No. 1・Ⅲb層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB+ミガキ+LR単節→横走沈線→懸垂文（櫛描直線文→押引き文）+重斜線文+押引き文+刺突文B+重三角文→円形貼付文（5個）	ハケB→ナデ
311	412	C2	SQ57 Ⅲ層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB→ミガキ→横走沈線＋波状沈線＋連弧文	ハケB→ナデ
312	303	C1	SQ53b No. 58、SQ53 Ⅲ・Ⅲb2層下	弥生	中期	栗林式？	壺	ハケ→ミガキ	ハケB→ナデ
313	334	C1	SQ53 No. 35	弥生	中期	栗林式	壺	赤彩+ミガキ	摩耗して赤彩・調整不明
314	317	C1	SQ53b Ⅲ層4区・Ⅲb層4区	弥生	中期	栗林式	壺	ミガキ・赤彩 頸部隆帯	ハケA→ナデ
315	391	C2	SQ56 Ⅲa層	弥生	中期？		壺	ハケB→赤彩+ミガキ？	ハケB→ナデ？
316	332	C1	SQ53b Ⅲb層4区	弥生	中期	栗林式	壺	ナデ	ナデ
317	333	C1	SQ53b Ⅲb2層上・Ⅲb2層下・Ⅲb層	弥生	中期	栗林式？	壺	ハケ→ナデ（底面繊維痕？）	ハケ→ナデ
318	521	C1	SQ53b Ⅲb2層下4区	弥生	中期		壺	摩耗して不明	ミガキ
319	435	C2	Ⅲb層	弥生	中期	栗林式？	甕	波状沈線文（表面摩耗）	赤彩痕（摩耗して不明瞭）
320	430	C2	SQ55 No. 5	弥生	中期	栗林式？	甕	ハケ？→ミガキ	摩耗して不明瞭
321	304	C1	SQ53b No. 45・47・48・52	弥生	中期	栗林式？	甕	横ミガキ	ハケ
322	305	C1	SQ53bNo. 43、SQ53b Ⅲb層・Ⅲb2層下4区	弥生	中期	栗林式	甕	ハケ→櫛描縦羽状文（4本1単位）	ハケ
323	307	C1	SQ53b Ⅲ層	弥生	中期？	栗林式？	甕	ナデ	ナデ
324	306	C1	SQ53b No. 43	弥生	中期	北陸系	甕	ハケ 底面：種子圧痕	ナデ
325	419	C2	SQ55 No. 21	弥生	中期？		甕	摩耗して不明	摩耗いして不明
326	398	C2	SQ57 No. 2	弥生	中期？		甕	ハケB→ミガキ	ハケC→ナデ
327	312	C	TP4（SQ53）Ⅲ層下部	弥生	中期～後期	北陸系？	甕	ミガキ	ミガキ
328	313	C	TP4(SQ53b) Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	高杯	摩耗して調整・赤彩不明	摩耗して調整・赤彩不明
329	341	C1	SQ53b Ⅲb層4区	弥生	中期	栗林式	高杯	赤彩+ミガキ	赤彩+ミガキ

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
330	315	C1	SQ53 No. 24	弥生	中期	栗林式	高杯	ハケ→ミガキ・赤彩	ハケ→ミガキ・赤彩
331	316	C1	SQ53b No. 8	弥生	中期	栗林式？	高杯	赤彩（摩耗して不明瞭）	ナデ
332	314	C1	SQ53・SQ53b Ⅲ層1区・Ⅲ層4区	弥生	中期	栗林式？	高杯	ミガキ・赤彩	摩耗で不明瞭
333	408	C2	SQ57 Ⅲ層	弥生	中期	栗林式？	高杯	赤彩+ミガキ	赤彩
334	426	C2	SQ55 No. 43	弥生	中期？		鉢	赤彩+ミガキ	赤彩
335	425	C2	SQ55 No. 49	弥生	中期？		鉢	赤彩+ミガキ	赤彩+ミガキ
336	338	C	TP4（SQ53b）Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	ナデ（摩耗で不明瞭） 口唇部LR単節	ナデ
337	321	C1	SQ53 Ⅲ層	弥生	中期	栗林式？	壺	ナデ 口唇LR単節	ナデ→LR単節
338	340	C1	SQ53b No. 54	弥生	中期	栗林式	壺	ハケ→横ミガキ口唇LR単節	ミガキ
339	436	C2	Ⅲa層	弥生	中期	栗林式	甕	口唇：LR単節（外面摩耗）	摩耗して不明
340	335	C1	SQ53b Ⅲ層	弥生	中期	栗林式？	壺	ハケ+LR単節→ミガキ	ナデ
341	517	C1	SQ53 No. 26	弥生	中期	栗林式	壺	ミガキ→懸垂文（櫛描文充填）	ナデ
342	516	C1	SQ53 No. 23	弥生	中期	栗林式	壺	ミガキ→懸垂文（櫛描文充填）	ナデ
343	325	C1	SQ53b Ⅲb2層中4区	弥生	中期	栗林式	壺	ハケ→懸垂文（櫛描文）→LR単節縄文→山形沈線文（縦）	ハケC
344	339	C1	SQ53 Ⅲ層	弥生	中期	栗林式	壺	ﾊｹ→懸垂文（櫛描直線文文充填）+横走沈線（櫛描波状文充填）	摩耗して不明
345	522	C1	SQ53b No. 54	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB→横走沈線文→押引き文	指頭圧痕
346	432	C1	Ⅲ層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケA→横走沈線→押引き文	頸部：ミガキ。胴部：ハケB
347	410	C2	SQ57 Ⅲ層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB→横走沈線	ハケB（摩耗して不明瞭）
348	519	C1	SQ53b No. 58	弥生	中期	栗林式	壺	ハケA→櫛描文直線→櫛描波状文（2本一単位）	ナデ→ハケA
349	518	C1	SQ53b Ⅲ層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケA→櫛描直線文→横走沈線文+波状沈線文	摩耗して不明
350	520	C1	SQ53b No. 58	弥生	中期	栗林式	壺	ハケA→櫛描直線文→波状沈線文	ハケA
351	328	C1	SQ53b Ⅲb層	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→横走沈線+重三角文→ボタン状貼付	ナデ
352	331	C	TP4（SB53b）	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→貼付→横走沈線	ナデ
353	327	C1	SQ53 b No. 58	弥生	中期	栗林式？	壺	ハケA→ハケC→櫛描波状文	ハケA
354	390	C2	SQ56 Ⅲ層	弥生	中期	栗林式？	壺	ケズリ？→横走沈線+擬似簾状文	ナデ
355	380	C2	SD90	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB→ナデ→櫛描直線文（5本1単位）→山形沈線文	ハケB
356	381	C2	SQ56 No. 132	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→横走沈線+波状沈線文	ナデ
357	329	C1	SQ53b No. 49	弥生	中期	栗林式？	壺	ハケC→ミガキ	ハケC
358	337	C1	SQ53b Ⅲ層4区	弥生	中期	栗林式？	壺	ハケB→ミガキ→横走沈線	
359	336	C1	SQ53b Ⅲ層	弥生	中期	栗林式？	壺	横走沈線文→刺突文	ナデ
360	326	C1	SQ53b No. 58	弥生	中期	栗林式	壺	ハケA→ナデ→横走沈線文+重三角文	ハケA
361	418	C2	SQ55 No. 12	弥生	中期	栗林式	壺	ハケB→ミガキ→横走沈線+連弧文	ハケB（摩耗して不明瞭）
362	343	C1	SQ53 No. 32	弥生	中期	栗林式	壺	横走沈線+連弧文→撚糸文	摩耗して不明
363	417	C2	SQ55 No. 99	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→横走沈線+連弧文？	摩耗いして不明
364	320	C1	SQ53b No. 40	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→連弧文	
365	431	C1	TP5 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	ナデ→懸垂文・LR単節→ボタン状貼付文	摩耗して不明
366	396	C2	SQ57 Ⅲb層	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→横走沈線文+櫛描直線文（7本1単位）→ボタン状貼付文	ハケB→ナデ
367	416	C2	SQ55 No. 101	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→重三角文	摩耗いして不明
368	344	C1	SQ53 No. 32	弥生	中期	栗林式	壺	複合鋸歯文	ナデ
369	319	C1	SQ53b Ⅲ層4区・Ⅲb2層下4区	弥生	中期	栗林式	壺	横走沈線+波状沈線→押引き文	ナデ
370	388	C2	SQ56 No. 122	弥生	中期	栗林式	壺	ハケA→LR単節→横走沈線文+波状沈線文+重山形文	摩耗して不明

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
371	330	C1	SQ53 No. 23	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節平→懸垂文+横走沈線+重三角文	ハケB
372	323	C1	SQ53b No. 15・42・Ⅲ層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケ→ミガキ→重菱形文	ハケA?（剥落して不明瞭）
373	324	C1	SQ53b	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→重三角文	
374	322a	C1	SQ53 No. 8・Ⅲ層・Ⅲ層下部	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→重三角文	ハケB→ナデ
375	322b	C1	SQ53 No. 8・Ⅲ層・Ⅲ層下部	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→重三角文	ハケB→ナデ
376	515	C1	SQ53b4区 Ⅲb層上, Ⅲb層下・Ⅲb層	弥生	中期	北陸系	壺	ハケ+ナデ	ハケ
377	342	C1	SQ53b Ⅲb層4区	弥生	中期	栗林式	壺or甕	口唇部：LR単節 口縁部：ナデ→LR単節→山形沈線文	ナデ
378	310	C1	SQ53b No. 15・Ⅱ・Ⅱ層	弥生	中期？		甕	ハケ	ハケ
379	311	C	TP4(SQ53b) 1層	弥生	中期？		甕	ナデ→ハケ	ナデ
380	386	C2	SQ56 No. 126	弥生	中期前葉？		甕	条痕文？	ナデ
381	402	C2	SQ57 Ⅲ層下部	弥生	中期	栗林式？	甕	条痕文？	ハケB？
382	382	C2	SQ56 No. 119	弥生	中期？		甕	ハケC→櫛描直線文（1単位2本以上）	ミガキ
383	403	C2	SQ57 Ⅲ層下部	弥生	中期	栗林式	甕	ハケB→櫛描斜縄文	ヨコミガキ
384	407	C2	SQ57 Ⅲ層	弥生	中期	栗林式	甕	ハケB→櫛描斜縄文	ハケB→ミガキ
385	422	C2	SQ55 No. 100	弥生	中期	栗林式	甕	ハケB→櫛描縦羽状文	ハケB
386	437	C2	Ⅲa層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描斜線文→櫛描波状文（7本1単位）	ヨコミガキ
387	409	C2	SQ57 Ⅲb層	弥生	中期中葉？		甕	縦走沈線→横走沈線 擬似後根？	ハケB→ナデ
388	404	C2	SQ57 No. 17	弥生	中期？		甕	ハケB→櫛描直線文（横→縦） 擬似条痕？	ハケB→ミガキ
389	400	C2	SQ57 No. 14	弥生	中期	栗林式	甕	ハケB→櫛描波状文（7本1単位）	ヨコミガキ
390	434	C2	Ⅲb層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描波状文→櫛描懸垂文（3本1単位）	ミガキ？
391	423	C2	排水溝	弥生	中期	栗林式	甕	ハケB→櫛描波状文(5本1単位)	ハケB→ミガキ
392	395	C2	SQ57 Ⅲb層カ	弥生	中期	栗林式？	甕	ナデ→櫛描波状文(6本1単位)	ハケB
393	309	C1	SQ53 No. 27	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描波状文	ミガキ
394	385	C2	SQ56 No. 113	弥生	中期？		甕	櫛描直線文+櫛描波状文（8本1単位）	ミガキ?（摩耗して不明瞭）
395	405	C2	SQ57 Ⅲb層	弥生	中期		甕	櫛描直線文→櫛描波状文（5本1単位）	ハケB→ナデ
396	389	C2	SQ56 No. 90	弥生	中期	栗林式	甕	ハケA→櫛描波状文（5本1単位） →刺突文A	ミガキ
397	401	C2	SQ57 No. 12	弥生	中期	栗林式	甕	LR単節→コの字重ね文	ヨコミガキ
398	523	C1	SQ53b Ⅲ層	弥生	中期	栗林式	甕	ハケ→ナデ→コの字重ね文	ナデ
399	308	C1	SQ53b No. 15	弥生	中期	北陸系	甕	ハケ	ナデ？。表面剥落で不明瞭。
400	345	C1	SQ53 No. 32	弥生	中期？		壺または甕	沈線	摩耗して不明
401	421	C2	SQ55 No. 31	弥生	中期？			ナデ	ミガキ
402	318	C1	SQ53 No. 25	弥生	中期	栗林式	鉢	ナデ→LR単節→横走沈線	ナデ
403	427	C2	SQ55 Ⅲ層	弥生	中期？		鉢	口唇：LR単節 外面一部赤彩瓶	赤彩+ミガキ。
404	399	C2	SQ57 No. 15	弥生	中期？		鉢	ハケB→ミガキ	ミガキ
405	474	D	DEC No. 1	弥生	中期	栗林式	壺	口唇部：LR単節 頸部：横走沈線+LR単節？+波状沈線	口縁部：刺突文B
406	452	D	西ベⅡ層	弥生	中期	栗林式	甕	口唇：LR単節→重山形文	ナデ？
407	540	D2	SQ58 No. 17	弥生	中期	栗林式	壺	口唇：LR単節 ハケ→ナデ	ハケC→ナデ
408	544	D2	SQ58 No. 27	弥生	中期	栗林式	壺	赤彩	摩耗して不明
409	537	D2	SQ58 No. 7	弥生	中期	栗林式	壺	無文	摩耗して不明
410	538	D2	SQ58 No. 8	弥生	中期	栗林式？	甕	無文	摩耗して不明
411	513	D	SK2343 No. 2	弥生	中期？		壺or甕	摩耗して不明	ハケB→ナデ？
412	506	D	IX115 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	高杯	赤彩	赤彩
413	552	D2	SQ60 No. 1	弥生	中期	栗林式？	高杯	赤彩（剥落著しい）	坏部：赤彩
414	456	D	西Ⅱb層	弥生	中期	栗林式？	壺	口唇：LR単節 沈線	ナデ？（摩耗して不明瞭）

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
415	455	D	西Ⅱb層	弥生	中期	北陸系	壺	ナデ	羽状刺突文。
416	492	D	西ベⅡ層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケA→LR単節→横走沈線文	ナデ？
417	556	D2	SQ58 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	ハケ→LR単節→沈線	ハケA
418	535	D2	SQ58 Ⅱ層下	弥生	中期	栗林式	壺	懸垂文（波状沈線文+波状櫛描文）	摩耗して不明
419	444	D	Ⅱ層	弥生	中期？		壺	ナデ→櫛描垂下文a	ハケA→櫛描文？
420	539	D2	SQ58 No. 15	弥生	中期	栗林式	壺	LR単節→重山形沈線文	ハケB→ナデ
421	547	D2	SQ58 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	壺	重三角沈線文（摩耗）	摩耗して不明
422	438	D	1T Ⅱ層土坑8	弥生	中期	栗林式	壺	ナデ→重三角文→LR単節	ハケC+ナデ
423	549	D2	SQ58 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	甕	口唇：RL単節？ 口縁端部刺突	ミガキ
424	541	D2	SQ58 No. 21・Ⅱ層・Ⅱ層最下	弥生	中期	栗林式	甕	口唇：LR単節 口縁：LR単節→波状沈線文	ハケ→ナデ
425	536	D2	SQ58 カクラン、Ⅱ層下	弥生	中期	栗林式	甕	口唇：LR単節 口縁～胴部：LR単節→山形沈線文　櫛描直線文　ハケB→櫛描斜線文	ハケB→ナデ
426	484	D	SD86	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描羽状文？	ハケB
427	542	D2	SQ58 No. 23・Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描直線文	ハケ→ナデ
428	461	D	西Ⅱa層	弥生	中期？		甕	細沈線による横羽状文	ナデ？
429	557	D2	Ⅸ103 Ⅰ層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描羽状文	ミガキ。黒色処理?
430	548	D2	SQ58 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	甕	ハケ→櫛描縦羽状文(8本1単位)	ハケB→ミガキ
431	450	D	Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描垂下文a→櫛描波状文a+刺突文B	ハケB→ミガキ
432	550	D2	SQ58 Ⅱ層	弥生	中期	異系統か？	甕	波状沈線文+沈線文+櫛描波状文(6本1単位)	摩耗して不明
433	449	D	Ⅸ115 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描波状文→刺突文B	ミガキ
434	491	D	Ⅱ層下面	弥生	中期	栗林式	甕	櫛描波状文→波状沈線文	ミガキ
435	546	D2	SQ58 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	甕	ハケ→櫛描波状文→櫛描縦羽状文（6～7本1単位）	ハケB
436	543	D2	SQ58 No. 25	弥生	中期	栗林式	甕	ハケ→ナデ 櫛描波状文(3～4本1単位)	ハケB→ナデ
437	553	D2	SQ58 Ⅱ層最下	弥生	中期？		甕	櫛描直線文（横→立）（2本1単位）	摩耗して不明
438	476	D	SD86	弥生	中期	栗林式	甕	LR単節→コの字重ね文	ミガキ
439	555	D2	SQ58 Ⅱ層	弥生	中期	栗林式	鉢	口唇：LR単節 口縁：沈線→LR単節→ボタン状貼付文→刺突文B	ミガキ
440	490	D	SQ51 Ⅱ層下面	弥生	中期？		高杯	ハケ→ナデ	赤彩
441	357	C2	SD91西側 Ⅲb層	弥生	後期	吉田式	壺	櫛描波状文	赤彩
442	496	C1	SQ53b Ⅲ層	弥生	後期	吉田式	壺	口縁端部：赤彩 口縁部：ミガキ	赤彩
443	493	C1	SQ53b Ⅲ層4区	弥生	後期	吉田式	壺	ハケA→ミガキ→櫛描直線文ｏｒ簾状文（6本1単位）？→ミガキ	赤彩
444	383	C2	SQ56 No. 130	弥生	後期	箱清水式？	高杯	赤彩+ミガキ	赤彩（摩耗して不明瞭）
445	495	C	TP4 (SQ53b) Ⅱ層	弥生	後期	吉田式？	壺	横走沈線＋刺突文	ナデ
446	348	C	TP4 (SQ53b) Ⅱ層	弥生	後期	箱清水式？	壺	櫛描波状文+赤彩	ハケC（摩耗して不明瞭）
447	387	C2	SQ56 Ⅲ層	弥生	後期	吉田式？	壺	櫛描直線文→櫛描垂下文a	ハケB→ナデ
448	494	C1	SQ53b Ⅲ層	弥生	後期	吉田式？	壺	櫛描直線文＋赤彩？	ハケB
449	424	C2	SQ55 Ⅱ層	弥生	後期		甕	ハケB+ナデ	摩耗して不明
450	498	C1	SQ53b No. 1	弥生	後期	吉田式～箱清水式	甕	櫛描波状文（6本?一単位）	ミガキ
451	497	C1	SQ53b No. 1	弥生	後期	吉田式～箱清水式	甕	ハケB→櫛描直線文→櫛描波状文（8本1単位）	ミガキ
452	384	C2	SQ56 No. 116	弥生	後期？	不明	甕	ハケB→櫛描文	ハケB
453	415	C2	不明	弥生?	中期？		土製円板	ハケ→ナデ	ナデ？
454	414	C2	SQ55 No. 95	弥生	中期？		土製円板	ミガキ	ハケ→ナデ
455	392	C2	SQ56 No. 120	弥生	中期	栗林式	土製円板	櫛描羽状文	ハケ
456	454	D	西Ⅱb層	弥生	中期～後期		土製円板	摩耗して調整不明	摩耗して調整不明
457	413	B	2T	弥生	中期	栗林式	土製円板	ナデ→櫛描羽状文？	ミガキ

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
458	372	C2	SD91 砂層	弥生	中期？		土製円板	ミガキ	ミガキ
459	446	D	IX115 Ⅱ層	弥生	中期？		ミニチュア	ナデ？	ナデ？
460	601	C1	SQ53b No. 1	古墳	中期	土師器	杯	ミガキ	ミガキ
461	602	C1	SQ53b No. 19	古墳	中期	土師器	杯	ミガキ	ミガキ
462	603	C2	SQ55 No. 16・Ⅲ層	古墳	中期	土師器	小形壺	ハケ→ミガキ	ミガキ
463	611	C2	SQ57 Ⅲ層	古墳	前期	土師器	壺	ナデ	ナデ？
464	604	C2	SQ55 Ⅲ層	古墳	前期	土師器	甕	ナデ	ナデ
465	610	C2	SQ55 No. 38	古墳	中期	土師器	甕	摩耗して不明	摩耗して不明
466	608	D	SD85	古墳	前期	土師器	甕	摩耗して不明	摩耗して不明
467	753	C1	SQ52 Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	杯	ロクロナデ	ロクロナデ
468	754	C1	SQ52 Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	杯	底部回転糸切	ロクロナデ
469	769	C1	SQ53 No. 3・43	奈良・平安		須恵器	杯	底部回転糸切	ロクロナデ
470	756	C1	SQ52 Ⅲ層	奈良・平安		内黒土師器	杯	底部回転糸切→圧痕	黒色処理
471	755	C1	SQ52 Ⅲ層	奈良・平安		内黒土師器	杯	底部回転糸切→圧痕	黒色処理
472	757	C1	SQ52 Ⅲ層	奈良・平安		土師器	甕	底部回転糸切	ロクロナデ？
473	701	C1	SQ53 No. 6・Ⅲ層・Ⅲ層下部	奈良・平安		土師器	円筒形土製品	ケズリ	ナデ
474	713	C2	SQ55 Ⅲ層 No. 3	奈良・平安		須恵器	杯	ロクロナデ	ロクロナデ
475	732	C2	SQ56 Ⅲa層・Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	杯	ロクロナデ	ロクロナデ
476	741	C2	SQ56 No. 71	奈良・平安		須恵器	杯		
477	746	C2	SQ56 No. 19	奈良・平安		須恵器	杯		
478	743	C2	SQ56 Ⅲa層	奈良・平安		須恵器	杯	ロクロナデ 底部：回転糸切	ロクロナデ
479	702	C2	SQ55 Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	杯	底部回転糸切	
480	708	C2	SQ55 No. 1・4・Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	杯	底部回転糸切	
481	712	C2	SQ55 No. 8	奈良・平安		須恵器	杯	底部回転糸切	
482	705	C2	SQ55 Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	杯	底部回転糸切	
483	722	C2	SQ55 No. 86・Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	杯	底部回転糸切	
484	721	C2	SQ55 No. 71	奈良・平安		須恵器	杯	底部回転糸切	
485	716	C2	SQ55 No. 72	奈良・平安		須恵器	杯	底部回転糸切	
486	714	C2	SQ55 No. 28	奈良・平安		須恵器	杯		
487	706	C2	SQ55 Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	杯蓋		
488	733	C2	SQ56 Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	蓋	ロクロナデ	ロクロナデ
489	723	C2	SQ55 Ⅲ層	奈良・平安		内黒土師器	杯		黒色処理
490	724	C2	SQ55 No. 53・85・Ⅲ層	奈良・平安		内黒土師器	杯		
491	750	C2	SQ56 No. 10・Ⅲ層	奈良・平安		内黒土師器	杯		
492	748	C2	SQ56 No. 24・Ⅲa層	奈良・平安		内黒土師器	杯		
493	735	C2	SQ56 Ⅲa層	奈良・平安		内黒土師器	杯	ロクロナデ→底部付近ケズリか？ 底面：ケズリか？	黒色処理
494	749	C2	SQ56 No. 8・73	奈良・平安		内黒土師器	杯	ロクロナデ→底部付近ケズリ 底面：ケズリか？（摩耗して不明瞭）	黒色処理
495	739	C2	SQ56 No. 27・70・74・84・106・Ⅲ層	奈良・平安		内黒土師器	杯		
496	752	C2	SQ56 No. 25	奈良・平安		内黒土師器	杯	ロクロナデ→底部付近ケズリ 底面：静止ヘラケズリ	黒色処理
497	751	C2	SQ56 No. 30	奈良・平安		内黒土師器	杯	ロクロナデ→底部付近ケズリ 底面：静止ヘラケズリ	黒色処理
498	767	C1	SQ53 No. 14・Ⅲ層	奈良・平安		内黒土師器	杯		
499	745	C2	SQ56 No. 30	奈良・平安		内黒土師器	碗	ロクロナデ	黒色処理
500	742	C2	SQ56 No. 28・96	奈良・平安		内黒土師器	杯	摩耗して調整不明瞭	黒色処理。
501	747	C2	SQ56 No. 24	奈良・平安		内黒土師器	甕	底部：回転糸切→回転ヘらケズリ→高台設置	黒色処理
502	715	C2	SQ55 No. 4	奈良・平安		灰釉陶器	碗		
503	758	C2	Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	壺		

図版番号	管理番号	地区	出土位置	時代	時期	型式・種類	器種	文様・施文・外面調整	内面調整
504	737	C2	SQ56 No. 15・Ⅲa層・Ⅲ層・Ⅱ層上部	奈良・平安		須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ
505	703	C2	SQ55 Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	壺	ロクロナデ	
506	738	C2	SQ56 No. 12	奈良・平安		土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ
507	718	C2	SQ55 No. 66	奈良・平安		土師器	甕	ナデ	摩耗して不明瞭
508	730	C2	SQ56 Ⅲa層	奈良・平安		土師器	甕	ロクロナデ	ハケメ+ロクロナデ
509	731	C2	SQ56 No. 44	奈良・平安		土師器	甕	ケズリ	ハケ
510	709	C2	SQ55 Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	甕	タタキ→ナデ	ロクロナデ
511	710	C2	SQ55 Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	甕	タタキ	ナデ
512	707	C2	SQ55 No. 54・Ⅲ層	奈良・平安		須恵器	甕	タタキ	ナデ→ハケ
513	717	C2	SQ55 No. 54	奈良・平安		須恵器	甕	タタキ	ナデ
514	729	C2	SQ56 No. 66	奈良・平安		土師器	甕	タタキ	摩耗して不明
515	727	C2	SQ56 Ⅲ層	奈良・平安		土師器	甕	タタキ	ナデ
516	728	C2	SQ56 Ⅲa層	奈良・平安		土師器	甕	タタキ	あて具痕
517	719	C2	SQ55 No. 67	奈良・平安		土師器	甕	ケズリ	ハケ
518	762	D	Ⅱ層	奈良・平安		須恵器	杯	底部回転糸切	ロクロナデ
519	771	D2	Ⅱ層	奈良・平安		須恵器	杯蓋	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ
520	766	D	SQ51 Ⅱ層	奈良・平安		内黒土師器	杯	底部静止ヘラケズリ 胴部下端部ケズリ	黒色処理
521	770	D2	Ⅱ層	奈良・平安		土師器	小甕	底部回転糸切	ロクロナデ
522	763	D	Ⅱ層	奈良・平安		土師器	甕	ロクロナデ?	ロクロナデ?
523	764	D	Ⅱ層	奈良・平安		須恵器	甕	タタキ	ナデ
524	765	D	不明	奈良・平安		須恵器	甕	タタキ	ナデ
525	923	A	SD82 下層	中世			内耳鍋		
526	926	B2⑦	Ⅰ層	中世			内耳鍋	ナデ	ナデ
527	914	C1	TP1 b Ⅱ層	中世			内耳鍋		
528	928	D2	排水トレンチ	中世以降		青磁	碗		
529	917	C2	Ⅱc層	近世以降		陶器	皿		
530	927	D2	Ⅰa層	近世		磁器	碗		
531	909	C2	SD87・88検	近世以降		瓦器	碗		
532	908	C2	SD87・88検	近世以降		磁器	碗		
533	907	C2	SD87・88検	近世以降		磁器	碗		
534	911	C2	西ｶﾍﾞⅡ層	近世		磁器	碗		
535	912	C2	西ｶﾍﾞⅡ層	近世		磁器	碗		
536	913	C1	SQ52 Ⅲ層	中世		すり鉢			
537	916	C2	Ⅱc層	中世		すり鉢			
538	925	C1	SQ53b Ⅲ層	中世		珠洲焼	甕	タタキ	
539	902	C1	TP4(SQ53)	中世		珠洲焼	甕	タタキ	ナデ

金属器観察表

図版番号	管理番号	X線撮影No.	地区	出土位置	取上No.	時期	素材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	3002	AYSB_2	C2	SQ55Ⅲ層		平安	鉄	棒状鉄製品	(7.4)	0.5	0.7	4.9
2	3003	AYSB_3	C2	SQ56	11	平安	鉄	棒状鉄製品	(7.2)	0.9	1.1	7
3	3001	AYSB_1	C2	SQ55カクラン		平安	鉄	刀子	(11.6)	1.4	0.5	12.8

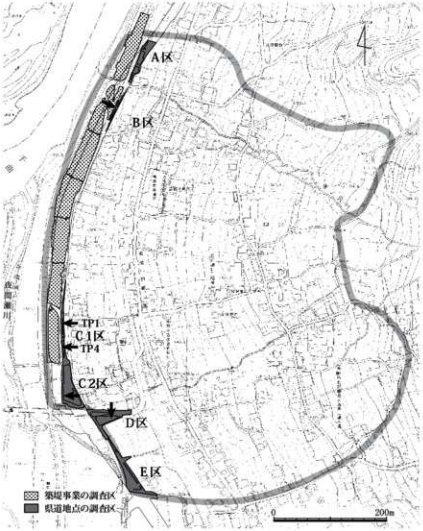
※法量の（　）内の数値は、欠損品の残存値を示す。

石器観察表

図版番号	管理番号	地区	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	1003	C	SQ53b No.59	石鏃	安山岩	4.08	1.73	0.49	3.41	
2	1002	B	SQ54Ⅲ層	石鏃	黒曜石	2.52	1.22	0.46	1.17	
3	1001	B	2T北Ⅲ層	石鏃	黒曜石	2.62	1.81	0.37	0.96	
4	1034	B2①	Ⅱc層	石鏃	黒曜石	(1.46)	1.83	0.32	0.91	
5	1035	B2①	Ⅱc層	石鏃	黒色安山岩	(1.71)	(1.68)	0.37	1.06	
6	1036	B2①	Ⅱc層	石鏃未成品	無斑晶質安山岩	4.38	3.51	1.51	23.99	
7	1037	B2①東	Ⅱc層	石鏃未成品	チャート	4.37	3.12	1.47	16.09	
8	1006	D	SQ51 No.94	掻削器	黒曜石	3.48	1.39	0.61	3.09	
9	1005	C1	TP4Ⅰ層	石錐	チャート	2.06	2.69	0.84	4.67	
10	1004	B	SB612層	石錐	チャート	1.26	1.46	0.34	0.47	
11	1008	B	2T北Ⅲ層	削器	無斑晶質安山岩	8.46	3.98	1.28	39.03	
12	1017	B	2T北Ⅲ層	打製石斧	黒色粘板岩	8.96	22.90	1.06	27.13	
13	1014	B	2T北Ⅲ層	磨製石斧	不明	14.99	6.65	3.96	626.1	
14	1021	B	2T北Ⅲ層	打製石斧	黒色粘板岩	15.40	5.78	2.04	196.40	
15	1019	B	2T北Ⅲ層	打製石斧	黒色安山岩	12.90	5.94	2.22	18.37	
16	1032	B	2T北Ⅲ層	打製石斧	黒色安山岩	(8.28)	4.88	2.5	124.85	側面に摩耗痕
17	1018	D	SQ51Ⅱ層	打製石斧	黒色安山岩	11.50	4.15	2.09	98.96	
18	1020	B	2T北Ⅲ層	打製石斧	黒色安山岩	(10.89)	5.50	1.28	86.15	
19	1047	B2②	Ⅱc層(礫中)	打製石斧	黒色安産岩	10.34	4.13	1.58	96.24	刃部に顕著な摩耗痕
20	1048	B2②	Ⅱc層(礫中)	打製石斧	黒色安産岩	(10.25)	4.79	1.51	109.87	
21	1049	B2③	ｶｸﾗﾝ	打製石斧	黒色安産岩	(15.53)	6.68	1.68	211.77	刃部に顕著な摩耗痕
22	1050	B2②	Ⅱc層	打製石斧	黒色安産岩	(6.76)	4.48	1.26	49.88	
23	1052	B2①	SQ59Ⅱc層礫下	打製石斧	黒色安産岩	(4.81)	(4.34)	1.45	28.85	
24	1053	B2①	SQ59Ⅱc層礫下	打製石斧？	安産岩	10.83	5.16	1.89	114.54	石片の可能性あり
25	1041	B2④	Ⅱc層	石錘	輝石安山岩	(4.99)	(8.08)	1.39	78.67	
26	1043	D2	SQ58Ⅱ層	石核	緑色凝灰岩	7.07	5.08	3.86	130.32	
27	1044	D2	Ⅰ層	石核	チャート	3.43	6.31	5.67	98.29	
28	1042	D2	Ⅱ層最下部	石核	チャート	6.11	4.4	2.41	58.52	
29	1045	B2②	Ⅱc層(礫中)	敷石破片？	輝石安山岩	(6.03)	(6.16)	3.53	288.57	
30	1024	C	SQ56Ⅲa層	刃器	輝石安山岩	7.44	5.33	0.81	31.10	
31	1025	C	SD91砂礫層	刃器	輝石安山岩	5.53	6.48	1.10	45.90	
32	1026	C	SD91	閃石	不明	(5.94)	7.08	3.31	256.50	
	1038	B2⑩	Ⅱ層	楔形石器	チャート	2.49	(1.16)	0.39	1.02	
	1010	B	SB61_1層	re,Fl	黒曜石	1.56	1.59	0.52	1.54	
	1011	B	T2北	re,Fl	黒曜石	3.87	1.11	0.90	4.48	
	1012	B	2T北包含層	u,Fl	黒曜石	(2.19)	2.29	0.28	1.87	
	1013	B	SK2334	u,Fl	黒色安山岩	4.92	2.83	0.75	11.31	
	1040	B2①東	Ⅱ層	u,Fl	チャート	3.72	3.92	0.59	7.79	
	1039	B2⑤	Ⅱc層礫中	石核	黒曜石	3.69	2.54	1.14	7.15	
	1009	B	2T北Ⅲ層	挟入削器	粘板岩	(7.22)	(6.29)	1.29	59.89	
	1027	C	TP4Ⅱ層	軽石	軽石	4.55	2.89	2.84	9.5	
	1028	C	TP4Ⅱ層	軽石	軽石	4.29	3.33	2.30	8.69	
	1007	B	2T北Ⅰ層	削器	無斑晶質安山岩	(6.16)	(2.33)	1.23	12.76	
	1015	B	SB61_2層	磨製石斧破片	蛇紋岩	(3.16)	(2.35)	(0.80)	5.56	
	1016	B	2T北Ⅲ層	打製石斧	黒色安山岩	9.30	5.80	1.90	126.72	
	1033	B	2T北Ⅲ層	打製石斧	黒色安山岩	(6.79)	5.83	1.58	62.15	
	1051	B2①	SQ59Ⅱc層礫下	打製石斧調整剥片	黒色安産岩	2.94	2.76	0.46	3.69	
	1022	B	SQ54Ⅲ層	刃器	輝石安山岩	(9.08)	(9.95)	1.24	186.07	
	1023	C	SQ53bⅢ層礫下	刃器	輝石安山岩	(4.33)	(3.58)	(0.97)	14.36	
	1030	C2	SD87	砥石	粘板岩	6.47	2.33	(1.23)	33.3	
	1029	B	SQ54が2層	焼け礫	不明	10.97	5.53	4.01	200.94	
	1031	B	北ハシⅢ層茶褐	石版	粘板岩	(4.38)	(2.40)	0.32	5.6	
	1046	B2①	Ⅱc層	被熱痕がある石片	輝石安山岩	(7.09)	(4.36)	1.08	33.85	

※re.Fl：二次加工がある剥片　　u.Fl：微細な剥離がある剥片
※法量の（　）内の数値は、欠損品の残存値を示す

写真図版

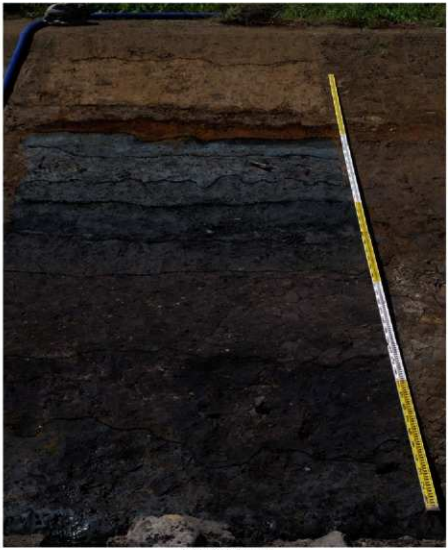


PL1　土層写真撮影場所

B区土層

C1区土層（TP1）

C1区土層（TP4）



C2区南端部土層

D区土層（TP1）

PL2　遺跡遠景１

遺跡遠景（西から）

調査区遠景（南から）

調査区遠景（北西から）

A区南　全景（西から）

A区南　全景（南から）

A区中　全景（北西から）

A区　ST11（東から）

B区　SB61（北西から）

B2区　SQ59全景（南から）

B2区　SQ59遺物出土状況（東から）

B2区　SQ59遺物出土状況（東から）

B区　全景（2018年撮影）

C1区　TP1b（南から）

C1区　TP1b　SQ52遺物出土状況（南から）

C1区　TP1b　SQ52遺物出土状況（北西から）

C1区　TP1b東壁　礫除去後（北西から）

C1区　TP2（南西から）

C1区　TP3北壁土層（南から）

C1区　TP5（南から）

C1区　TP5北壁土層（南から）

C1区　SQ53土器出土状況１（南から）

C1区　SQ53土器出土状況２（南から）

C1区　SQ53土器出土状況３（南から）

C1区　SQ53土器出土状況４（東から）

C1区　TP4全景（南から）

C1区　TP4全景（北から）

C2区　SQ55・56遺物出土状況（南から）

C2区　SQ56・57遺物出土状況（南から）

C2区　SD91（北から）

C2区　SD91（南から）

C2区　全景（南から）

D1区　SQ51（南から）

D1区　SQ51完掘（南から）

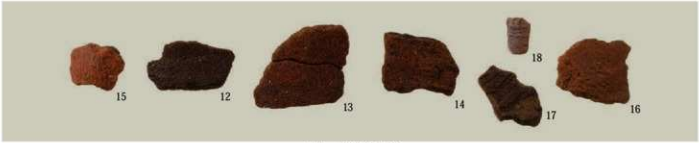
D2区　検出状況（南西から）

D2区　SQ58土器出土状況

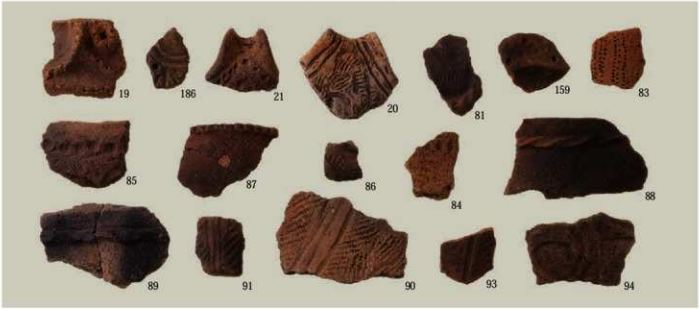
D2区　完掘全景（西から）

D1区　全景（西から）

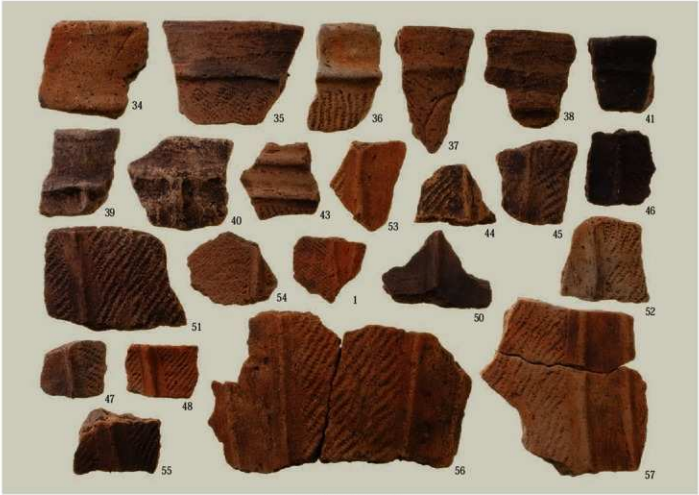
D1区　北壁土層（南東から）



早期・前期の土器



中期の土器（A区・B区）

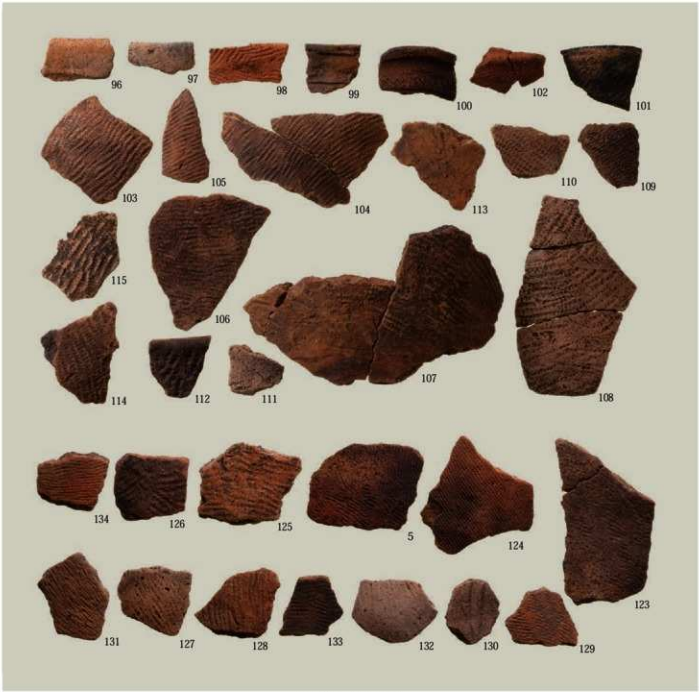


中期の土器（B区）

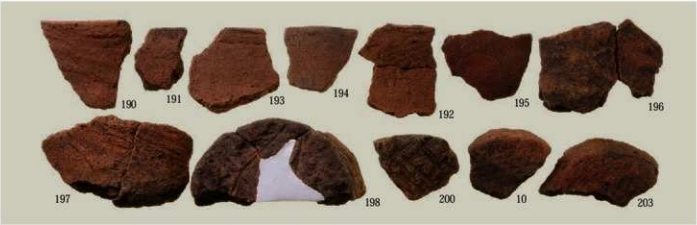
中期の土器（B区）

中期の土器（B区）

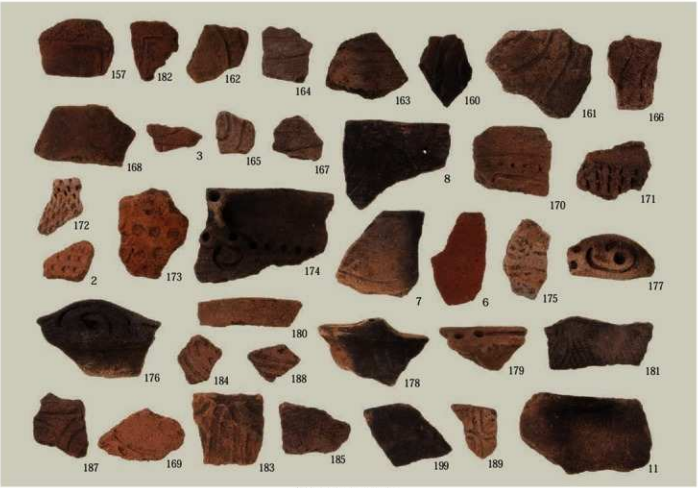
中期の土器（Ｂ区）



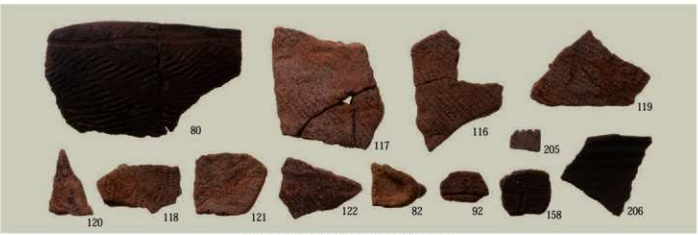
中期の土器（Ｂ区）



中期・後期の土器（Ｂ区）



後期の土器（Ｂ区）

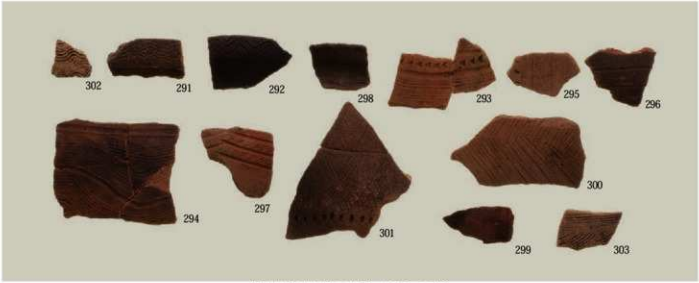


中期・後期・晩期の土器（Ｃ区・Ｄ区）

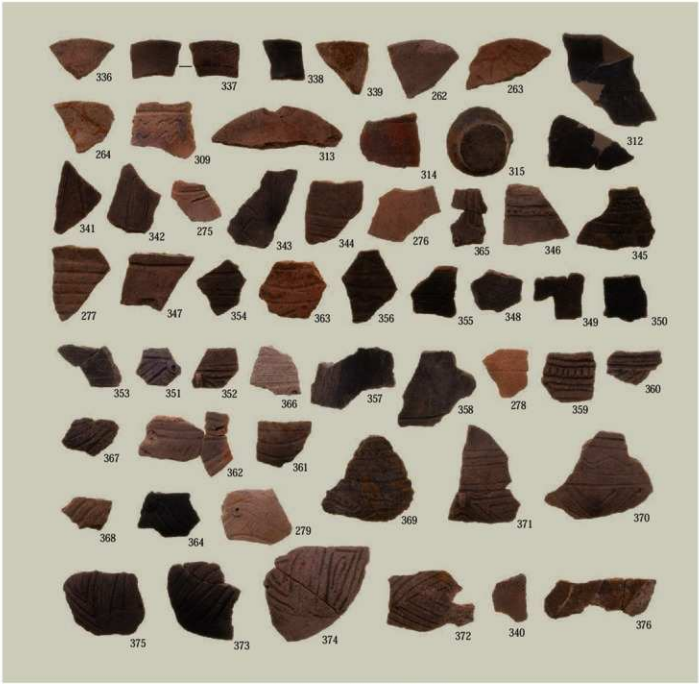
中期の土器（C区・D区）

中期の土器SB62（SQ51）

中期の土器SB62（SQ51）



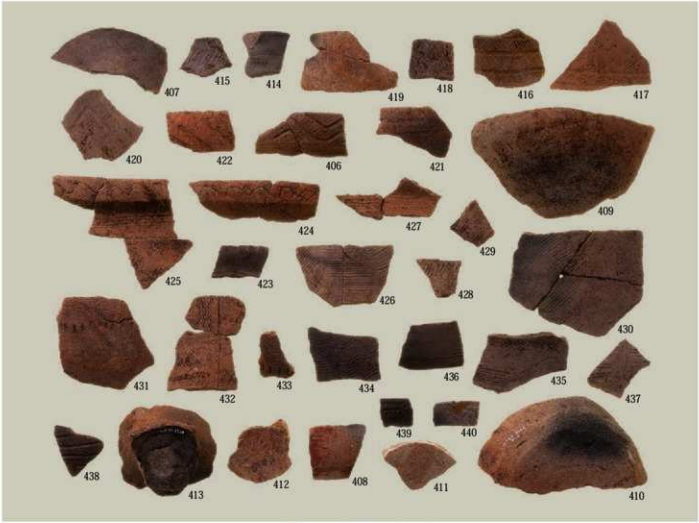
遺構外出土中期の土器（A区・B区）



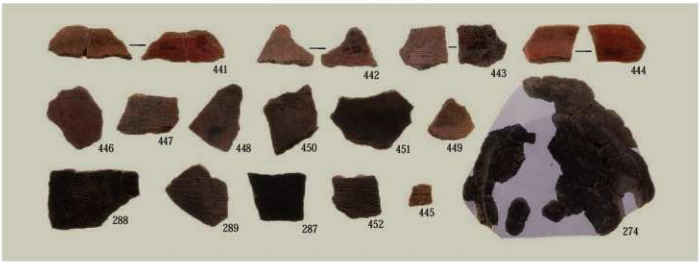
遺構外出土中期の壺形土器（C区）

遺構外出土中期の甕形土器（C区）

遺構外出土中期の高杯・鉢形土器他（C区）



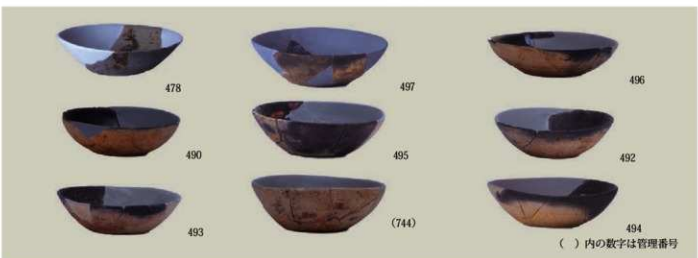
遺構外出土中期の土器（D区）



遺構外出土後期の土器（C区）

土製品・ミニチュア土器

遺構外出土の土師器（C区）

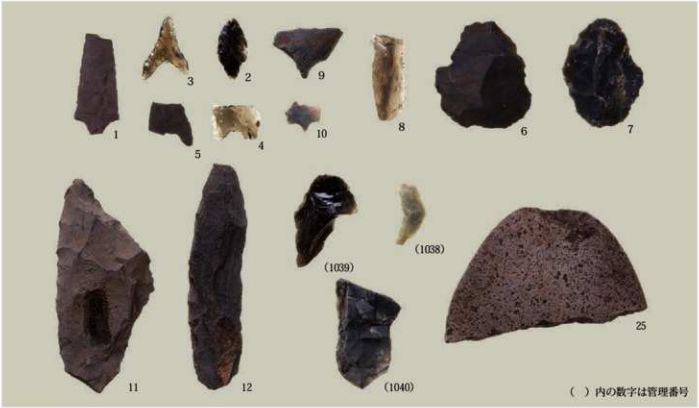


遺構外出土の須恵器・土師器（C区）

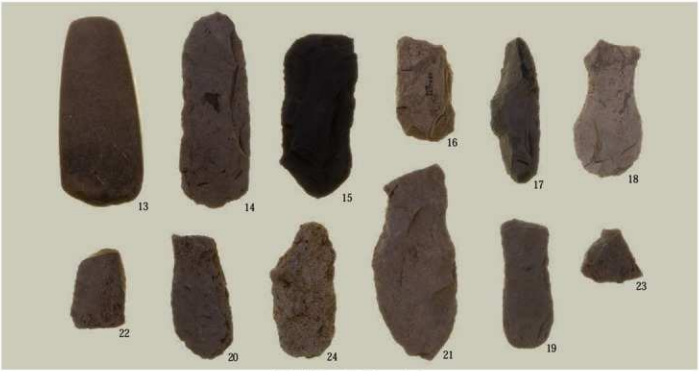
遺構外出土の須恵器・土師器（C区）

平安時代の須恵器・土師器

中世以降の土器・陶磁器



縄文時代の石器（約２／３）



縄文時代の石器（約１／３）

弥生時代の石器（約１／２）

報告書抄録

ふ り が な	なかのし　やなぎさわいせき
書　　名	中野市　柳沢遺跡
副　書　名	一般県道中野飯山線　道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	126
編 著 者 名	鶴田典昭　平林　彰
編 集 機 関	(一財) 長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田963-4　℡. 026-293-5926
発 行 年 月 日	2019年9月13日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
柳沢遺跡（やなぎさわいせき）	長野県（ながのけん）中野市（なかのし）大字柳沢（おおあざやなぎさわ）字日焼52-1他	202118	176	36°48′01″（世界測地系）	138°21′27″（世界測地系）	20161003～20161109 20161110～20061124（確認調査） 20170414～20171002 20180905～20181103	900㎡ 5,220㎡ 3,350㎡ 630㎡	一般県道中野飯山線改築事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳沢遺跡	集落跡	縄文時代	土坑、遺物集中	中期・後期土器、石器	
		弥生時代	溝跡	中期土器	築堤地点の水田に伴う溝跡の続きを調査
		古墳時代		土師器（前期・中期）	
	水田跡	古代	土坑、遺物集中	土師器、須恵器、金属器	
		中世～近世	掘立柱建物跡、土坑、溝	陶磁器	

要　　約	検出した遺構は少ないが、弥生時代中期の竪穴建物跡と思われる遺構を検出した。この建物跡は、炉跡や柱穴が不明確だったため建物跡と断定するのに躊躇するが、土器の出土状況を勘案すると、築堤地点の集落域とは別に、青銅器埋納坑や礫床木棺墓群をはさんで異なる集落域が存在する可能性が高い。 また、縄文時代中期・後期、弥生時代中期、平安時代の土器が多数出土した。土器はまとまって出土しており、遺物集中として報告した。遺物集中は、水田域およびその周辺部に認められる。また、弥生時代の水田域はSD91（3号溝）を境としていたが、プラント・オパール分析の結果、平安時代には水田域が高社山側に拡張していたことも判明した。

2019年９月13日　　発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　126

柳沢遺跡

一般県道中野飯山線　道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行者　長野県北信建設事務所
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
Tel 026-293-5926　Fax 026-293-8157
E-Mail　info@naganomaibun.or.jp
印刷者　ほおずき書籍株式会社
〒381-0012　長野県長野市柳原2133-5
Tel 026-244-0235　Fax 026-244-0210